

彼らのルネサンス

ノイラーテム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユグドラシルに関わる都市伝説の一つに、『NPCを拠点から連れ出せる方法』が隠されていると言うモノがあった。

最終日に久しぶりに訪れたギルメンがそのことを口にした時、自分も試したことがあり荒唐無稽な嘘だと思ったモモンガだが、あえて信じることにした。

「アインズ・ウール・ゴウン最後の冒険ですね。必ず解き明かしましょう！」

そうすれば最後までいいは賑やかにゲームを終わることが出来ると思ったからだ。

認識に間違いがあったとしたら、NPCだけが目的ではないということである…。

目次

新世界へ	
プロローグ	1
異世界へ	7
新天地で	18
冒険の下拵え	26
まずは冒険してみよう	34
キマイラ退治	42
船上探索行	52
死霊と踊る	62
大錬金術師の遺産	71
外伝：タブラさんの伝言	87
タブラさん外伝：ルーンの詩	97
人々の成長	
新しい着想	112
霧の中を進む未来	119
ジャガーノート	127
コンペディウム	136
ジ・グラード	146
外伝：タブラさんの伝言2	161

新世界へ プロローグ

●青行燈ラストクエスト

幾つかの試行錯誤が過ぎ、残った一つが最後の試みだ。

失敗すると知っていたのでモモンガに悔いは無い。むしろ最後に友人と遊べて幸せだった。

あえて言うならば、この時間が永遠に続けば良いのに。ずっとユグドラシルが終わらなければ良いのに……という儂い願いのみだ。

「タブラさん。最後だしワールドアイテムを持たせてみましょう。流石にギルド解散はしたくないですからね」

自分か友人が一人でやるなら、本来はモモンガとて勝手に持ち出す許可を出せ無かった。だがNPCが外に出るなど不可能だと思っていた。だからこそ楽しい時間を過ごす為に、二分の二の票決だからだから良いかと自分を納得させる。

「モモンガさんは誰を連れて行く？ 護衛を兼ねてアルベドか、それともプレアデスの中で偵察スカウトの出来る者か。守護者するなら急がないと」

時間が押して居るから誰でも良いかと思うのだが、いやにタブラは具体的な注文を付けて来た。

いや、このこだわりこそがタブラ・スマラグディナという人物の本性だ。

他者が忘れる些細なフレイバーやシチュエーションに注力し、他者がこだわるデータや稀少性よりも理想の再現性を求める男だ。

『A。アルベドにする』

『B。プレアデスから選ぶ』

『C。守護者の配置情報を変更する』

そんな選択肢が思わず脳裏に浮かんだ。

(護衛としてはアルベドが一番強いんだろうけど、タブラさんは自分のNPCを連れて行きたいだろうし……。といかタブラさんが連れて

行くなら他の子にするか)

モモンガは素早くそう計算しながら、ギルド武器を使って配置情報を変更する準備を整えた。

万が一でもプレイヤーに攻め込まれることを考えれば階層守護者は躊躇われる。領域守護者の中で無意識に自ら作成したNPCバンドラズ・アクターを排除し、他の候補を列記していった。

「決めましたよ。タブラさんはやっぱりソレなんですね」

「これが一番しつくりするからね」

モモンガがプレアデスの一人を指名したところ、見ればタブラがアルベドにギンヌンガガブを持たせているところだった。

勇壮な斧槍と白いドレスのミスマッチ感はそのギヤツプ萌えを思いつかせせる。もつとも同時に漆黒の鎧であるトリスメギストスを付けさせれば、外見的にも能力的にも合致するのだろう。

NPCを連れ出す事ができるとは思えないが、趣味とロマンとデータを両立させる妙味は彼らしさを窺わせた。

「俺は無難に決めちゃいましたけどね。さてと、万が一を考えれば徒歩よりゲートの方が良い…」

「すまない、モモンガさん」

ゲートを開けた時に挿し込まれた言葉。

弾んだ声はモモンガであったか、それともであったか。

高揚感に包まれどちらとも区別が付かなかった。

モモンガが疑問に思うとしたら、何故タブラが謝る必要があるのか判らなかつたくらいだ。

「このくらいなんでもありませんよ。俺もNPCが外に出れたら素敵だと想いましたしたからね」

「すまない、モモンガさん」

ユグドラシルが終わるのは残念ですけど…。

そう続けようとしたモモンガだが、タブラが同じ言葉を繰り返したので思わず首を傾げた。

「どうしたんですか？ いつものタブラさんならもつと残念そうにするか、失敗した理由を色々と考察し始めるのに」

「すまない、モモンガさん。私は別にNPCを連れ出す事を目的にはしてなかったんだ」

疑問符アイコンを出そうとしたモモンガだが、タブラが三度同じ言葉が続けて動作を止めた。

「NPCを連れ出す実験はギルド解散以外は全てやった。いや、それも他のギルドにリアルマネーを投入して実験させた」

タブラが自分と同じ失敗をしたとして、むしろモモンガは共感を覚えたと。

自分はワールドアイテムなど持たせなかったが、『勝手に持ち出す気だったのか…』という怒りには気が付かないフリをする。

「あ、もしかして最後に遊ぼうとしたことですか？ 別に良いんですよ、久しぶりに一緒に遊べて俺も楽しかったですし…」

彼ならば当然試すよなあ…と自分の経験を基準に判断し、だからこそ自分の価値観を基準に考えてしまった。

「すまない、モモンガさん。私が試したかった実験は成功した。成功してしまった。…幾つかの変調を確認したが、前回に失敗した時には存在しなかったモノだ」

「え？」

そこまで言われてモモンガも気が付いた。

疑問符アイコンを出そうとしたコンソールや、各種メニューが消えて居るのだ。

もちろん、ユグドラシルが終わるからかもしれないが。

●フェアリーウェイ神隠し

予め設定しておいた残り時間を示す文字だけが、唯一のデータ表示としてカウントダウンを続け居る。

その数字が刻む中を、タブラス・マラグデイナは最後まで彼に相應しいペースで言葉が投げられ始めた。

「モモンガさんは『神隠し』、『天神参り』、『白羽の矢』、『赤い靴』と言った都市伝説を知って居るかな？ まあ赤い靴は少し違うんだが」

「こんな時に何を…言っているんですか？」

時間は刻一刻と過ぎて行く。

本来であれば残り時間を惜しんで語り会うか、そんなに話したいならリアルでメールでも交わせれば良いのだ。

なのに延々と言葉を連ねている。まあ、彼は話し始めるといつだってこんな風なのだが。

そして、当然のことながらメニューが開けないのであれば、メールが出せないことやログアウトすることもようやく気が付く。

「類似する話は各地に幾つもあったて…まあ良くある異人伝承の一形態なのだがね。総じて『力ある誰か』が、子供たちを連れて行ったから仕方無い。その意味は貧困した村人が…要するに子殺しよりマシな口減らしの奉公という訳だ」

異人伝承は概ね二形態あって、一つは子減らし。

もう一つは裕福な異人を殺したのが、力ある者を異人と呼ぶのだから崇りが必ずあるから祀るのだと説明が続く。

「子減らしで扱われる村は不作によって緩やかに沈みゆく場所が舞台だ。社会コミュニティ論によれば、村とは森の海の中に沈む隔離された居住区だという。何か気になることはないかな?」

「…ユグドラシル? それとも消えて行くギルドがそうだと言うんですか?」

タブラは肯定も否定もしなかった。

どちらとも言えないし、今更正解したとしても意味は無いだろう。

「教授なら単に分母と分子の関係だと言うかもしれない。それとも量子論かな? いずれせよ全てが失われつつある今ならば、効率良く連れ出すには十分だろう。祈念する能力が低くとも『世界を救う為の力』に届くかもしれない」

「世界を救う為の力? まさかワールドアイテムを持たせたのは…」

同じ様にタブラは肯定も否定もしなかった。

カンストしたプレイヤーでも、忠実なNPCでも、ワールドアイテムでも構わない。

要するに連れ出す価値のあるモノを、少しでも集めておけば可能性が上がるだろうと言う賭けなのだ。

「私は少しでも可能性を高めようと試して来た。『ギルド長の承諾』、

それが抵抗力を下げる最後のキーだ。ありがとうモモンガさん」

「タブラさん、貴方は一体何を狙って…」

彼は少しでも可能性を高め、ユグドラシルが崩壊するこの時間を今か今かと待っていたのである。

「判らないかな？ 死因の第一位は交通事故、その中でもトラックに轢かれることらしい。ウルベルドさんはいつも行きたいと言っていたが」

目を背けていた単語が目の前に突きつけられる。

都市伝説は幾つもあり、NPCを連れ出すのはあくまでユグドラシル…というよりはMMOに付き物の都市伝説の一つ。

であれば、もっと広い都市伝説の中には、もっと荒唐無稽な内容があるだろう。

タブラが目指したのはその一つ、みんなで語り合ったこともある、やってみたいことの一つだ。

「異世界…転移」

「ご静聴ありがとうございます」

ユグドラシルではありえないほど、恭しいポーズで最敬礼が為された。

「一緒に来てくれるか？」

「はい、お父様！」

NPCがしゃべっている!? それも感情を感じられるほど嬉しそうな声で!

驚く間に彼は開きっぱなしのゲートに向かって歩き出し…。

「待つてくださいい! 俺は…」

自分も嘘をついて居た。

最初からNPCを連れ出す都市伝説が不可能と知って遊んでいた。

あるいは、仲間と一緒にならば異世界も悪くない。

そんな言葉を掛ける暇は無く、ゲートの向こう側にタブラは居なかったのである。

「モモンガさま?」

〈付き従え〉という命令のまま自分に付いて来たNPCの声だけが、

ユグドラシルではない場所に響いていた。

異世界へ

●我元に来たれ緑の葉

「モモンガさま？」

見上げて来る無表情な顔と、相反する可愛らしい声。

NPCが自在に動いていることと会話して居ることに驚きながらも、先ほど他のNPCが嬉しそうな顔で動いていたのを思い出した。混乱もしているのだが、妙に頭が平静にな、事態を冷静に把握出来て居る。

「シズ、すまないけどワールドアイテムを回収させてもらうね。」
「ん」

NPCであるシズはモモンガの言葉に逆らうことなく、懐から蛇が絡みついた意匠の杯を取り出した。そして次の命令を受けるべく、じーっとこちらを眺めて来る。

「悪いけど近くに隠れられる場所がないか探してきてくれるかな？
その間にタブラさんと連絡取って見るから」

「了解。探して来る」

モモンガが杯やスタッフを仕舞いこむと、シズは近くにある林のなかへ入り込んで行く。

自身も移動しながら、思考錯誤して魔法を使おうと努力してみた。
「駄目だ。魔法は使えるのにどうしてもつながらない。近くに居ないのか……」

何度も混乱しては平静に戻りつつ、〈メッセージ伝言〉を使用してみる。

だが反応がまったく返って来ず、ログインしていないかのような反応に思えた。

まさかとは思うが着拒されていないよな……と祈るような気持ちで、アルベド、そしてシズの順に使用。

『モモンガさま？』

「ああ、良いんだ。シズが無事か確認したかっただけだからな」

帰って来た反応はスムーズなものだった。

余裕のある時に実験してみないと確証はできないが、そもそも

〈メッセージ〉を断る選択肢が無い様に思える。勘違いでなければ、情報を遮断する結界魔法でも使わなければ通じるように思われた。

(と言うことは別々の場所に飛ばされた？ 同じ世界だと思っただけど…差は何かな)

そう言いながらもモモンガは先ほど仕舞いこんだ杯を思い出していた。

タブラが異世界転移のキーと考えた条件の内に、ワールドアイテムがあったはずだ。

自分の場所に三つ、タブラの元に一つ…いや二つ。

この個数の差が関係しているのだろうか？

(NPCを連れ出すには一人一つあった方が良いかもと考えたのに、タブラさんは持つて居るからと断った。あの人に相応しいのはこの『ヒュギエイアの杯』だと思っただけだな…)

『ヒュギエイアの杯』は医薬の象徴で、条件こそあるが無限に回復薬を出す事の出来るアイテムだ。万能薬であり錬金術の材料でもあるパナケイアすら生成する事が可能で、大錬金術師と呼ばれる彼にこれほどに合うアイテムは存在しなかったはずだ。

というよりもモモンガが取りに行った時、全てのアイテムが揃っていた。

つまり、知らない間にワールドアイテムを手に入れて居たのだろうが…。

(ということは『ダヴはオリーブの葉を運ぶ』か！ 異世界転移を狙うならアレを越えるアイテムは無い。つまり目的地に辿り付いたのはタブラさんで、弾き出されたのは俺の筈だ！)

『ダヴはオリーブの葉を運ぶ』の詳細は知らないが、『ノアの箱舟が海の上を彷徨った時に新天地を見付けた伝承の事だろう』とタブラは言っていた。

ということは、目的地に直接移動できる。あるいは重大なヒントを与えてくれるアイテムだと思える。

「つまりタブラさんが行きたいと思っっている場所を目指せば、俺達も合流できるわけだな！」

全ての理屈を後回しにしてモモンガは目的を定めた。

とりあえず錬金術がらみの話を探して、彼が熱心に作りあげて居たアルベドやルベドに近い筋の情報を仕入れれば良いだろう。

「そうと決まれば早速、情報を集めないとな。奪われたら困るアイテム持つてるから隠れながら調べる必要があるし…やっぱりシズを選んで正解だった！」

「……っ！」

錬金術に近いことができるかは置いておいて、シズはナザリツクの防衛網を知っているという設定でタブラも色々口を出していた筈だ。

彼が言った蘊蓄を覚えて居る可能性も高く、ハイド潜伏からスカウト偵察まで可能なシズはまさになうってつけの人材(?)である。

興奮のあまりそう叫んだあたりで、ガサリと林から音がした。

そして興奮の波が鎮静化して、何が起きたかモモンガが把握した時。

「…もしかして、シズさんですか？」

「あう…」

林の奥の方に、ストロベリーブロンドが垣間見えた。

「聞いてらっしゃいました？ もしかして照れてます？ それとも報告に戻ってきただけかな？」

「イエス。肯定。はい」

要するにイエスイエスイエス。

自動人形ゆえに無表情なはずの顔が、何故か真っ赤になっていると推測された。

何故かじゃねえよ、間違いなく俺のせいですよ…。

「あーゴホン！ まずは簡潔に報告をせよ。文句は後でゆっくり聞
く」

「道ばかりで安全な場所は無い。次に誰か襲われてる。最後に…：モモンガさまに文句無い」

その場を誤魔化す為に咳を入れ、報告を求めると顔の上半分が木の
間から出て来た。

「そうか、ゆっくり『ミラー・オブ・リモートビューイング遠視の鏡』でも使おうかと思っただが

…まあいい。しかし人が襲われているだど？」
「ん」

本来であれば大事の筈であるが、不思議なことにモモンガは一切心の動揺が感じられなかった。

むしろ良く判らない誰かが襲われた事よりも、友人の娘と言えるシズが無事で良かったと思うくらいだ。

「とりあえず襲われている連中を遠くから確認し、現地の能力を見定める。おおよそ判明した後で介入。情報の収集に当たるぞ」

「ん。了解」

モモンガが指令を出すと、シズはマフラーで口元を覆った。

その瞬間に違和感が生じて気配が薄れた様な気がする。もしかしたら隠蔽系のスキルを使ったのかもしれない。

（「モモンガさま。判る？」）

「隠蔽能力の事なら問題無い。見つからない程度の速度で案内してくれ」

やはりスキルか同様のアイテムを使用したのだろう。

シズの囁く声を聞いてモモンガは鷹揚に頷いた。そして自らにも同様の処置を行うことにする。

ただし、声を届けようと意識する事で、一部の機能は適用しないでおいた。

（「不可知状態になって見たが、そっちから判るか？ 一応は声だけ届けているが」）

（「判らない。…でも声聞こえるから、その内に慣れる」）

シズは首を振った後、アクセサリーの一つを起動させた。

よく判らないが、何らかの計測機であることは窺い知れた。

後で何が出来て何が出来ないのかを確信しなければ…。と思いつつ喋りながらゆっくりと歩いて行った。

●狼たちの挽歌

シズに案内されて林を越えると、荒野まで出た所で疾走する馬と荷馬車を見付けた。

数台で一団を構成しその周囲を数匹の馬に乗った連中が居る。荷

馬車に乗る者は弓を撃つたり石を投げ、馬に乗っている方は剣や槍を振り回して居る。

それを追いまわして居るのは無数の狼たちだ。

〔馬に乗ってる方は護衛か。しかし狼程度に苦戦するとは…〕

モブNPCと1〜3レベルくらいの護衛からなる、隊商…キャラバ
ンかと思われた。

しかし多勢に無勢、次々と現れる狼たちに護衛は討ち滅らされ、最
後には荷馬車だけになってしまう。

〔モモンガさま。おかしい、ちよつと変〕

〔ん？〕

護衛達のあまりに情けない様に、自動進行イベントかともモンガは
思わず放置して居た。

最悪、残り数名になってから助ければ良いかと思ってたのだが…。

〔さつきから、ちつとも狼減らない〕

〔ああ、そういうことか〕

よく見れば犠牲になった護衛の周囲や、倒れた後で逃げ出して居る
馬を追い掛けたことで減っているのに、狼が減らない。

自動ポップなどするはずなので森から来てるわけだが…(不可視
ではなく不可知状態なので二人を無視しながら)、狼たちが次々に現
れては襲い掛って行くのだ。

〔んー。サモン・アニマルの亜種魔法と訓練された狼を組み合わせ
るんじゃないかな？ 面白い使い方だとは思うけど〕

狼と言う特定種族にだけ効く魔法を使用し、そのマークになるモノ
を訓練した狼が運んでいる。

あるいは荷物に臭いがする物などがあり、ボス狼の役目を訓練した
狼が担っているのではないか？

モモンガがそう言うのと、シズは周囲を探し始めた。

〔…ということは何処かにマジックキャスター居る？〕

しかし、そんな対象は見当たらないのだ。

どんなに移動しても狼が追跡するなんてありえない。

普通は馬なりを食い殺して食事にあり付くことを優先するし、手痛

い反撃を受けたならば警戒もするだろう。

どこかに術者が居る筈なのだが…。

「おっと、とうとう荷物を投げ捨て始めたな。仕方無い、私が一人で助けに行くから、思わぬ強敵が出たら狙撃してくれ、行商を囷に私は撤退する」

「判った。隠れて援護する」

呪的逃走とはいわぬが、荷物を減らして軽くする為か、それともモモンガと同じ様にマーカーが荷物に付けられていると推測したのか。

行商は時として生命より大事な荷物を捨て始める。

恩を売るならこれ以上は放置できないと、シズに介入の準備をさせて助け船を出す事にした。

「さてと。あのレベルならば本気を出す事も無いな。〈飛行〉」

仮面と籠手を付けて変装したモモンガは、飛行魔法を唱えて移動を開始する。

そして荷物が散乱して居るのを見て、焼き払った駄目だろうなく。と他人事のように対策を考えた。

「まずは〈魔法の矢〉。そして〈魔法効果範囲拡大・恐慌〉つと」

「な、なんだ!？」

モモンガの放った無数の光が狼たちに着弾する。

そして群の半ばを対象に、恐慌させる魔法を放ち逃げ散らせることに成功した。

当然ながら、この段階では全てを始末はしない。

「旅のマジックキャスターです。ここまでは無料にしておきますが、お助けしましょうか？」

「お、お願いします！ 御礼は後ほど、助かってから！」

飛行したまま荷馬車に並走すると、行商の長らしき老人に声を掛ける。

囲みを解いた段階までは無料、それ以上は有料と告げたら、驚いていた相手はブンブンと首を縦に振って助けを求めて来た。

助かる見込みがあれば飛び付くし、『義によって助ける』などと言う怪しい言葉よりも有料の方が信用出来るというものだ。

「では交渉成立と言うことで。トリプレットマジック マジックアロー〈魔法三重化・魔法の矢〉荷物を守るのはサービスしておきますよ」

モモンガの放つ光弾の数は、先ほどの比では無い程に膨れ上がる。同じ対象にも当たってしまうので単純に三倍の撃破数にはならないが、先ほどの一撃も合わせればこれで十分だろう。

生き残っている狼とついでに生き残っている護衛を生命探知で調べてから、トドメを刺したりポーションを使って助けておくことにした。

「ありがとうございます。この御恩はどうお返ししたら良いものやら」

「最初に言いましたが有料ですので、恩などと気にしないでください」商人が恩と言う言葉を使った時、モモンガは僅かに違和感を覚えた。

自分は有料だと言ったのが聞こえなかったのだろうか？ それとも恩と言う形の無い物で安上がりで済ませる気なのだろうか？

●新しいステージ

さすがは商人、油断ならないな…。

と思ったところで、よく考えれば金額の事を告げて無いと気が付いた。

自分を信用させる意味で使ったが、特に料金設定など決めては居ないのだ。もちろんそんな事を交渉する時間など無かったが。

「そうですね。この辺りの通貨で数日の宿賃分と、残りは周辺の情報をお教えいただけれますか？ なにぶん旅を続けているので不案内なのですよ」

「その程度のお金なら三倍、いえ五倍出しても構いませんが…。情報ですか？」

先ほど違い、金額が判ると老人は途端に金での解決を求めて来た。ふっかけられたら困るが、情報は商売に関わる大切なモノだと理解して居るのだろう。

まったく商魂たくましいと言う他ない。

「私は冒険者であり、別に商売をする気は有りません。命の代価とし

ては安いと思うのですがどうでしょう?」

「命の代価として情報ですか?」

モモンガは重ねて自分は商売をする気が無いと説明した。

そこまで言って老人は折れたが…。先ほどまで殺されかけていたにしては少々冷静な気がする。もしかして何か切り札でもあったのだろうか?

「貴方も商人ならばその価値は判るでしょう?」

「それは確かに。この周囲には王国と帝国があり、群島に王朝。合わせて三つの大きな国家があります。他にも都市国家群もあります」

老人は地面に棒で地図を描くと、中央に大きな丸を二つ。

下の方に海の上に小さな丸を幾つか、上の方に小さな丸を幾つか追加して行く。

「ほう。その差はどのようなものでしょう? ああ、聞きたいのは産業ではなく国家の差です」

「王国は王の下に居る数人の伯爵が各地の分国を統治する形式で、王朝と都市国家群は王国に良く似てますが王の決め方が少し毛色が違いますね。最後に帝国は上の貴族様から下の貴族様まで皇帝陛下にお仕えする最も新しい国家です」

大きな丸の一つに、無数の線を束ねる形で三角形を描く。

次に小さな丸の群にも、同じ様に小さな線で三角形を描いて行く。

最後に残った大きい円に一直線の縦線を描いた。察するにこれが王国・王朝・都市国家、そして帝国の差なのだろう。

「王国は…ひとまず王国としますが、横並びというなら統治が難しいのでは?」

「王様は継承順が厳しく決まっているから混乱が起きていないらしいのですが…」

なんでも直系男子のみで、庶子・養子・女子全てが禁じられており次の席次の伯爵家に移る為、王家争いは起き難いらしい。

魔法か何かで情緒無視で固定化されるので、口を挟む余地が無いので楽だとか。

「ただ、問題が起きても王様でも他所の領地に口出せないのが困りま

すね。以前に魔女狩りが起きた時に収まるまで近寄れずに困ったことがあります」

「魔女狩り……。そこに行くのは止めておいた方が良さそうですね」

分国法で領地ごとのルールがある上に、王家も明確的な国法違反でなければ口出し出来ないらしい。

魔女狩りが収まった時も止めるのが正しいからではなく、『没収した財産は国家・都市預かり』で冤罪と判れば返却するとルールが決まっただけというから笑えない。

「島国の王朝は大王家の媛を娶った方が王家筆頭とかで、男女の差は王家の丁度逆ですね」

伯爵の代わりに小王である豪族が幅を利かせていて、民の気質としては：親しくなれば親友付き合いできるがそれまで他所者は大変らしい。冒険者であれば大変なのでしようけど……と忠告が来るあたり、彼らもあまり良い想いをしていないようだ。

「商売する訳じゃないですしね。まあ候補に入れる程度にしておきます。あ、空を渡って海を越えるのは違法ですか？」

「関所のある街にさえ行けば問題無いと思います」

聞く所に寄るとバードマンと人魚の豪族が居るので魔法の移動はアバウトとか。

関所のある街で通行証を発行すればあまり気にしなくなるらしいが、持って居ないといちいち聞かれるのだそうだ。

「もし実力に自信があるなら、どこかの都市国家で名を上げると良いですよ。あそこは功績を立てると誰でも市民に登録されて選挙権もられますし、上級市民になれば議会に参加できますから」

コンコンと上に描いた小さい丸を杖で指し、ここは小さな国家が乱立して一応は一人の長を議長として選んでいると教えてくれた。

「都市国家群でしたっけ？ 都市国家間是对立しているのですか？」

「まあ公には決闘フェーデということになっちゃいますけどね。他所の国が来たら団結する事を前提に、ルールの決まった戦争をしますよ」

戦争以外でも冒険者などのに指示を出して、集めた宝物の質を競ったり、倒した魔物を競ったりもするらしい。もちろんそんな事ばかり

やっている訳ではなく、基本的には市長間の選挙で議長が決まるそう
だ。

モモンガが特に気になったのは、錬金術で良い物を作る競争をする
決闘フェイトもあるらしい。

最後に帝国は最新の国家だからか、それらの国の良いところ取りを
しているとか。

皇帝が絶対権力を握り地方分権が少ない。更に継承順は直系男子
が優先であるが、予め定めた順位により女子や庶子にも継承権が渡さ
れているらしい。

新興国家だけに実力主義で、常に実力者を求め他所者でも成り上が
り易いのだと言う。

「ありがとうございます。では最初は都市国家に行ってみますね」

こうしてモモンガは都市国家の中で沿岸都市を居住地に選んだ。

王朝や帝国と交易して居る商人と仲良くなりつつ、タブラの情報を
集め、場合によっては名前を上げてから帝国や王朝入りを保険として
考えたのである。

●影の軍団

モモンガが飛行で姿が見えなくなるまで見守った後……

老人たちはキャラバンを立て直し、今後を相談するかに見えた。

「あの仮面を付けた二人組み。もしや『アルレッキーノ』か『コロ
ンビーヌ』なのでしょうか」

「顔を晒したくないか、単に亜人ではないか？ 本人ならばむしろ変
装をするだろう」

アルレッキーノとコロンビーヌと言うのは、周囲を騒がせる仮面を
付けた謎の人物のことだ。

四人ほど確認されているが、うち一人は彼らの仲間であり、残る一
人の正体は掴んで居るので、もしかしたら……とモモンガのことを疑っ
たのである。

「我らを襲った狼どもはコバルト半蔵の手に違いありますまい。それ
を易やすと退けるは相当の手練れ。いかがしますか？」

「里テイッのTTに報告せよ。この辺りが騒がしくなるとな」

リーダー格である翁が命じると本来の目的地に向かう者だけがキャラバンに動向。二名がいずこかに去って行った。

そして、彼らの姿を遠くから眺める者が二人。

「モモンガさま。始末する？」

「いや良いでしょ。情報に嘘が無いならそれで良いよ。実際に助かったしね」

行商ならば情報を知っているのは当然としても、彼らは落ち付きを取り戻すのが早過ぎた。

長である老人が落ち付くのは良いにしても、他の者が荷物を回収したり応急手当に向かう判断が的確過ぎるのだ。

そう思っって不可知化の魔法やアイテムを使って、もらった情報が真実なのか、自分達を利用して居るのかを確認していたのである。

新天地で

●ブルーウオーター

旅の途中、感情の薄いシズが二度声を漏らした。

「うわあ……」

一度目は最初の失敗。

呆れた声は必要も無いのに料理を試してみようとして、見事にケシ炭になったことだ。

モモンガは頭をかきながら、どう誤魔化そうかと内心で汗を浮かべて居た。

「ど、どうやらスキルが無いと実行不能なようだね。剣を振れなかったから、もしかしてと思っただけ」

「モモンガさま……。言い訳は良くない」

旅する内にシズもペースを覚えたのか、真面目な支配者モードの時と違って日常モードでは口答えもする様になって来た。

「小剣や杖はOKだけど剣は駄目というのはマジックキャスター用武器はOKだと思える。細かい分類によっては可能な事もある筈だ」

「モモンガさま、誤魔化すのは良くない」

口論するほどには口数が多くないので、突っ込み要員として程良い賑わいをもたらしてくれる。

「シズは良いよ、バランスおかしいけど煮物なら何とかかなるもんな。俺はお湯を沸かすところまで……。ったく大の男が料理一つもできないなんてみつともない」

「私、メイド。モモンガさまは座っているとOK」

もつともシズも、ちゃんとした料理は出来ない。

物を煮る工程までなら大丈夫だが、料理を始めると分量やら材料のバランスやらおかしなことになるのだ。

だがモモンガはそれすら怪しいレベル。

どちらにせよメイドに相応しい技量ではないが、それでも炭にしてしまうモモンガよりマシだと薄い胸を張っている。

「NPCは設定があれば可能なのかな？ いや、待てよ……？ シズは

実体弾や特殊迷彩服キリースーツの作成が可能だったよね」

「毘もいける」

ふんすと鼻息を真似た眩きを付け加えるのは御愛嬌。

それはそれとして、シズが煮物を作るのは偵察兵・暗殺者として加工に必要な範囲だからかもしれない。過信は禁物であるが、その延長上までは可能なだろう。

だからこそ実物を作ろうとしても、料理のスキルが無いから失敗してしまうのだと思われた。

まあ二人とも食事が不要だから、料理を繰り返す気にもならないが。

そんなこんなで海辺の都市を目指して、二人が歩き続けた時のことである。

「うわあ……」

シズが二度目の声を漏らした。

ただし、今度は呆れた声では無く感嘆の声だ。

なんとなく嬉しそうなイントネーションに聞こえる。

「モモンガさま、大きな温泉」

「シズ。あれは海と言うんだよ。どこまでも広くて…塩で溢れてる…はず」

シズはナザリックの第九層にある温泉でしか知らないのだろう。

驚いた様な気がする顔で、こちらを見上げて来る。

「えーっと。錆たり砂が入らない程度になら遊んで良いよ。そうだね、五分か十分くらい」

「うん」

とてとてと歩き出し、砂浜で色々突き始める。

可愛いなあとは思いつつも、驚いているのはモモンガも同じだ。

ユグドラシルの(どちらかといえば過酷な)海辺エリアを除けば、何しろ仲間に見せてもらった画像でしか見たことが無いからだ。

「ブループラネットさんに見せてあげたいなあ……。どこまでも続く絨毯？ いや、青い宝石で埋まってるみたいだ」

キラキラと太陽を照り返す波は、無数の宝石が煌めいているよう

だった。

「もしかしたら俺たちは、この宝石箱を見る為に来たのかもね」

いつまでも見て居たい気分になって、気が付けば時間計測を忘れて居た。

「モモンガさま、これ持って行つて良い？」

「別に構わないよ。でも塩が付かない様にしないかね」

もう行くよと告げた時、シズは無数の石と貝殻を拾っていた。

途中で蟹(?)に逃げられて悲しそうだった事を考えると、十分どころではない時間が経つたのかもしれない。

とはいえ自分も愉しんだし怒る気など無い。

石や貝殻くらいであれば記念に持って行つても良いだろう。

なお、貝殻の一つに生物が入っており、宝物の一つが無くなったとシズが悲しそうな顔をするのは後のことである。

それがヤドカリであろうと推論を付け、また海に遊びに行こうと宥めた辺りまで良い思い出であった。

●お面と即興演劇

港町に付いた時、最初に抱いた感想は水路が大きいなと言うものだった。

海に面して流れ込む河を利用して居るのであろうが、不思議と片側だけが深く作つてある。

さらに遠視を使つてみると方面に柵が連なり、港もある程度上がったところで柵で遮蔽が作つてあった。

「水棲亜人への対策かな? 水を利用して居る分だけ陸は安全なんだろうけど、大変なんだな」

後に本格的な冒険を始めるとアンデッド対策だと聞くのだが、この時点では知りようが無い。

モモンガは観光がてらに街を歩きながら中央付近の広場へと向かう事にした。

「モモンガさま、あれ」

「お、辻芝居か。そう言えば最初の方のエリアで見たなあ」

人間の街には行けないが、旅芸人は何処でも良く見る光景だっ

た。

正確には使い回せる風景として設定されているのだが、それに慣れた頃にイベント情報の配布などが紛れ込んで来たのを思い出す。

その事をタブラに言ったら…。

『彼らは娯楽として情報の伝達者の役目も期待されていた。冬に村が閉ざされた時は風刺に満ちた芸で、その国の王や貴族の事では無いと銘打ちながら小芝居をしたものだ。他にも…』

などとマシンガンの様に蘊蓄が流れ出たものである。

そこまで思いを馳せて、奇妙なことに気が付いた。

辻芝居をしている芸人たちは仮面を付けており、よく見渡せば運河で小舟を操る者なども付けて居る。

大通りでは土産物らしき様々な面を売って居る姿まで見られた。

「すいません。旅のマジックキャスターなのだが、この街では仮面を付けるのは一般的なのか？ いや仮面を付けて居る私が言うのもなんだけど」

「ここじゃ、ああいう即興芝居で腕を上げるのが早道でしょ。なんども繰り返す定番の役は判り易い方が良いがしょ」

面売りは辻芝居を指差して、遠目で判り難いだろうに『あの役はコイツ』『その役はこれ』と言う風に判別して見せた。

遠目が効くシズが頷いていることから、まさしくその通りなのだろう。

「いつしか芸人を目指す連中以外にも売れる様になりましたね。まあ、この街のちよつとした名産というやつでさ」

「へえ。…定番と言えば『アルレッキーノ』と『ロンビーヌ』って言うのがあるらしいけど、そいつらは別格なのかい？」

どこかのスパイらしき連中の言葉を思い出して尋ねると、面売りは説明しようと口を開きかけて…。目も口も無い仮面を被ってしまつた。

「旦那。あつしは面売りですぜ。あつしの口を割りたけりや、何か買ってくれねえと」

「おつと、そうだったね。…シズ、何か欲しいのはあるかい？」

商売気を出す面売りの言葉に苦笑しながらも、そのくらい良いかとシズに尋ねる。

何せ自分は愛用してないけど何枚も同じ仮面を所持して居るので、これ以上は不要なのだ。

「ん」

「毎度あり〜」

シズが選んだのは獣をデフォルメしたような面で、ユグドラシルで忍者のバリエーションが付けて居た物に似てなくもない。

もつとも寸法以前に何の獣か判らないことを考えたら、これも獣役か何かの役の面でリアルさは無視して居るのかもしれない。

「そいじゃあとおきを一つ。即興芝居とはいえ定番つてのはあるもんですが『自分が考えた劇だから他の連中は演じるな』と言った馬鹿が出たんでき。そんな時の事つす…」

面売りの男は売り物の中から四つの仮面を取りあげる。

道化師、賢そうな美女、いやらしい顔をした老人、学者風の男。

「とある錬金術師がこう言つたんですよ。『それでは続きを書いてみようじゃないか。君が作者ならば幾らでも書けるだろう?』そう言つてこの四つの役だけで色んな芝居を作りやしてね」

「上手いですね。そいつが作者ではないと証明するんじゃないやなくて、作者だからこそ可能な事を証明させたのか」

ずっと伝わってきた誰もが知る定番の芝居だけに、自分の物だと権利を主張する者は居ない。

だが何らかの妨害工作の為に自分が作者だと主張した場合、それを否定するのは難しい。

なにしろどんなストーリーで何時頃から広まったのかを、大凡ながら説明できれば作者に見える。妨害工作ならば最初から裁判官を買収することも出来たかもしれない。

もちろん時間を掛ければ、何故最初から権利を主張しなかったのかと追い詰める事もできるだろうが、妨害が目的であればその期間中に作者では無いと証明するのは難しい。

だからこそ、作者であれば簡単に説明できる能力を求めたのであ

る。

「それに…書きを書けなくても書いても得なのが良い」

「新しい芝居のタネが提供されるってことっすからね。劇がしたい奴は錬金術師の芝居を参考にすりゃあいいし、裁判が終われば偽作者の芝居も参考にするって寸法でさ」

おそらくその錬金術師は偽作者の意図が、裁判で暫く劇が上演でき無ければ良いと理解して居たのだろう。

だからどんな結果になろうと劇が上演できるように策を練ったのだろうし、劇が上演できるようになり計らったからこそ芸人たちはその時に出来たバリエーションを新しい定番として取り入れたのだろう。

「最後にもう一つ教えてくれないかな？ その錬金術師ってどこに居るんだい？」

「さあ？ この街に錬金術師は一杯いやすからねえ」

タブラではないかと小銭を渡して聞きだそうとしたモモンガであつたが、答えはそつけない物であつた。

なにしろ様々な文物が流入するこの街では錬金術でも有名だ、学者を探せば錬金術師に当たるといふほどで、その時に誰も気にしなかつたという。

だが無数の劇を作りあげたと言う人物は、タブラか、さもなければ他のプレイヤーでは無かつたと思うのであつた。

●パトロオーネ

その後冒険者ギルドを探し歩いたモモンガは、最終的に傭兵ギルドに辿りついた。

「西部や南部の方じゃあそんなものもあるそうですけどね。ここじゃあ傭兵になるか、どっかの家の食客になるパターンですな」

「どっかの家というと、貴族…はいないんですよね？ 大きな商会とかですか？」

傭兵ギルドの受付で尋ねると、物腰の丁寧な男が壁に掛けられた布を指差した。

そこには九色の布が掛けられ、厳かに飾られている。

「この周辺にある六つの都市にやあ、九つの大きな家系があるんでさ。昔はもうちよつとありやしたけどね」

「あれ？ 確か街は七つありません？」

ミラー・オブ・リモート・ビューイング
遠隔視の鏡で軽く確認した時は、確かに七つあったはずだ。

だが不思議なことに男は六つだと告げた。

「兄さんあんた本当に他所者なんだね。大昔に七つ目は死霊都市なっちまって、そこを本拠にしていた連中はみーんなアンデッドになっちまったのさ」

「腕に自信があるなら、そこで稼いで来ても良いぞ！ それだけの腕がありや、どこの家でも引つ張りだこさ」

「違いねえ。なにせあそこにあや『国墮とし』ってバケモノが居るって話だからな」

脇から傭兵達が囁し立てるが、行くところが無いなら隊を組まないかと声を掛けて来る。

受け付けの男が丁寧なものも含めて、マジックキャスターは貴重だと言うからその言葉には嘘はなさそうだった。

（死霊都市かあ…、ダンジョンみたいで面白そうだな。落ち着いたら行ってみようかな）

『国墮とし』というのはアンデッドの親玉の様だが、自分の様なオーバードロードか、それともペロロンチーノが作成したNPCのシャルティアの様な吸血鬼なのだろうか？

そのことに思いを馳せると、冒険らしくなって来たとかつての楽しさが思い出されて来た。

昔は情報を集めるのに慎重になって、慣れて来たころはPK対策に慎重になったものである。

「ええと、大きな家に雇われるような名声ありませんし、とりあえず適当な依頼はありますか？ こちらの言葉に慣れて無いので、見繕うか読み上げてくださると助かります」

「判り易い物は隊商の護衛任務やモンスター退治、後はついで仕事ですが学者達から頼まれてる素材の採集ですね。詳細を読み上げる場合は別途料金が必要ですが、構いませんか？」

プレイヤーと遭遇してもい困るし悪目立ちしない為にも、まずは死霊都市を避けて無難な選択をすることにした。

別途料金を払うと作業をしていた小僧にソレを渡し、丁寧に説明すると伝えたのである。

そして…。

一通り聞いたモモンガは、ひとまずモンスター退治を選んだ。

素材収集の様な探索系の方が好みだったのだが、直ぐに換金できる依頼をこなしたかったのと自信が無かったからだ。

貴重部位を確保できず、食材のようにザクザクと切り刻んでゴミにしたのでは疑ってくれと言うのと同じこと。

どうにかして素材採集のチャレンジを行い、不審に思われない程度に上達するまでは、人に居られたくなかったのである。

冒険の下拵え

●仮面の化粧

モモンガとシズは少し離れた森にモンスターを狩りに来ていた。不可視探知だけでなく、念の為に不可知を探る魔法を使って誰も居ないことを確認しておく。

「シズ。今回の目的は我々のアンダーカバーを不自然ではない程度に確認し修正しておく事だ」

「ん」

現地で強いレベルのモンスターの名前を聞いてもいまいちピンと来ない。

不自然でない程度の強さと、本気になった風を装って見せる実力の片鱗。

そして：目下のところ頭が痛いことだが、料理・採集などに対してどの程度自分達が出来なのか？ 出来ないのであればどうやって代用ないし、話題を上手く避けるか。が重要であると思われた。

「では、今の我々で一番何が不自然だと思う？」

「二人とも後衛」

耳が痛いほどの正論。

まずはこれを何とかするべきだろう。

「うむ。後衛の二人組というのはスポット参戦ならまだしも、常時と
言うのは不自然だからな。そこで私が軽戦士フェンサーを兼ねて居る事にしよう」

モモンガは小剣と杖を何本か取り出すと、護拳の付いた小剣を選び取る。

「ユグドラシルだったら心もとないけど、まあこんなもんか」

それを軽く振り回すとビュンビュンと風が唸り、現地レベルでは十分な様に思われた。

「次に武技とタレントは何を持って居るか聞かれたが、これは詳細が判るまでは企業秘密だと誤魔化しておく。あるいは基礎能力を上昇させるパッシブ能力みたいなモノがあると臭わせるのが良いかもし

れない」

「乙女の秘密。了解」

なんとなく頷き難いが、まあそんなところだろう。

ユグドラシルでも初期に異業種の街でウロウロして居た時に、キーになるスキルや魔法を不躰に聞かれた物だ。

もちろんベラベラと喋るものではなく、レイドで活躍した時にチラリと口にする程度が恰好良いと思う。

「あとは私は魔力系が第三位階で四は使えなくもない程度。シズはシーフとクロスボウに専門化したシューターだな」

「ガンナーが無いのは酷い」

この世界に火薬が実用化されて居るかは別にして、見たことが無い以上は使って見せる訳にもいかない。

そこでアーチャーではなく、特定の射撃武器に専門家できるシューターであることにした。

クロスボウはガンナーでも扱えたアイテムであり、こちらの世界では民兵などでも使いこなせる武器だと言う。

冒険を始めた頃にちよつと良いマジックアイテムを見つけたから、専門化したと言っておけば不自然ではないだろう。

「シズが安全地帯を探しながら射撃し、私がそこを確保しながら魔法で戦う。咄嗟に魔法攻撃をすることが前提だから、第四位階は使える内に数えて無い…こんなところか」

「ん」

このランクが適性なのかは判らないが、傭兵ギルドで『使えたら頼もしいレベル』で口にして居たから問題無いだろう。

それは純マジックキャスターの能力であって、今回口になっている魔法剣士としては違うのだと気が付いていないモモンガであった。

そして魔法のランクの話題を思い出して居ると、ふと日記のうちの一つを取り出し懐かしそうに眺め始める。

「…何？」

「俺が30レベル前後だったころに書いた覚え書き。…いや魔法の使用回数振り分け表かな」

そこにはPKを警戒して探知魔法や移動魔法にマージンを取り、何発までなら攻撃魔法に使って良い。素材効率・経験値効率の良い相手ならば何発で落とせる、美味しいが時間が掛る相手ならどうすべきかなどを記載していたのだ。

「懐かしいなあ。このころは一人で何とかやろうとして、結局うまくいかなかったんだ。たちさん達と組めたから不要になったつてもあるんだけどね」

「……」

思い出に浸ることを邪魔しない様にシズは口を開かない。

代わりに背中をこちらの背中に押しつけて来るのだが、骨だから痛くないのかな…とつい思ってしまった。

「気にしなくても良いよ、シズ。今はデータ取りに役に立ってるから。…ええと異形種はMP多いから少し割り引かないとな」

「……」

沈黙して居るのは同じだが、不自然な話題転換が気になったのかシズは立ち上がった。

そしてパンパンとワザとらしくお尻を叩いて土を跳ね除けると、無表情に見える顔でこう言った。

「次は料理の御時間」

「くっ。…見てろよ。今度こそ」

モモンガはシズの頭に手を載せて、次は素材加工をしようとモンスタ―を少し狩っておくことにしたのだ。

●暗殺者と死霊魔術師のサバト

結果としてシズが作った煮込みは料理では無いことが判った。

本人は頑として認めないが、あれは別物である。

(疑似餌とか臭い消しとか作る中間素材と考えれば説明が付く。そこまでならスナイパーやアサシンがやりそうなことだ)

口に出すと料理だと煩いので、この件に関しては頭の中だけでまとめておくことにした。

支配者ロールで怒れば黙るのだが、できるだけそれはしたく無かったのだ。

(ということとは俺が湯を沸かす以上にできないのは、そんなものをネクロマンサーが作らないからだな。レシピを知らないから駄目だけど、死霊魔術の薬くらいはなんとかなるんだろうけど)

そして剥ぎ取った…と言えなくもない肉と骨を交互に眺める。

良く見ると肉は削ぎ切りであつたりブツ切りだが、骨の方は割りと綺麗だ。何度か繰り返しれば売り物になりそうにも見える。

(骨を分類できてるのは、やっぱこれでスケルトンでも作れつてことだろうな。肉の部位分けが出来て無いのを何とかなれば良いんだけど)

試してみると、こんな風にクラスの縛りで可能なことと不可能な事があるのが判る。

おそらくは認識に問題がある模様で、肉の分類が必要なアンデッドでも思い付ければ稀少部位を採集できるかもしれない。

シズに目をやれば、アサシンゆえか大蛇から毒腺と牙を抜き取ることに成功して居た。

「おつ。シズはちゃんと採集できてるじゃないか。えらいぞ」

「二円シール張って良い？」

モモンガが一枚だけ牙に張ることを許可すると、記念に取っておくことにした。

もし街でアクセサリ職人の卵が居れば、素材を渡して安くアクセサリにするのも良いかもしれない。

この後に案を検証する為、モモンガはシズに矢を作らせてみた。

ガンの実弾モードに使うフレショットが、クロスボウ・ボルトと共用なのでこれが可能だとは判っていた。

銃器は不良品が多いが強力と言う設定で、ガンナーは自分で弾を作るのが当然だからだ。クロスボウがガン扱いである以上は、分解整備も可能だろう。

だが…。

「駄目」

「やっぱ普通の矢は駄目か。いやよ待て…認識の差である場合、もしかして…」

不思議なことにクロスボウ・ボルトは作れるのに、普通のアローが作れないのだ。

これによってクラスの縛りの大きさを理解しつつ、ちよつとした疑問が湧いて来た。

「普通の矢を使う大型クロスボウを作ればパッチ扱いになる？ でも駄目か、実験の為にそんな無駄使いは…は…は…。武器職人と知り合いに合ったら試してみるか」

クロスボウなんて詳しく知らないので、城を守る為のバリスタでも改造すれば良いんじゃないやね…とか気が付くこともなくそんな考えに耽ったりしてみる。

「俺たちにもパッチが当たるのかは資金の余裕とコネができてからだな。だけど…最低限の採集ができることは判明した」

「相手を見分けるの、ちよーとくい」

シズがこの手の作業に意外な貢献を見せたのは驚きだった。

まあ良く考えれば先導者ストーカーが対象の区別が出来ないのはおかしいし、スナイパーが潜んで居る場所の植物の種類などに気が付かずに隠れた場所を気が付かれる筈もない。

最悪の場合でも狩ったモンスターを即座に無限の鞆に放り込み、フライ飛行で急いで持ち帰った事にでもしてしまえば良いだろう。もちろん一時的なパーティを組み、専門家に任せられるなら何の問題も無い。

その時は商品価値を最大にする為だと言い訳して、自分達はモンスターを綺麗に狩ることに専念すれば良いだろう。

「最後に残った問題は…やっぱり料理か」

「モモンガさまの。片付いて無い」

重要な問題だがアンデッドであるモモンガは料理が食べられない。

もう味わうことが不可能なのは残念だが、他人の前で飲食しないのは不自然だろう。

シズは特殊オイルの方が良いのだが、一応は飲食可能なのがうらやましい。決してシズが作った生焼けのレア・ステーキ（臭いの段階的コントロール処置？）が食べたくない訳ではないぞ。

「冒険中はシズとお揃いの指輪の効果で無用だと言うことにするとしても…。街の中に居て一度も誘われないなんてハズは無いよな…」
どうしよう。

どうするよ。

現実は無常である、唸つても答えは出ない。

ゲームでは無い以上は選択肢が存在しないが、駄目なことは何をやっても駄目なのだ。

「いつか料理を味わうことを目標の一つにするとして……」

「モモンガさま。現実逃避は駄目」

シズは容赦がない。

回り込む以前に立ち上がることを止められた気分だ。

（たつちさんなら正直に食べられないと言つて断る筈だ。ウルベルドさんなら嘘を吐いてそれを最後まで貫き通す…）

心の中で白い鎧と黒い山羊が右往左往する。

ぷにとさんが助言してくれるイメージが湧かないのは、きっと彼でもシステマ的な事は無理だからかもしれない。

あるいは正直に無理だと言うか、嘘を吐く以外の方法を思い付かないだろうとモモンガが諦めて居るからかもしれない。

（可能な限り断つて、いよいよよとなつたら用意しておいた嘘をもつてもらわしく？ …駄目だ。それは信憑性に欠け過ぎる。嘘をつくなら最初から…でも何なら良いんだろ）

今度は頭の中で巨大な鳶がナイナイと手を振ったのが判る。

（やるならそれらしい嘘を小さく散りばめておいて、相手に組み立てさせる。そして自分がそれを肯定しているかのように見せることで、嘘を呑みこませる…だったかな）

何かしらの不具合、ないし不幸が合つて食事をしたくない。

頑なに避けようとするのは、それが嫌な思い出を想起するから…。

そんな内容で良いかとトントンと指で叩きながら考えを整理し、その中心に据える内容を決めあぐねる。

冒険中ならばそれで十分かもしれないが、それだとリング・オブ・サステナンスがあるからと大して変わらないのだ。

重要なのはパーティ等で誘われても上手く断る、モモンガの協力が必要だからと周囲が止める様な内容。

そんな都合の良い嘘が思いつかないのだ。

「モモンガさま？」

「すまない。考え込んでしまったようだ。…!? いや、待てよ。シズ…そうかシズだ！」

黙りこくったモモンガを見つめるストロベリーブロンドの少女。

その姿を見た時、モモンガの脳裏に閃くものがあつた。

「はっははは、簡単なことじゃないか。タブラさんたちを探して居ることと、シズを守ることを理由にすればいい」

「モモンガさま!?!」

シズを捕まえて胴上げすると、戸惑った様な微妙に何かを含んだ言葉が返ってきた。

先ほど名前を読んだ声は質問であつたが、今度は驚きと嬉しさが内容されていた。

同じ様な言葉ながら、いや、同じような言葉だからこそ、その違いが判る。

「良いかシズ。我々は古代遺跡に四人以上でチームを組んで居た。だが食事中に起きた奇襲により、転移のトラップで離ればなれになつてしまった」

「……」

モモンガの一言一句を聞き逃すまいと、シズは僅かに頬が染まったような気がする表情で静かに聞いていた。

「だから私は人前で食事を取ろうとは思わない。その事件が起きた時も大丈夫だと勧められている時だった。と言うことにする。自分だけなら構わないが、一人残ったシズが居る限りそのつもりはない。ただ……」

「私が何かを食べるのは止めない……?」

コクリと頷いて、モモンガはシズの推測を肯定した。

シズは食事が出来ないと言う訳ではないし、お近づきの徴として飲食を用意されたのであればシズが消費すれば良い。

古来より、美しい娘を浚うのに食事に眠り薬を入れるのは上等手段であるし、先ほどの作り話を聞いた後で『私が信用できんと言うのか！』などと強弁するような貴族とはむしろ付き合わない方が良好だろう。

その辺りのスタンスをちゃんと理解して、ほどほどの付き合いをしてくれる者とだけ仲良くなっておけば良いのだ。

後は実力を認知させることが全てを解決してくれるだろう。強力な冒険者であり、自分の元にトロフィーなり貴重な情報を持ち帰ってくれる者に対し、気を使うのは当然なのだから。

「よしっ！ これでアンダーカバーの方向性は問題ない。名声を高めながら周囲の情報を集めて行くぞ！」

「おー」

こうして活動する為の準備を整えた二人は、他の傭兵と組む前に魔法回数や消耗品の管理を想定したモンスターハントを行う。

そして当座資金の換金に、狩り取ったモンスターの証拠を街に届けに行くことにしたのである。

まずは冒険してみよう

●情報の伝達者

モンスターを狩りながら人前で振る舞う練習を終え、モモンガはさつそく名前を売ることにした。

再び傭兵ギルドに訪れて、情報収集を兼ねて手っ取り早く名声を広めてくれる相手を探す事にしたのだ。そうしておけば、自分を雇う時に気にして居る事（人前で食べない・錬金術師の情報）などを少しずつ広めてくれるだろう…と。

「この周囲の駆逐・素材収集目的で一時的に組んでも良いパーティや、条件次第で同行しても良いという個人の方は居られますか？」
「申し訳ありませんモモンガ様。生憎と個人しか居りませんが、その場合は条件を決めて頂きませんと」

モモンガはゲームの中での冒険者ギルドを思い出しながら比較してみる。

美味しいクエストは特殊発生型になるため序盤くらいにしか使わなかったが…。この手の丁寧な受け付けは何処にでも居るんだな〜と思いつつ、荒くればかりじゃ仕方無いかと思わなくもない。

血の気が多い者ばかりだとせめて受付くらいはへりくだらないと喧嘩が絶えないのだろう。

「なるほど。だいぶペースが戻って来ましたので、ちよつと遠出してみたいのですが…。素材収集を任せられる方、ベースキャンプを任せられる方であれば特には」

モモンガは大きな勘違いしているのだが、ここまで丁寧なもの『組める人が居ない』というのも彼が第三位階までの魔法を使いこなして居るからだ。

荒くれ者である傭兵達の中で、『少しは』や『使える』というニュアンスは本来の意味とは違う。

可能か不可能かではなく、可能な者が集まっている中で『使いこなして居る』かどうかが重要なのだ。第三位階に到達するのが精々なマジックキャスターが多い中、安定して第三位階を使える魔法剣士が居

たらソレは英雄である。

ここ数日のハントだけで、その実力が本物と判って居る為におのずと釣り合う相手が絞られてしまう。

「モモンガ様と同等では無く、あくまでサポートという条件であれば合致する者は多いと思われれます。次に報酬の分配条件をお願いします」

「そうですね。矢やポーションに食料と言った必須の消耗品をまず経費から差し引いて、残りをそれぞれの分担に対応して分ける形で問題ありませんか？ もちろん金の代わりに素材を割り当てても構いません」

モモンガがユグドラシル基準の条件を提示すると傭兵ギルドの受け付けは恭しく頷いた。

理解されないことも多いのだが、消耗品の出費が自己負担というのはあまり喜ばれないのだ（前金が多い場合や最初から高額分配の場合は除く）。

経費を計上すれば矢やポーションを使っても損が出ないのであれば、ベースキャンプを守りながら素材加工するなど容易い。

「少々お待ち下さい。現在フリーの傭兵の中で、それらが得意な者を見繕って連絡いたします」

「短い間であればその宿にお願いします。時間が掛る用でしたら指定日に来場します」

受け付けは良心的な雇用主であるモモンガの為に、信用のおける傭兵を選ぶことにした。

獲物を誤魔化さないのは当然ながら、素材の説明ができる相手を見繕ったのである。

紹介された名簿の中から適当に名前のABCで選び、それぞれに収集している素材が違うということだけ重視しておいた。

「アーダベルトだ。楽器や人形に使うストリングを主に集めている。そっちは鉱石を集めてるブルーノと、薬草のカミロ」

「モモンガです。暫くの間、御世話になりますね」

一番の古株であるアーダベルトという男が、三人を代表して挨拶して来た。

握手を求めて来るような親しみは無いが、雇用主として一応の敬意を払うと言った風情である。

「カミロです。今回はなかなか行けないところまで入れるって聞いて参加しました」

「ブルーノです。モモンガさんと御一緒できて光栄です」

「敬語は不要ですよ、お二人とも。まあ中々抜けない自分が言うのもなんですけどね。…シズも御挨拶を」

「ん。…シズ」

そんな風に挨拶を交わし合い、装備や得意傾向を把握してから打ち合わせに入る。

アーダベルトとブルーノが白兵・射撃の両方、カミロが純射手なので中々良い感じのバランスであろう。

「あんたが大将だ、好きに方針を決めてくれ。こっちは自分が集めている物を回収できれば文句を言うやつは居ない」

「この辺りに来たばかりなので、色々知りたいと思っていたところですよ。みなさんの収集品を集めながらグルっと行きましょう」

一番の年配であるアーダベルトが促すと、モモンガは簡単に方針を決めた。

なにしろ彼らに自分を印象付けつつ情報収集が目的で、付き合う時は何を基準にすれば良いか何をしてはいけないかを理解してもらっただけだ。

その意味では特に行きたいところなど無いとも言える。

「やったあ！ 念願の目的がようやく果たせるかもっ」

「いい加減にしろ、雇われてる身でそこまで自由にする訳にはいかないだろ」

「良いんですよ。…もつとも、どんな薬草があるのかとか鉱石の種類とか教えていただきますけどね」

どうやらカミロと言う青年は楽天的で、ブルーノの方は真面目な氣質であるらしい。

全員がアーダベルトのようにプロフェッショナルの傭兵と言う訳ではなく、どこことなくイメージしていた冒険者に近い感じがした。あるいは受け付けが自分の注文を覚えておいてくれて、収集家を重点に探してくれたのかもしれない。

：実のところ収集可能な者と、得意な者では随分と開きがある。戦闘も可能で収集が得意な傭兵も居るには居るが、名前の知れた者はどこかの家にさっさと所属してしまうのでフリーではないとも言えるのだが。

いずれにせよ三人を含めた五人構成で、素材収集を兼ねたハントを始めることにしたのである。

●冒険の旅

その辺りをグルリと言っても、流石に方向性は決まっている。

街道周辺はキャラバンを組む家の傭兵が担当して居るし、フラリと現れるような奴は中堅の連中が賞金目当てで倒しに行っていた。

となると素材が取れる山間の森などに、モンスターを狩りながら突き進む。

「この辺りの都市はそれぞれ開拓によって成立してて、大きな問題を解決するために集まった者で固まっているんです」

「ああ、それで大きな家が赤土とか緑の森をさす名前なんです」

一番古いのが赤土の大地を開拓したテラロツソが率いる赤の家、次に湖周辺で拡がったが死霊都市になって滅びたラーゴブルの青。

滅びた青の家を吸収したことで最大になったものの、急激に増え過ぎて扱いかねている森と水利のフォレストヴェルデの緑。

そう言った大きな家が九つほど当時の主要産業を率いて勢力を為し、この都市で拡がり始めた旅芸人や傭兵を束ねるのが、最も小さい灰色のグリーンジョらしい。

「旅芸人の話は仮面に付いて色々尋ねましたが、傭兵の方はやっぱりアンデッド対策で？」

「半分くらいはそうですね。人が行けない場所が増えてアンデッド以外のモンスターも増えちゃいましたし。後は：貿易港として使い始めたからかな」

まずは薬草が収集できる森を選んだためか、それとも生来の気質かカミロは良くしゃべる。

こちらの事を聞いてくれれば自分に関するフェイク情報を話せるのに…と思いつつ、情報収集に丁度良いのでモモンガは相槌を打っておいた。

(なるほど。他所の国の情報を集めるなら、ここの都市は結構当たりだったんだな。街道沿いの都市とどっちにするか悩んだけど…。これならタブラさんの情報も集められるかも)

街道沿いの都市を牛耳るメディシナジャツロの黄家は、薬の行商人や錬金術師が沢山抱えて居るらしい。

家が扱うのは主要産業だけで全ての薬師や錬金術師が所属する訳ではないらしいが、気になるとしたらその街だろう。

そんな風に暫く移動したところで、先頭に行くシズが足を止めた。

「モモンガさま、敵。十から最大でも二十」

「獣かな？ 話の通じる亜人だったら脅して他所の都市に行けと言っても良いけど」

モモンガは肩をすくめながら、手早く作戦を考える。

二人だけなら適当に殲滅してしまう所だが、今回は人間の魔力量で可能な戦闘をやって見せる為に来ているのだ。

迂闊な行動を避け、それでいて頼りになるところを見せねばならない。

「範囲を拡大した恐慌…いや恐怖で群を散らそう。正気を残して居る个体を中心に殲滅。以後は正気に戻った奴を物理的に各個撃破する」

同じような魔法でも、恐慌と恐怖では効果の深度が違う。

恐慌に掛った対象は混乱して一目散に逃げるが、恐怖の方はレジストし易いし時々正気に戻ることが出来た。

低いランクだけに頼るには弱い魔法であるが、勝てる場合には魔力効率的にも発動速度的にも利点の方が大きい。

「ほう…わざと弱い呪文を使うのか。悪くないな」

「強い魔法を使うだけが良い訳じゃないんですね。勉強になります」

「全力で魔法使って倒したら此処で引き返す羽目になりますしね。そ

れに傷付き過ぎたら赤字になっちゃいますから」

魔力を節約し、かつ素材を取り易いのでアーダベルトも満足したようだ。

「雄が率いるハーレムだと思うが、種類によっては良い素材が取れる。できるだけ綺麗に仕留めてくれ」

「できるな、シズ」

「ん」

アーダベルトの提案で最初の数匹はできるだけ矢で刺殺し、残りを白兵戦で片付けるといふ算段になった。

この規模の獣が頻繁にうろついており、熟練者にも対象の特定が出来ないのが気になるがそれは後で尋ねれば良いだろう。

風下に回った後、更に近づいてシズが囁く様に告げて来る。

「総数は十四。獅子系の猛獣」

「問題無いな。万が一レジストした個体が多い場合は再度行使するので、突っ込む前に気を付けること」

「了解」

戦う相手は一度に二・三体だろうという予想もあつて、戦闘を強行。モモンガは会敵する可能性の高い場所を指差し、全員に注意を喚起した。

一同は声を潜めて頷き、枝を踏み込まない様に注意深く足を潜める。

「最初の臭いで何か感じた個体も居るのかな？」
『マス・ターゲッティング・
ファイアー
恐怖』。私は道を抑えておく」

「撃て！・撃て！」

ウロウロと獣が右往左往していたが、
ファイアー
恐怖の魔法で混乱し逃走を始める。

レジストした数匹のうち、驚いて仲間と共に逃げ出す個体を放置し、襲ってくる相手を抑えるためにモモンガが前に出る。

樹と樹の間に立って道を塞ぎ、その間にアーダベルトの号令で弓を放った。

「加勢します！・不要かもしれませんが」

「数は強さに勝る。時間は貴重だから助かります」

ブルーノが弓を投げ捨て抜刀すると、モモンガの脇に立つように接近して来た。

そこで一頭ほど懐に招き入れると二人でさっさと片付けておく。

やがて本格的な戦闘が始まり、まずは一頭。

片付いた所で次の一頭、その次は矢を受けて居る為もつと早く方が付いた。

途中からアーダベルトも加わると後ろに回られる可能性も無くなつたが、やはり本業の戦士は能力に物を言わせているモモンガよりは剣筋が確かであった。

こうなれば後は始末するのが早いのか、それとも逃げ出すのが早いのだ。それほどの時間を掛けずに蹴散らしたのである。

視界が開けた場所へ獣たちを移動させながら、ちよつとした話を始める。

「モモンガさんの剣は銘のある魔剣なのですか？」

「カミロ、そう言うことは…」

「そのくらいなら構いませんよ。ただ、『ブレス・オブ・マジックキヤスター』を掛けられるので、怪我すると魔法が失敗しかねない魔法剣士にはありがたいんですね。王様にも売れません」

モモンガが持つ護拳付きの小剣である護法剣は、『ブレス・オブ・マジックキヤスター』の魔法が行使できる。

この魔法は負傷したり殴られて態勢が崩れたりなど、負荷が掛った時でも問題無く魔法が使用出来るようになるというものだ。

ユグドラシルでも大ダメージを与えあうPK戦時には必須だが、この世界では全く別の意味があると思われた。

「王様が欲しがるかは別にして…。でも怪我したり、走りながらも使えるのは凄いですね」

「無理すれば第二位階も無詠唱でいけますよ。MP：魔力が勿体ないからやりませんけど…」

「高く売れそうな部位は取り終わつたぞ。捌ける奴は適当にバラしてくれ」

そうこうする内にアーダベルトの作業が終わり、見張りに立つシズ以外はみなで手分けして処分を始めた。

とはいえ食肉としては微妙なので、提出する部位と剥げるだけ毛皮を剥ぐと言うくらいだが。

しかし、それだけの時間があればついでに聞けることもあるだろう。

モモンガは兼ねてからの疑問を、三人の中では熟練であるアーダベルトに尋ねておく事にした。

「すいません。二人で狩って戻つてを繰り返していた時も思ったんですが、街の近くにしては獣……というか獣型モンスターが多いですよね。それに種類が豊富な様な……開拓前はジャングルだったんですか？」

「複合獣^{キマイラ}が居る。錬金術師が研究した半端物じゃなくて、元から野生に近いのだ」

錬金術をやっているマジックキャスターが作り出した複合獣^{キマイラ}は一代限りの存在だが、天然(?)に近いモノも居ると言われている。

ソレらは普通の獣と繁殖が可能で、しかも一種類の相手を専門にする種ではない。ゆえに獣型モンスターの数が多く、それほど強くはないが手を焼いているのだという。

「銘^{ネーム}有りの複合獣^{キマイラ}の親玉かあ。レイドボスにちようど良いかもな」

モモンガはその後、三人の他に何名かと組んで情報を集めながら最初の目的として絞って行くのであった。

キマイラ退治

●ちよつとした違和感

個人の傭兵達と組んで何度かのハントを終え、モモンガは手に入れた情報を眺めて居た。

川上に山森を挟んで死霊都市、川から森の中にはネームドのキマイラが居ると言う噂だ。

「アンデッドの大規模な侵攻は無し。『国墮とし』というのが慎重なのか、それとも全てを支配して居るわけじゃないのかな」

キマイラそのものの目撃情報はないが、自分のテリトリーから動か無いらしいので、ウロついているアンデッドを倒す以外は敵対してないようだ。

現に迂回する形で道沿いにアンデッドが現れることはあつたそう
だ。

「もし全てのアンデッドを支配して居ない。あるいは他に移動して居るならキマイラを倒しても問題はなさそうだな。素材は獲れなくなりそうだけど…」

モモンガはふと違和感に気が付いた。

そして今までのことを思い返して、奇妙であることに思い至つたのである。

「シズ。解毒薬の素材は有るか？」

「はい」

並べられたのは三種類。

石、毒草、そして毒腺。いずれも使い方によっては毒にもなるし薬にもなるものだ。聞いた話では毒は鉱物毒・植物毒・生物毒の三種類があり、錬金術を用いてようやく万能の解毒薬が作られるとか。

「次にスクロールやポーシヨンの材料。できれば錬金術用の素薬の素材も」

「はい」

様々な植物・鉱物。そして：獣型モンスターハイドの皮や、脂・鱗などの加工の仕方によっては素材になると言われた物。

特に獣型モンスターが多くはキマイラの子供達だ。確かに退治すれば獲れなくなるだろうが…。

「確か他の材料でもいけるけど、キマイラの子供たちなら可能な素材もある…という程度だっけ」

「そう聞いてます。もともと代用品」

それが意味するのは二つ。

一つは倒しても獲物効率が悪いだけだということ。

もう一つは、代用品とは言え素材集めにあまりにも効率が良い。つまりは都合が良過ぎると言うことだ。

鉱石や薬草・毒草があるのは良い。

開拓地なのだしそんな事もあるだろう。だがしかし、増えるタイプの天然キマイラが都合良く居るだろうか？

まあ使えるから代用して居るだけで、もっと性能の良い素材は在るのだろうか…。

「もしかして養殖場？ だとすると、何処からか連れて来られたのかな」

「不明。でも可能性は高いと思う」

もっと良い素材は有るが、手近にすませられるならばあるにこしたことはない。

更に言えばやって来るアンデッドを排除するのに、都合が良い番犬にもなる。

「あの森のどこかに研究所があるか、この都市群のどこかにあると仮定する。そのために連れて来て棲むことを強制する…」

今度は相槌が無い。シズでは判断が付かないからだ。

だが可能性はあると言えるだろう。それがタブラの研究所かは別にして高レベルのマジックキャスターであれば可能かもしれない。

素材は獲れるしアンデッドの被害も減るとなれば、あり得なくはないだろう。

「となると表立っての討伐は危険だな。どういふつもりがあるにせよ敵対と捉えられかねないし、国墮としもそのマジックキャスターを警戒して居るのかもしれない」

そして何より魅力的な事が一つあった。

あの森には研究所なり素材の過去施設がある可能性があり、死霊都市の事を調べている可能性もあった。

それらを考えると情報を知る者は少ない方が良い。ヒントくらいしかない可能性もあるが、本拠地の手掛りが見つかるかもしれない。それに：都市群の事を知る過程も含めて、判らなかつた情報を一つ一つ把握しているのは冒険をしている感じがしたのだ。

あの森を皆で攻略して掌握すれば都市の発展に役立つかもしれないが、そんな事には興味が無い。

モンスターを延々と狩って都市を安全させることにそれほどの意味を見いだせない。

死霊都市や国墮しに興味が無いと言えば嘘になるが、目下のところ求めて居るのはタブラに繋がる情報であり、そうでなければかつて皆で愉しんだ冒険なのだ。

「よし。明日から暫く、表面上は二人でアンデッド退治を引き受ける。さつさと規定量は済ませ、残りの時間をキマイラ周辺の情報収集に注ぐぞ」

「はい」

パッシブで周辺に潜むアンデッドを調べられるモモンガは、隠れて居る敵に怯える必要も探して回る必要も無い。

うまく探し出した風を装ってパパッと片付れば、残り時間を丸まると使用出来るだろう。それで名声も上がるのだから申し訳ないくらいである。

ついでにアンデッドハンターと呼ばれるほどの名声を残しながら、モモンガのキマイラ探索が始まったのである。

●迷走と対策と

スキルの『不死の祝福』でアンデッドを探しながら、モモンガは手際よくアンデッドを始末して行く。

人が居るところでは足を止めて探している様子を見せはするが、誰も居ないと判っているところではハイペースで狩って『後で倒した』風を装って時間を稼いだ。

「よし、あつちに移動しても問題無いな。〈上位転移〉グレートレボリューションを掛けるぞ」

「ん」

マーキングした移動先を探知魔法で確認したモモンガは、シズを小脇に抱えて転移。

自らは周囲を警戒しつつ、いつでも飛び出せる体勢を取る。

「シズ、何か見付けたら教えてくれ。その辺から探知魔法を追加で使用するから」

「はい」

探知魔法くらいなら並行して幾つか使ってもモモンガの魔力が枯渇する事はない。

だが何が起きるか判らないのであれば、〈敵性探知〉センスエネミーともう一つくらいに押さえしておくべきだろう。そのレベルならばMPの自動回復で補える。

そういう意味でMPに寄らない探知手段を持ち、特定の相手を追えるシズの存在は非常に重要だ。

まずは大枠できがしつつ、痕跡を探查したら魔法で大枠を掴んでからジツクリ追跡する予定であった。

だが…。

「駄目。モモンガさま」

「今日もか…」

シズの顔が無表情なのはいつものことだが、今日は暗い・申し訳ないという言葉が透けて見える。

痕跡を追ってみたものの、見つけ出したのは割りと強い第一世代の混血ではあるがキマイラそのものではなかった。

「ごめんなさい」

「シズのせいじゃないさ。…これは根本的などころで勘違いして居るか、相手が一枚上だと見るべきだな」

ポムっと置いた髪からは硬質なでシユンとしたイメージが窺える。

偏見かもしれないが撫でられて嬉しい時は柔らかいイメージがするので、相当に落ち込んで居るのではないかと思われた。

「考え方1。何かの理由で出歩いて居ない。シンプルに本拠地を守る為だとか俺たちを警戒して。：実は雌で出産中ずっと籠りっぱなしってのはちよつと困るな」

「赤ちゃん欲しい」

シズは可愛い物が好きなようで、赤ん坊のキマイラを想像してホッコリしているらしい。

「もつとも出産ペースを考えれば雄がハーレムを築いていると言う方が、付近に居る獣型モンスターの数を考えればありえそうな気がするがな」

とはいえ出産が一番困るパターンで、巢に籠って出てこない可能性が高い。その場合はどのくらいか判らないがワンシーズン丸まる様子見するしかないだろう。

性別がどちらか判らないが、できれば雄であつてくれと祈るモモンガであった。

「ひとまずサイコメトリーもどきと行くか。適当な場所に魔法封印で探知魔法を封入しておこう」

本当の事を言えばエスパーだけが使えるESPのサイコメトリーが使えれば良いのだが、魔法でないからモモンガが『儀式・祟の叡智』でラーニングした中には存在しない。

何の魔法をどの場所に封入するかにもよるが、獣めいた直感なりあちらの探知魔法でこっちの動きを把握して居る場合はそれでなんとなかなるだろう。

ユドラシルでも隠しイベントを見付けた相手の警戒態勢を欺くために、色々な案を考えたものである。

指定を一定以上に強い生命力探知にしておき、視覚情報など幾つかの反応を見た上で絞りこんで行けばいいと思われた。

「次に考え方2。そもそも棲息地域・移動形態などを見誤っている。これは情報の洗い出しが重要だな。先ほどの魔法封印を仕掛ける場所を考慮してみよう」

「山に棲んで居ない？」

モモンガは領きながら足で落ち葉を除去したり、川がある方向を指

差した。

「地下の穴倉や川辺の淵に棲んでいる可能性がある。誰かが研究室を守らせているという案も考えてみただろうか？ その場合を含めていつもはそつちに、山森には捕食や生殖にやって来ているという考え方だな」

もちろん逆もありえる。山が棲家なのだが、今は安全や栄養の問題で川や地下を巣に籠っている可能性だ。

「形状にしてもキマイラなんだから、仔が四つ足だからといって四足歩行とは限らない。蛇の無足、蜘蛛の多脚、鳥の翼…」

キマイラは複合獣とも呼ばれ色々な部位を持っている。

良く知られており今回も共通することが多いのは獅子と山羊と蛇の部位だが、ユグドラシルでも様々な亜種が居たものだ。

「こんな感じ？」

「上手いぞ。全部混ぜたらボスに見えるな。だがこのくらいを想定しておいた方が面白いだろう」

モモンガが掘り起こした地面に、シズが落書きを描いていた。

それは背に翼があり尻尾を持つ多くの腕がある女性の絵だ。何処かで見たボスを思い出して絵のバランスを変えて見ようと思うのだが、ワイバーンみたいな女性のボスも居たなあと思い出されて、苦笑するしかなかった。

『TRPGリプレイこそ男性が多いけれど、神話からコミックまで多くの場合、キマイラは女性を意味する事が多いんだよ。モモンガさん』

(勘弁して下さいよ、タブラさん)

脳内タブラにまで嫌な予感を後押しされて、雌が巣穴に籠っている可能性を思い返すのであった。

「その辺りの予想を踏まえて探知魔法を仕掛ける。なるべく多くの獣が通る道。あるいは視界が通っている場所を探してくれ。もちろん隠れて出産し易い場所でも良いけどな」

「はっ」

魔法封印の近くで下級アンデッドを作成して囿にすれば、仔である

獣型モンスターでは無理なのでキマイラが出てくる可能性は高い。

それらで何かしらのキツカケがつかめた場所を、暇な時に遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモート・ビューイング）で探してみようと思うモモンガであった。

●答え合わせと遺されたモノ

結論から言うと棲息領域というか加工所は川だった。

重量を考えれば水の中の方が動き易く、魔法が使えるので獲物を仕留めるには森の方が楽だから移動を繰り返していたらしい。

もしかしたら探知魔法も使えるのかもしれない。

それはそれとして雌であるというのも確かで、繁殖が終わって無ければ危く見付けられなかった所だ。

不思議なことに子供を放置して居たので、タイミングによっては音で見つからなかった可能性もある（繁殖期でなければ普通に見付けられた可能性もあるが）。

「啼いてるのに餌さをあげてない…」

「野生の生物は死に易い子供は放置する傾向にあるそうさ。数が少ないからか、弱々弱わしいからか…」

巣を見れば数頭の赤ん坊が死に欠けて居た。なのにキマイラは餌や乳をやるどころか見向きもしない。

繁殖サイクルが魔獣としては短い可能性もあるが、多産なのに今回は数が生まれなかったと考える方が妥当だろう。

そして直ぐに死ぬと判っているから、放置して居るのだ。

「誰も見て無いから見逃す？ それとも狩る？」

「餌ころもつちもつちさんなら育てて居る姿を見れば感動したかもしれないが…。仔を放置する親を見逃す理由はないな。功績そのものは保存の魔法でも掛ければいい」

ペットを飼っていたギルメンを思い出しはしたが、むしろ思い当たるのは苦勞して小学校に入れてくれた己の母親だ。

もし大切に育てて居たら、素材が取れる素だから…と理由を付けて見逃して居たような気がする。

一拍、二拍。

僅かな時間が過ぎ去ってキマイラが食料を求めて巣を抜け出すのが見えた。

その間、シズはモモンガが考えを変えるのを待っていたかもしれないし、モモンガもシズが我儘を言ってくれるのを待って居たのかもしれない。

だが結果として、NPCや仲間を見捨てるギルメンを見る様な何とも言えない寂しさだけが残ってしまった。

「この場で殺すのは気分が悪いかもしれないからな。いつでも殺せるのだから、外で始末しよう」

「うん」

不可知化を掛けたまま二人はキマイラを追い掛け、振り向きもしない親キマイラに溜息をつけて付いて行った。

そして魔法が解けるのに合わせて、戦闘準備を整える。

やがて魔法が解けた時、激高したキマイラが襲い掛かって来た。

狩猟本能ゆえかそれともこの地を守れと命じられているのか、勝てない戦いに身を投じたのである。

「ギャウー！」

「流石に魔獣だけに踏み込みが早いな。だが認識が追いつけないほどではない！」

100レベルでも戦士としての才能はその三分の一：いやパラメーターを考えれば四分の一を越えたくらいかもしれない。

だが知覚は問題無く機能し、能力に任せた戦闘でも防戦くらいならばまるで問題無い。

「レベルにして50を越えたくらいか？ この辺りの魔獣にしては強いがな。…シズ。〈雷撃〉^{ライトニング}に合わせ撃ちこめ」

「はい」

モモンガが指示を出すと、シズが誤射する事無くキマイラの手足を撃ち抜いて行く。

所詮は普通のクロスボウボルトだから大したことはないが、二発・三発と決まればそれなりのダメージだ。

適当に剣で切り合いクロウボウを撃ち込み、隙を見て魔法を撃ち込

む。第二位階の雷撃とはいえ、モモンガが放てば上限の威力だ。

「暫く白兵戦の訓練をしたい。念の為に魔法弾に切り換えて待機して居ろ」

「はい」

ガンナーの本領は魔力弾を使うライフルの方だ。

だが弾を補充でき無いこともあり、もっぱら現地で補充できるクロスボウを使っている。一応はそのままでも戦えるのだが…。

第三者の介入に備えて魔法弾で待機させつつ、モモンガは白兵戦の練習をしておくことにした。

何度か切り結ぶが、やはり本職でないモモンガでは致命傷を負わせることができない。

パッシブ・スキルの上位物理無効Ⅲ・上位魔法無効化Ⅲにより何とか無傷といった様子だが、訓練としてはこんなものだろう。

「格上との練習にはなったかな？　だが、いつまでもその姿を見るのは不快だ。〈魔法三重化・雷撃〉」

その戦闘過程はどちらかといえば八つ当たり近く、練習としてもあまり褒められたものではないと自覚して居た。

適当なところで切り上げて、剣で攻撃をガードしつつ、隙を見て魔法を使う練習が出来たことで十分としたのだ。

「…モモンガさま。飼って良い？」

「探索を終えても生きてたらな」

巣にしていた川沿いの加工場に行くと、啼いていた子供をシズがジーツと見て居る。

獣にしては大きな子供だが、魔獣にしては随分と小さく弱わ弱わしい。しかも二匹いるのだが、どちらも死に掛けている。

「小舟とランタンに加工道具だけか。ここは外れだな…：…なんだまだ生きて居るのか」

「…モモンガさま。飼って良い!？」

適当に見渡して探索を終える。

ワザとらしいが、モモンガも魔獣の仔を見逃せなかったのかもしれない。

「ちゃんと餌をやるんだぞ」

「うん」

シズの顔が明るくなった様に見えなくもないが、気のせいだと思っておこう。

「名前、どうしよう」

「大福かハムスケというのはどうだ？」

「生き残れても一匹だろう。」

そう考えたモモンガだが、シズの意見は違ったようだ。

「どっちが大福でどっちがハムスケ？」

「両方は無理だろう。死ぬまでにどっちにするか考えておけ」

そう考えたモモンガだが、シズの意見はやっぱり違ったようだ。

ジーっと顔を見上げたまま。

「ああ、もう。何を食うんだろうな。まったく、ユグドラシル一凄く無駄なワールドアイテムの使い方だな…ユグドラシルじゃないけど」

沈黙に耐えられなくなったというか、見捨てると言う事に耐えられなくなったモモンガは空間から杯を取り出した。

みずぼらしい杯に蛇が絡みついたようなデザインで、傾向けるとワインのようなナニカが魔獣の仔の上に滴り落ちていく。

「どっちが大福でどっちがハムスケ？」

「シズが決めて良いよ」

息を吹き返した魔獣の仔を抱き上げてるのを見て居ると、シズの無表情が微笑んでいる様な気がした。

船上探索行

●川を覗むモノ

「川船…か」

モモンガは手に入れたばかりの地図を眺めながら、獣型モンスターの解体場で見付けたモノに付いて考察する。

「この二つから考えられることは川沿いに本命の拠点があるということ。利用者は異形種ではない可能性が高いこと」

「候補は川上と川下」

シズは一般論を出して相槌を打ち、モモンガの思考整理を助ける。

もう一つの可能性に口を出さないのは、異形種に関してモモンガほどの知識を持たない為だ。

「どちらにもメリットとデメリットはある。川上にある湖近辺には死霊都市があり、安全地帯を作れば研究の邪魔をされることがない。川下ならば…」

「誰かに任せて居ても大量に輸送可能」

モモンガは頷きながらトントンと指で机を叩く。

キマイラとあの場所を用意したのがタブラである可能性を追求するならば、川下であつて欲しい。少量であれば転移やゲートで移動できるので、自分で細々と研究するなら川船など必要無いのだ。川上に人には見せられない研究室を作ること自体はありえそうだが船など必要無い。

（もしタブラさんが誰かに任せて居た場合、信頼に足る人物を探せる程の時間が経って居ると言うことになってしまう）

その場合は、ライトノベルで聞いたことのある『異世界転移では僅かな到着時間の差で、現地時間がズレる』という話を大幅に超えてしまふのだ。

少なくとも数十年単位になってしまい、他の強者との戦闘を考慮すれば、もう一度出会える可能性が大幅に減ってしまう。

だからこそ今居る都市に居たという錬金術師のことを詳しく調べるのが恐ろしいのであり、逆に言えば、それだけの時間が経ったので

あれば納得が出来てしまうのだ。

「川下の場合はこの都市と沖合の島だろうから先に調べたいが、地下にある場合は魔法での探査が必要だな。街中で理由も無く魔法を使う訳には行かない」

「どうみても不審者」

友人ともう会えない可能性がある。

その事実を認められないモモンガは、あえてタブラである場合におきる幾つかの考察を放棄した。彼が何かして居るなら出逢えるだろう、潜伏して居るから見つからないのだと無理に自分を納得させて次の案に移行する。

「シズ。尋ねるが川船に乗ったまま沿岸を調べることができるか？」

「条件に寄り可能。最低限でも接岸距離に近づく必要アリ」

飛行しながら不可視化を掛け、更に探査魔法を使用と言うのは論外だ。

ならば川船に乗る必要があるが、モモンガは操作できない上にシズでも詳しく調べるのは難しいらしい。

「できれば川下を調べたい所だが、理由が出来るまで先に川上を調べられないな。アンデッド退治の名目で人を雇うか」

「……この子達を見ても驚かない人募集」

シズはこの間に保護したキマイラの子供たちを脇に抱え、何を食べるのかも調べて欲しいと付け加える。

今のままだと『ヒュギエイアの杯』で作ったパナケアを吞ませ続ける必要があるので、モモンガは別の意味で領くのであった。

モモンガが傭兵ギルドを尋ねると、受付はいつもの笑顔で会釈を返す。

それだけではなく周囲から尊敬や嫉妬の眼差しが飛んでくるのは、ここ最近の活躍が原因だろう。

「モモンガさま。この度は何のご用でしょうか」

「アンデッドを退治しながら死霊都市を目指したい。だが幾らなんでも危険だろう？ 川を利用する事で保険にしたいんだ」

死霊都市を目指して道中のアンデッドを掃討して行く。

その言葉を発した時、周囲はザワつくと同時に納得する。

人知れず獣型モンスター解体場を見付ける為に、モモンガは名目としてアンデッド退治の依頼を受けてかなりのスコアを叩きだして居た。

対アンデッド用の魔法が幾つか覚えて居ればそれほど難しくは無
いし、深読みする者は家族か何かの復讐だろうとしたり顔で頷いてい
る。

「川船の上から視認できる相手ないし、探査魔法で確認しながら着実
に倒して行くということでもよろしいでしょうか？」

「その認識で構わない。アンデッドと戦う時に一番恐ろしいのは、気
が付いたら囲まれていることだからな。その点で言えば船ならば一
目散に逃げることも可能だ」

「そんな。モモンガさんほどの腕で逃げるだなんて……」

「ばっかやろう。それほど用心深いつてことさ。俺達も見習わねえと
なあ」

受付に説明して居ると、何度か組んだことのある傭兵達が話をして
いるのが判る。

彼らには実力だけではなく、安全マージンを取る姿勢やどんな相手
であろうとも油断しない方針を見せて来た。面倒ではあったがおか
げでモモンガの話を疑う者はおらず、アンダーカバーは成功だなと安
堵する。

「それでしたら三パターンの雇用をお勧めいたします。一つは言うま
でも無く、隊を組んで中型船へ自衛力のある者を同乗させること」

「掃討作戦を正式に依頼されたと言う訳でもないしな。できればそれ
は避けたい」

予算的にも難しいが、もし名前を売るために安価で雇われる協力者
が出て来たとしてもこれは避けたい選択肢だった。

そもそも隠された拠点が無いかを調べる為の方便であり、対アン
デッド探知と見せかけた地形探査魔法を使いたいだけなのだ。

そこまで大掛りにする理由が見つからない。

「では同等の戦闘力を持つ個人。…ゴーレムライダーか獣士と組む事です」

「…耳慣れないクラスですね。ゴーレムクラフターなら知り合いが居たんですが」

おっ、隠しクラスか地方専用クラスか!?

思わずゲーマーらしい反応を見せそうになり、モモンガは驚きを精神鎮静化で抑えられる不快さに内心で苦笑いを浮かべた。

せっかくユグドラシル時代を思い出したのに、こんなことで邪魔されてしまった。不快に思わない訳は無い。

「近隣にゴーレム魔法の研究者や調教師の方が成果物を供給されることも多く、結果として小型ゴーレムや獣を連れた方もまた多いのです」

「安定供給が確保されているならば、上手い使い様を考える人が出てもおかしくは無いですよね」

受け付けは簡単に説明しながら、今度は都市国家群についての説明に移った。

「都市国家群では功績さえあげれば市民として登録されることも、政治参加する上級市民になることも難しくは有りませんから」

「なるほど国家に提供しても良いし、売って費用を回収しても良いと」
自分以外でもゴーレムや獣を戦力に計算できるならば確かに有効だが、壊されたり殺されてしまうのが一番の問題だ。継続できない戦力にう意味は無い。

だがゴーレムクラフターやビーストティマーが多いならば納得はできる。

壊れたら直せば良いのだし修復リペアの魔法だけなら、パーティに一人くらいは使い手が居てもおかしくはない。

獣の方はヒールで良いからもつと簡単で、調教師が牧場を持って居たり魅了チャーム系の魔法を使えるならば数を供給するのは容易だろう。

「ゴーレムの方は水中で移動できる歩行型か自動航行できる船型ゴーレム。獣の方は水棲系モンスターであってますか?」

「はい。どちらも本来であれば多額の雇用費用が掛るでしょうが、今

回のようなケースであれば自分の航路確立の為にも格安で引き受けてくれる筈です」

MPを支払えば命じるだけで移動する船や、自己判断で川船を引張り自衛もできる水棲型モンスター。どちらも維持費用だけでなく、イザと言う時の保険に再調達費用を蓄える必要があるから雇用費用は高額になる。

だがアンデッドを排除しながら川を遡ることは彼らにも悪い話では無く、運が良ければ維持費分だけで引き受けてくれる可能性があると言うのだ。

(どっちも詳しいデータを知りたいけど…。今はビーストテイマーの知り合いが欲しいな。信用出来る人なら一匹あげても良いし)

モモンガは素早く計算しながら、どういう理由を考え始めた。

今回の件だけではなく、将来にも使える方が良いだろう。上手く絡めて川上だけではなく川下にあるこの都市や沖合も確認したいのだ。「今回は右往左往して安全な地形を調査したりする可能性がありますので、水棲モンスターを扱える方をお願いします。船型ゴーレムは広く浅く調べる時にでも」

「承知いたしました。流石に二・三日ではまとまらない可能性がありますので、宿の方に伝言をご用意させていただきます」

こうしてモモンガは獣騎士・ビーストテイマーと契約する事を前提に、暫くは近隣のモンスター退治で過ごしたのである。

●川辺に踊る影

結果として良かった点と残念だった点がある。

良かったのは安価に済んだことであり、残念だったのはそれだけに興味をそそられない安直な対象だったからだ。

新発見などと言う都合の良いことなど無く、ゆえに場合によっては何度でも雇うことが可能であった。

「亀…」

(…契約料を見た時に嫌な予感を感じたんだよな)

おお…と唸るシズに対して、モモンガはユグドラシルでも良く見た水棲モンスターを眺めた。

ゲームの中では島サイズの超巨大な大亀も居たが、この個体は通常より大きい程度。強化魔法を掛ければなんとか…川船を引つ張ることが出来ると言う程度のサイズに過ぎない。

どちらかと言えば上に一人乗ったまま水上を移動するとか、水中で先導してもらう程度だろう。

「期待させて悪かったね。ワシがダミアで、こいつがエレオノーラだ。亀には大そうな名前かもしれんが」

「そんな事は無いですよ。俺の友人もペンギンにエクレアと言う名前を付けてる子が居ました」

よくよく考えればシーサーペントとか従えてるなら海洋貿易に引つ張りだこの筈だし、一応は水陸両用という意味でイルカなどより大亀はマシな相手かもしれないかった。

どうせ期待なんてしてなかったしと、誤魔化しつつモモンガは本題に入る。

「今回の目的は川沿いを移動する際に備えて、ひとまずの安全を確保することです。基本的には上陸せずに探知と遠距離攻撃を繰り返します」

「ワシの方はそれで構わんよ。あえて言うならば航路図モドキを作らせてもらえばありがたいがね。勿論あんたにも同じ物を渡そう」

何のためにはあえて口にしないし、ダミアの方も尋ねてはこない。

川沿いを平和にしたと名前は売れるし、その領域の地図を有して居れば、似たような依頼が来た時に有利に立てるからだ。

モモンガの目的は七割くらい川上の調査であり、アンデッドの方は川下で依頼され易い様に布石にしたい程度である。

その意味でダミアと利害が一致しており、良い協力関係が築けるだろう。

「勿論です。もし危険なことがあれば俺は飛行するので、エレオノーラともども逃げておいてください。必要ならば強化魔法を掛けますので」

「ワシも似たようなことができるが…。まあその時は逃げさせてもらっ

ておくよ」

「どうやらダミアはレンジャーとドルイドの中間みたいな存在らしく、射撃しながら大亀に〈レックス・ストレンクス下位筋力強化〉や〈クイックマーチ早足〉などの強化魔法を使用するらしい。」

確かに強化すれば川船を引っ張れるだろうし、亀は水中でなら早いので、単純な装甲強化や筋力強化だけでちよつとしたモンスターや獣くらいは何とかなるだろう。

「そういえばナザリックのNPCにもレンジャーやドルイドが言ったなあとか想いつつ、有効な魔法に思いを馳せるのであった。」

「シズ。そろそろ準備は良いか」

「うん…。じゃなくて、はい」

最初の淵に差し掛かった辺りでモモンガは籠を見つめるシズに声を掛けた。

籠の中には大福とハムスケと名前を付けたキマイラの仔が眠っており、驚いて水に飛び込まないか心配して居たようだ。

「アンデッド探知の魔法を拡大して使用しますが、慣れるまでは少し警戒し過ぎなくらいで行きますので」

「そうしてくれると助かるよ。大抵のアンデッドは水中に落ちた段階で問題無い筈なんだがね」

「なんとというか水に落ちたゾンビなど、ただの土座衛門である。鈍過ぎて川魚の餌さにしかならない。」

「だがスケルトンは縫り付く程度の動きはできるし、より上位のアンデッドが居れば話が変わってくる。…まあ『国墮し』が吸血鬼で、水棲生物の血を水でもしない限りは問題ないのだが。」

「では行きますよ。〈ワイデンマジック魔法効果範囲拡大・不死者探査〉…なんちゃって」

偽の詠唱を行いながら無詠唱で地形探査を掛ける。

〈ディテイクト・シークレットルーム隠し部屋探知〉の魔法に反応は無く、モモンガ自身がパツシブで所有する不死者探知能力に引っかかりを覚える程度であった。

「シズ。そこそこの影に石弾を撃ち込んでみる。効果が薄い様ならば銅弾の使用も許可する」

「はい」

モモンガの指示でシズは一風変わったクロスボウを引いた。

石などを弾として飛ばすタイプで、都市で見掛けた時に実験を兼ねて購入しておいたものだ。石や銅弾をカットした程度の弾であるが、刺突耐性があっても打撃耐性の無い下級アンデッドには十分に通用する（何より石弾ならコストが存在しないのがいい）。

「ほほう…お嬢ちゃんは中々の腕だな。これならワシも一安心だ」

「んー」

「先を潰した矢を使うんでしたっけ？ 加工に手間も掛るでしょうしね」

人見知りをする事はあっても人間に対して偏見は無いので、シズは頷くことで応える。

手持ちの魔力弾や魔法のクロスボウには及ばないが、費用対効果は中々だなとモモンガも話題に興じておいた。

「片付いたらこの調子で行きますが、さっき言った様に今の所は様子見をします。淵や滝の類だけではなく、大きなカーブでも同じことをしますので」

「そういうところは上がって来るから問題無いと思うが…。まあ警戒して損は無いかの」

淵の影に潜んでいるアンデッドはゾンビかスケルトンか。

大したことの無い相手なので、何発か石弾を撃ち込むと簡単に反応が消えた。ダミアは航路図を作る傍ら立ち話で大亀のエレオノーラもプカプカと水の中を漂っている。

暇そうではあるが今のところ問題ないし、繰り返し隠し部屋か何かないかを見付ける為なので特に言うことは無い。

そうして幾つか目かのカーブを越えるまでは同様の探査を行い、モモンガは細心さを見せつけた所で中止。

以降は淵や森の側など、見え難い場所だけで探査を行うことにする。

「今日の所はあそこを調べたら終わりにしましょう。安全と思える場所まで戻って、警戒しながら休む分の魔力を残しておきたいと思いま

すので」

「そうさな。侵入を感知する魔法はワシが使えるで安心して休んでおくとなええ」

やはりというか、ダミアが覚えて居る魔法は探索や航海に便利な魔法を中心にして居る様だった。専門のマジックキヤスターではないことも合わせて、ドルイド系第二位階の途中までという辺りだろうか。

「侵入探知というのがあるんですね。自分は薙ぎ払ってから安全地帯まで撤退することを繰り返して居たので、興味があります」

「あんたらの腕ならその方が確実じゃろうの。ワシらは斥候やら同行しての護衛が主な仕事じゃけ、どうしてもこっち方面が主体になる」

この日の：というか川上探索の収穫は、ダミアから獣士やゴーレムライダーなど現地職業に関して聞いたことが一番の収穫だった。

ダミアはビーストテイマーというよりはレンジャーやハンターであり、専門の調教師から購入する事が多いと言う。そして師に当たる人物と共に生業を行い、あるいは傭兵として雇われて自分を鍛えるのだとか。

「そういうえばゴーレムライダーという職業の方も紹介されましたが、水上で争ったりするのですか？」

「んー。あるとも言えるし無いとも言えるな。都市群が海上貿易で優位に立って居る理由の一つじゃし、雇い主も積極的に争わせたりはせん。競争などの例外は別としての」

対してゴーレムライダーは＜修復リペアの魔法やゴーレム専用リペアに調整した強化魔法を覚えるものの、あくまで船の船員や馬車の御手としての修業を積んでいるらしい。

得意分野が大きく違うことと、どちらにも共通する高額フエーデの相棒を連れて居るといふことで戦闘する事は稀だそうだ。

ボートレースの延長上みたいなことをする決闘フエーデが唯一フエーデの例外で、それさえも殺し合いに至ることは少ないと言う。

「まあ王朝の人魚どもと戦わない限りは、水の上では安心してくたええぞ」

「ああ、あつちの国は亜人種の豪族が居るんですけどっけ」

人魚の豪族が居る王朝と、大型船を揃えて居る王国。

この二つが海上貿易のライバルらしいが、どちらかといえば前者が獣士の敵、後者がゴーレムライダーの敵になることが多いらしい。

とはいえ大型の水棲モンスターや天候等の方がよっぽどの脅威らしく、出逢ったら不運と思うか、相手によつてはお互いに敬遠し合うので戦争時以外は比較的に安全な事が多いと教えてくれた。

(ゴーレム使いの人を雇ったら、島国にある王朝のことを聞いてみるか。受付でその辺を指定できれば良いんだけど)

取らぬ狸のなんとやらで、モモンガは次なる計画を立てるのであった。

何しろ川上探索では成果が上がらず、死霊都市の外観を眺められる場所まで遡って終了したからである。

安全な戦場から飛行の魔法を交えながら、攻撃魔法で雑ぎ払ったものの名声など求めて無いモモンガに取って、この探索は成果が上がらなかったと言えるからであった。

だが縁とは不思議な物だ。

アンデッドスレイヤーとして名前を挙げたモモンガの元に、都市防衛に関する指名依頼が飛び込んで来たのである。

死霊と踊る

● 闖入者は忘れた頃に

モモンガは遡上を何度か繰り返し、死霊都市の外観を掴むレベルで河川周辺の掃討を行った。

そんな折に不意の指名依頼が飛び込んで来る。

「モモンガさま。申し訳ありませんが、よろしいでしょうか？」

「珍しいですね。受付の貴方がここまで来るのは」

傭兵ギルドの受け付けが棧橋まで顔を出す。

これが非番ならば問題無いが、そうでないのならば異様なことだ。何かしらの事件性を感じたモモンガは、彼が話を切り出すのを待った。

「緊急の指名依頼が入っております、必要でしたらギルドの方から探査の代理を……」

「それは構いませんよ。あらかた終わりましたし……やはり冒険と言うのは自分でやることに意味がありますから」

安全に回れる……という場所を搜索し終わり、後は遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡で良いかというレベルだったこともあり中断を決定する。

「シズ。今日は別件だ。またの機会を探すから準備をしなさい」

「うー。判りました」

耐水性塗料を塗って水着待機していたシズは、名残惜しそうに大亀を見つめた。探査が終盤ともあり騎乗実験（という名目で遊ぼう）としていたのだ。

だがモモンガの命令は絶対であり後ろ髪を引かれながら服を着替え始める。

「そういう訳ですみません。違約料はお支払いしますので」

「それは構わんよ。緊急指名ならギルドなり依頼主の方が払うでな。チビ助どもはワシが預かっておるで行ってきんさい」

ここ暫く組んで居た獣士を信用できるくらいには見知っていたので、ハムスケ達を預けておく。

シズは少しだけ心配そうだったが、餌さを捕まえるのは彼の方が得

意だし、体調が悪くても見抜けることから置いておくことにしたようだ。

「それで何が起きたんですか？ 問題の無い範囲で聞かせてくれれば『後』で助かります」

「その…。対アンデッドの専門家を急遽集めております」

モモンガは無い筈の眉を潜めた。

都市がアンデッドに襲撃されているならば大事になっている筈だ。無数の雑魚にしろ『国墮し』にしろ騒ぎにならない筈はない。

死霊都市とは完全に別件である可能性もあるが…。

「ということとは目撃情報だけだが、無視できる状態では無いと。察するにレイス系ですか？」

「話が早くて助かります。…これ以上は会堂で御話を聞いた方が良いでしょう」

受け付けが説明した会堂は議会でも使われる重要な場所だ。

広場の近くにある中央公会堂の他、様々なギルドの話し合い様に幾つか建てられている。

今回向かうのは都市の設立当初、まだ小さな街だったころ。旧市街区に建てられた最も古い会堂の様である。

そこは壁の一部に浸水の跡があり、聞けば洪水を繰り返していた時期の名残だと言う。

今は地震で地形がせり上がり下がり下がりしたりした後で、堤防を築いたことで改善されているとか。

「ナインズ・オウン・ゴールのモモンガ様をお連れしました」

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

別の案内に面倒通しをされて奥へ通されて行く。

そこで味わった雰囲気は、以前に護衛として連れて行かれたカジノにあつた奥の間のようだ。

行きかう使用人からしてグレードが一つ違い、所作の一つ一つが洗練されている。更に奥の間の外へ待機して居るメンバーですら、傭兵ギルドで見掛ける者よりも数段上の連中に見えた。

「…モモンガ様。ここ」

「隠し部屋か？ ある所にはあるもんだな」

シズが視線を移した場所を見ると確かに不自然な作りを見付けた。とはいえ素人のモモンガに判るレベルなので、それほど秘匿性の高いモノではないのだろう。

それを見付けたことで特に変化は無く、あえて言うならば幼く見えるシズに対する視線が多少柔らかくなった程度である。

「間も無く依頼人が説明に参ります。暫くお待ちください」

「シズは此処で待機して居てくれ。何かあつたら呼ぶ」

「はい」

モモンガも他のチームに習って自分一人が案内された部屋に入る。

それに際してシズは僅かに視線を巡らせながら、周囲にある隠し扉以外の仕掛けを探し始めた。

●開かれたカタコンベ

最奥の部屋には窓が無く、銅板と鉛で仕切られた重要会議の部屋だ。

通されているのはチーム・リーダー達のように、誰もが不敵な面構えをしている。

「ナインズ・オウン・ゴールのモモンガ様です。女史は本日欠席とのことで、間も無く依頼人が参ります」

「ふん。魔女は欠席か」

「チームワークが乱れるよりは良いわよ。…新人くんにそれだけの実力があるならだけどね」

モモンガは肩をすくめながら声を挙げた連中を確認した。

気性の荒そうな火神の聖騎士崩れに、水神の神官…は確か集団戦が得意と聞いている。他にも戦士にレンジャーなどがそこに居る。

（察するに魔女というのはマジックキャスターかな。魔法知識の担当が欠席するので、代わりに呼ばれた…とか）

偶然このメンバーがリーダーという可能性もあるが、チーム数が増えればマジックキャスターがリーダーである可能性も増える。

その辺を考えると、自分が急遽呼ばれたのは欠席者のせいだろうか

……とモモンガは他人ごとのように観察した。

「ここ最近の討伐ではトップスコアらしいですよ。広域の探知魔法が得意なんじゃないですかね」

「二足の草鞋で中途半端……ということはなきそうだな」

事情通らしきレンジャーの言葉で戦士が目線をモモンガに飛ばすが、腰の小剣を見て僅かに頷いた。

魔力系のマジックキャスターで神聖系統も使って、更には白兵戦もできる。全てが中途半端ならばこの会議に呼ばれる筈が無いのだ。

「あの…事情が全くつかめないんですが…」

「直ぐに慣れる」

「慣れなくとも使い走りの出す依頼を聞けば判りますよ。最低限それをこなせば怒られはしません」

戦士のぶつきぶらぼうな言葉以上に、レンジャーの言葉はより不親切だった。

会社員であった鈴木・悟時代に、命令をこなすだけでは良く叱られた物だ。中には相次ぐ変更によって達成困難になった条件で、更なる成功を求めて来るとか無茶ぶりすらありえる。

彼の言葉を信じて最低限の仕事だけ果たせば、この場に呼ばれるようなことは無くなるだろう。

(まあ立身出世に興味無いし呼ばれなくても良いんだけどな。でも色々気になる事はあるし…)

モモンガは肩をすくめて大ぶりの椅子に座りながら、先ほどみた隠し部屋に想いを馳せる。

ああ言う場所を数多く知れて、更には入出許可を得られれば理想的だろう。許可が無くとも魔法で確かめるつもりだが、肉眼で確認した方がMPが無駄にならないし、余分な対探知防護をしなくても済む。

それに古い施設の下に秘密基地とか実にタブラがやりそうなことであつた。

死霊都市に研究所を作る案も捨てがたいが、材料の確保に協力者が出来た場合の合流などこちらの方がやり易い。

タブラが数十年以上前に来た場合には出逢えない可能性があるの

を極力無視しつつ、なんとなく納得できてしまうモモンガである。

「お待たせしました。本日はみなさんにお問い合わせいただきありがとうございます。」

「能書きは良い。さつさと話せ」

「またそんな無礼なことを…」

「良いじゃありませんか話が早くて。つまらないことを蒸し返すよりはさつさと本題に入りましょう」

依頼人が使い走りというのは本当なのか、誰も敬意を抱いては居ない。

水神官も無礼を咎めたと言うよりは、場の雰囲気乱したことに文句を言っているようだ。

「それでは…。昨日、この都市とその周囲でアンデッドを見掛けたと言う報告が多数寄せられました。山間の森ではゾンビやスケルトン…街ではレイスと推測されています」

「戦力分散…ううん移動力の差かも」

「だろうけどそのコースって森の主が居なかったっけ？」

(森の主?)

地凶を指差しながら目撃例を説明すると即座に反応が返ってくる。

森の主とやらの能力を聞いて数人が頷いていることから、みんな知っているのだろうか…。モモンガは非常に嫌な予感がした。というよりは心当たりがある。

「もしかして森の主というのは、第三位階までを使うキマイラですか？ 大型のげっ歯類に鱗と尻尾が生えたような…」

「そうそう。あいつ魔法まで使ってくるから厄介だよー。やろうと思えばレイスでも倒せる筈なんだけど」

モモンガは心の中で汗をかきつつ、自分が倒したキマイラの影響に思い至った。

代用素材のついでに都市を守る為に配置したのであれば、当然ながらアンデッドが山を越えて来る可能性が出て来る。

ゾンビやスケルトンは体力こそ無限だが筋力・移動力が無いので、

今回の歯無しに合致するのだ。

(やつべ。全力で俺のせいじゃん。どうしよう…どう誤魔化そう)

なんということだろう。

自分で番人を退治しておいて、自分で解決しようと言うのである。バレたら信用問題どころではない。

モモンガは精神が鎮静化することを今ほどありがたいと思った事は無かった。

「逆に考えれば良いんじゃないかしら？　ゾンビやスケルトンを個別に撃破できるってことだから、あの都市を取り返し易いってことになるわ」

「キマイラ相手に逃げ帰った奴の言うことじゃないな。どうせ『国墮とし』との戦いで逃げ帰りかねん」

「まあまあ。そのモモンガさんが川のルートを確保したって話だし、そっちに便乗させてもらえば楽に行けると思いますよ」

だが幸いなことに原因など探ろうとする者など、その場に一人も居なかった。

確実に勝てると思っているのも大きいのだろうが、目の前の事態を解決して恩を売り付け金を稼ぎ、あるいは暇を潰す為にしか都市の危機を考えては居ない。

この街が死霊都市になったとしても気にしないし、経歴に瑕が付く程度。危険なら逃げ出すなり他の方法で稼げば良いと思っている者ばかりだ。これが戦力を騎士ではなく傭兵で固めている弊害だと言えなくもない。

(なんて連中だ…。とか俺が言うのもおかしいよな。そもそも俺が原因なんだし…今回の件を利用できるって考えているのも同じだ)

とはいえモモンガとして人の事は言えない。

協力するとしても自分が困らない程度だし、積極的に動こうとしているのも都市で大っぴらに探查魔法を使えるからだ。

「許可さえもらえば適当に探查して行きますが…。何かしらの問題があるのではありませんか？　でなければ呼び出されるほどの案件とも思えません」

「道理だな。衰弱死する者が出るかもしれないが躍起になるほどじゃない」

時間を掛ければレイスに生命力を吸い上げられて死亡する者が出るだろう。

しかしその程度の危険性で都市の上層部が動くとも思えない。せいぜいが賞金を掛けて一刻も早く片付くことを祈るだけだ。何しろ彼らには食客として様々な傭兵を抱えており、困ることは無いのだから。

「アンデッドが侵入した場合危険な場所があるからです。この地図をご覧ください」

「この辺…旧市街区の地図だね。随分と古いよコレ」

依頼人がテーブルに置いたのは古めかしい地図だ。

ところどころ色が剥げているが、これほどの劣化でも全体としては無事な所を見ると大事にはされていないのだろう。

「この都市は旧市街区を中心に水害にあってきました。何十年かに一度の災害では大津波で崩れ完全に水没した区画もあります。その都度立て直して来たのですが…」

「アンデッドの連鎖？ でもその規模の災害が起きたならば、浄化や結界も大規模になるはずじゃない」

不死者の怨念がより強いアンデッドを生む。

ゆえに災害などでは起きた当初こそ放置する事も多いが、その後生活に戻りさえすれば入念な浄化が行われるのだと言う。

「読めて来た。その結界が機能して無いんじゃないか？ 流石にさつさと倒さないと危険なことになるかもしれない」

「地下墓所カタコンベとかですか？ …でしたらその周囲を出発点に探査すると良いかもしれませんね。念の為に一グループか二グループほど地下を巡回するのが理想的ですけど」

好都合な展開だとモモンガは提案することにした。

カタコンベの巡回チームになるのが理想的だが、地上から急ぎ足で回って全体を把握しても良い。山間にある森以外であれば何処の配置でも良いと言えた。

「新人の差配つてのが気に入らないが、理屈は通つてるな」

「勝手なこと言つてすみません。探査魔法があるんで都市全体か力タコンベの希望ですが…もちろん足りない所があれば行かせてもらいますよ」

「まあそんな所ね。うちは数を倒す方が得意だから森の方がありがたいけど」

「ボクの所は森でも地下でも良いですよ。必要に合わせてつてところですよ」

モモンガの提案にあえて反対する者はおらず、それぞれのチームが自分達の得意分野だけを口にして思い思いの場所を希望して行く。

もちろん隠し技の類や相性問題を口にする者はいないので、本当に得意・苦手なのは判らないのだが。

「…ところで、なんでまた結果が崩れてる可能性があるんですか？

俺は都市に来たばかりで良く判らないのですが」

「多分だけど、世間を騒がせてるアレでしょ？」

「ああ、確かにアレならやりかねんな」

「はた迷惑な奴よね」

モモンガの質問に他のメンバーは心当たりがあるようだったが、納得して答えを言ってくれない。

仕方無いので依頼人に視線を移すのだが…。

本当の事を言えばモモンガも聞いたことはあったのだ。

無意識に関連を否定して来た事が、都市の裏側で繋がっていたのである。

「大錬金術師と呼ばれたラピス・フィロソロム様の遺産を探すという、決闘フェーデが行われているのです」

かつて旧市街地を巻き込んだ洪水の折、大錬金術師の研究室が海に沈んだと言う。

本当かどうかは判らないが、何処にあるのかを探して歩く傭兵や、便乗する者たちが方々を荒らし回っていると言うことであった。

ここに来てタブラに関することを無意識に放棄して来たつけが、一度に回って来たのである。

探せるかもしれない手掛かりが既に分散し、見付けだせるかもしれない遺産や伝言の類が永遠に失われたかもしれないのだ。

大錬金術師の遺産

●地下遺跡へ

町中に侵入したレイスを見付け出すと言う名目で、モモンガは探知する為に探査魔法を公然と使う名目を得た。

当然ながらアンデッドの探知には魔法を使用する必要が無いので、無詠唱で隠し部屋の探査を行っていく。

「シズ。何種類かの探査魔法は使用するつもりだが、気が付いたことがあれば遠慮なく教えてくれ」

「はい」

探査魔法に寄る探知は万能ではない。

例えば隠し部屋を把握するのは、一定サイズの大きな仕掛けには反応しない。

また最奥の間まで安全に通れる道を把握するブレス・オブ・ティータニアや、ナザリツクを攻略する時に使った類似の魔法も、条件が関わるので常に正解を導き出せるわけではない。

一つのダンジョン扱いならまだしも、別物扱いだと魔法が機能したとしても何度も掛ける必要があるし……。そもそも最奥の部屋では無く途中に隠された財宝部屋が目的だと意味が薄い。

「隠された遺産か……。本当に『大錬金術師』ラピス・フィロソロムがタブラさんなので、必死に搜索するのが変わって来るんだけど……。既に出遅れてるしそのつもりの方が良いな」

「タブラとアルベドが数十年前に訪れて居る場合、もう出えない可能性がある。」

ゆえにその可能性を否定し続けてきた結果、遺産を巡る争いに関して出遅れてしまった。もし本当ならばこれ以上遅れて流出させる訳には行かないし、考察するにしても念頭に入れておかねば全体像を把握する事が難しくなるだろう。

（賢者の石ラピス・フィロソフォルムを手に入れたら叡智が授かる。そこは良い）

レイスを探し歩くフリをしながら、モモンガは幾つかのステータス

UPアイテムを思い浮かべた。単独で強化するアイテム、複数が上が
るアイテム、一点突破で大幅な上昇をするが他が下がってしまうアイ
テム。

そういった物を用意するだけで十分に可能だ。ここまでは問題が
無い。

(だけど知性上がるだけじゃなくて、自分の分野にも活かせるよう
な知識や閃きを得ることが出来る。…そんな都合の良いことが可能
なのか?)

可能だからこそ、『大錬金術師』ラピス・フィロソロムの遺産を巡っ
て争いが起きている。

アイテムで能力を上昇させる場合、一定の有効性と限界が存在す
る。知性を上昇させるアイテムであれば賢くなりはするだろうし、研
究者が元々研究して居る分野ならば確かに多くの成果を得ることが
可能かもしれない。

だが…その時点を契機に、次々と開発に成功するほど劇的であると
いうのがどうにも解せない。

むしろ…他の状況になっちゃったのだと思わなくもない。

(可能性の一つ目は本当にそんなアイテムがある…レベルが大幅に上
がって今まで不可能だったことが可能になっただけとか。二つ目は
タブラさんが『あの』スキルを使ったってことかな)

前者は耐火の魔法を炉に掛け続けることが可能になったり、炉の中
の反応を数倍の速度で早めるなどだ。高レベルプレイヤーなら見儀
でも現地の錬金術師では不可能なのならば、適当にレベリングするだ
けで済む。

そして後者…タブラ・スマラグディナの持つスキルの中でも、代名
詞的なスキルが二つある。

それは他者の脳を吸って特定のスキルや魔法を奪うモノと、他者に
自分のスキルや魔法を植えつけるモノ(汎用のスキル・魔法だけで、
奪ったスキル・魔法は又貸しできない)。

これらのコピースキルこそが彼の能力を幅広く、かつ特定分野に高
めさせていた。

(違う可能性はあるけど、ここはあれを使ったと思って考えてみよう。そうだと仮定するなら今回の件に合致するからな)

叡智を授かるのは都合が良過ぎるが、タブラの一部を植えつけられているならば話は別だ。

そこに至るまでの体系的な知識を持った人物が訪れることは彼にとっても利益だし、その能力をコピーさせてもらう代わりに何らかの能力を授けて居るならば筋は通る。

ゲームの中でこそ知識はスキルや魔法のコピーに過ぎなかったが、現実化する事でタブラの知識や考え方までインストールできるのであれば、確かに様々な発明をすることが可能になるだろう。

(タブラさんはルベドの開発(?)に必要な知識を得られるし、現地民も知識やレベルが手に入るしウインIIウインだよな)

まあそれはタブラ化するのであって、元の本人の自我が無くなっていく様な気もするのだが…。

故人の遺産を使って自分の研究を進めようと言う奴に同情するつもりはなかった。

叡智を求めた結果が、叡智その物に成り果てるのならば本望だろうと思っておく。

「モモンガ様。そろそろ全部回る」

「すまない。考え事をしていた。報告に行くとするか」

歩いている間に色々考えが飛んだ気がするが、その分だけ整理する事ができた。

目的は一つにまとめられそうだし、今は地下遺跡の探索に専念するでしょう。

「もしかして地下墓地^{カタコンベ}や沈んだ町というのは旧市街区だけなんですか？」

「ええ、そうですよ。この辺りは元もと砂州ですので、洪水や地震の影響で地面が下がっていったのと補強をし続けた結果みたいですね」

パトロールの報告ついでに反応があった場所を尋ねると、依頼人(使い走り)の男が説明してくれた。

頭の中にメモをしておいて重点的に調べる場所に決めておく。

そして余計とは思いつつも、更に一つ尋ねておくことにした。気が付かなくて失敗された場合、結果として自分の評判も落ちてしまうからだ。

「そういうえば自分は探査魔法で広域を探知しますが、新しくやって来る奴対策はどうしてるんです？ 町に入り込んでるのを殲滅しても新しいのが来たんじゃないですか？」

「アンデッドの気配を調べられるタレント持ちをルート上に配置しますよ。そいつ自身は強く無いのと、特に広くも無いんで決め打ちするしかないですがね」

なんでも常時知覚できるのが売りらしく、町に来る為に必ず通る場所の警備を任せて居るとか。

そいつの護衛を兼ねてレイスに攻撃可能なマジックキャスターを付けているので、追加でレイスが増えることはないそうだ。

モモンガは普段から身に付けている探査防護の指輪を見ながら、あぶないあぶないと溜息を吐いた。

（タレントというのはクラスのパッシブ能力みたいなものかな。生まれ持ったの才能みたいで選べない様だけど、他と併用できるのってズルイよな）

自分は現地の住人と違って100レベルという遥かに強大な能力を持っているのだが、そのところを柵にあげてタレントを羨ましがるモモンガであった。

「レイスの移動は基本的に生前の常識に縛られてますから、その体制なら問題なさそうですね。自分は地下の巡回に加わってから、念の為にもう一周外を回ってみます」

「そうしてくださいと助かります。既に何体化か撃破したというならもう大丈夫だと思うんですが」

タレントに付いてもう少し聞きたいが、今は地下^{カタコンベ}墓地探索に加わる話へ繋げておく事にした。

パパッと回ってレイスは既に倒してしまっているし、『じゃあここで終わりにしましょう』などを言われては困るからだ。

魔法知覚の眼を飛ばすにしても姿を隠してコツソリ回るにしても、出来る限り肉眼で回るにこしたことはない。

そうしてモモンガは旧市街地にある公会堂の中へ赴く。

そこに入口の一つがあるからなのだが、祭礼に使う場所だそうで案内板があるか案内人でも居ないか期待しているのもある。

●カタコンベ地下墓地に隠されたモノ

以前に公会堂に訪れた時、シズが気が付いた隠し部屋は地下墓地カタコンベの入り口だった。

言われてみれば祭礼を行うにしても、遺族が一時待機するにしても丁度良い。年月が経つ前は旧市街地の中心だったのだから尚更だろう。

普通に使う場合は墓地の入り口が見えるのは不景気なので、隠し部屋になっているというのも理解できた。

しかし、理解不能な事もある。

「最初の部屋こそ綺麗だったけど、これってまさか……」

「骨の柱」

そこに在ったのは地下階を支える壁を補強するかのようには、ビツシりと積みあげられた骨たちだ。ダンジョンのように路が形作られてはいるが、それぞれに丈夫な壁と無数の骨が積まれていた。

建物の残骸が時々見えるのは当然のことながら、アンデッド化を妨げる為だろう聖属性を感じさせるアイテムが配置してある。

全体的にも荘厳なイメージになるように構成されており、骨の塊でありながら恐ろしさを感じはしなかった。しかし……

「そりゃ災害の後だから余裕が無いのも判るけど……。これじゃあまるで死体を利用してみたいじゃないか」

不思議と冒流しているとかが不敬ではないかと言う気もしなかった。

精神までアンデッドになっているのか、そういったことは倫理的には気になることはない。

「なんだ気に入らないのか？ 人間、死ねば同じだぞ」

「いえ、効率的だな……とは思いますが。ただ、自分の家族がこうだったらと思うと、ちよつと考え込んだだけです」

不意に掛けられた声は以前に見た聖騎士崩れだ。

あの時に見た中で最も個人戦闘力が高く、アンデッド探知も可能なので地下墓地カタコンベの巡回担当なのとか。

もつとも、ぶつきらぼうな皮肉屋で性質の合う小人数だけで固まったグループとのことから、単に隔離されていると言えなくもない。

「それはまともに向き合えた奴の言葉だな。戦禍に襲われたら自分が生き延びるので精いっぱいだ」

「判るつもりですよ。親と材料が区別付かなくなった友人が居ますから」

ちよつとした事故で親が死んだと聞かされ、死体はというと『あの中のどこかだ』と言われて回収も不可能だったそうだ。

モモンガが友人のことを思い浮かべて居ると、聖騎士崩れはそれ以上何も言わなかった。

もしかしたら彼の親もそんな風に死んで、死に目に会えない状況だったのかもしれない。

「俺たちもこの辺を巡回しますね。まだの場所とか：あと不埒なやつが穴を開けた場所があったら教えてください、簡単に塞いでおきますので」

「教えてやらんこともないが、余計なことは止めておけ。連中は知識を得る為ならば何をやっても許されると思っっているからな」

実際に塞いだ壁を破り直して侵入した例もあるらしい。

モモンガは苦笑しつつも侵入者たちの事を笑えなかった。ユグドラシル時代はゲームだったとはいえ、今度は自分も手を染めるつもりだからだ。

「シズ。大丈夫か？」

「覚えた」

「ほう：随分と頭が良いお嬢ちゃんだな」

シズが珍しくアクセサリーを弄りながら記憶して居たので、なんとなく察する事が出来た。

おそらくアクセサリーに見えるが記録装置の類なのだろう。シズは人間に見えるが自動人形オートマターであり、出来ない事も多いがその分オプ

シヨンアイテムは充実して居る。

「俺だと場所はともかくルートまでは無理ですからね。自慢の子ですよ」

「むふ〜」

「……」

娘自慢には付き合えないのか聖騎士崩れは巡回に戻った。

まあ任務だから情報の交換をただけで、本来は人付き合いの良い方では無いのだろう。モモンガの記憶ある聖騎士とは随分と違うなと思うのであった。

「さてと外郭…というよりは、もっと地下へ潜る場所を見つけないとな」

「ここ違う？」

シズの言葉に頷いてモモンガは明かりに照らされ荘厳に見える場所を指差した。

「ここはあくまで他人に見せる為の場所なんだ。公会堂から降りた場所にあったエントランスと変わらないよ。あっても監視装置の類かな」

遺族が降りて来て故人を偲ぶ為の場所である。

バチ当たりとは思わないが、第三者に見つかる可能性は高いし隠せる場所も限られてしまう。この層にあるのだとしたら、とつくに全て見付けられているだろう。

「だから本命は洪水や地震の度に埋まって行った町の方。遺族に紛れて地下に降り、コッソリそつちに入って研究する場所って感じかな」
「…と言うことは…こつち？」

一応は埋まってしまった町の方へ降りる場所もあるのだという。

そこを指して整った墓所では無く、建物の残骸が多い場所を探して歩く。

何しろ上に建築する時は徐々にやっているわけだし、町全体の補修が一気に済むはずがない。更には地下で何か起きた時の為に確認できる方が良いわけだし、地下墓地^{カタコンベ}だって大洪水や大地震の度に造っているだろう。

「それらしくなって来たな。あとは本命が隠されている場合に備えて、時々探査魔法で探知して行こう。：もし本格的なダンジョンだったら要警戒だぞ」

「はい」

現時点では町の遺跡を利用して居る形だと思っているが、場合によつては〈ザ・クリエーション天地改変〉の魔法で地下空洞を創造して居る可能性もある。

その場合は本格的なダンジョンを作っている可能性があり、危険度は相当に高いと思われる。

結果としてはその中間であり、埋もれた町を発掘して再利用した疑似ダンジョンが待ち受けて居たのである。

●新たな生命

下層区画への路を発見したモモンガ達は場所を記録し、一度地上に引き揚げてから無駄とは知りつつも外の探査に赴いた。

そして一仕事終えてから、問題個所を何度か魔法で確認して居る。

「そろそろ良いか。戻ってくる気配も無い様だしな」

モモンガ達は念の為に意匠を変えてから記録した場所へと転移する。

下層区画の扉を越えて暫くは代わり映えの無い：残骸を補強したような光景だった。

それが変化していると理解できたのは、埃や砂が薄くつもった中で侵入者の痕跡を見付けてからだ。入って行く足跡と出て行く足跡の数が合わないらしい。

「モモンガ様。こつち」

「御苦労。だが気をつける。全員分の足跡が無いと言うことは、それなりの防御体制のはずだ」

シズがソレを見付けたのは、深い位置にある割と大きな建物痕だった。

外から見れば土砂で埋まって使えない様に見えるが、シズに言わせるとそう見えるだけで入り込めるとのことだ。

建物の構造材も頑健で、特に補強しなくても使えることから入り口

として流用されたのだろう。

不謹慎だが犠牲者が出て居ることを知るとダンジョンらしさを感じる。

罨とモンスターによる防衛体制を警戒しながら潜りこむと、今までよりも圧迫感を感じる。同時に湧き起こる高揚感がゲーマーとしての気分を思い出させてくれた。

「…何か引きずった跡がある」

「奥へか？ ならば邪魔になる侵入者を片付けたと考えるべきだな。となるとスライムやアンデッドよりも知性を与えたゴーレムや妖精・妖魔の類かな」

久々の冒険らしい冒険でモモンガは実に楽しくなっていた。

「錬金術師が関わるならホムンクルスという考えもあるか。全く…死体は情報を語ると言うが、一つ一つの情報から全体像を組み立てて行くのはゲーマー魂を刺激するな」

「モモンガ様…忘れたら駄目」

ちよいちよいとローブの袖をシズが引いていた。

忘れるなとちよつとした自己主張だが、最初は何のことか判らなかった。だが暫くしてシズの種族に思い至る。

「なるほど。自動人形オートマターか。確かにその線もありだが…いや、タブラさんが完全な生命とか新種族創造を考えるならば、ホムンクルスや次世代ゴーレムと並んで大いに有望だな」
「ん」

過去の大錬金術師がタブラであるという予想をしなかったために、大いに後手に回っていた。

その反動か想定の外を、タブラが黒幕でありモモンガにメッセーヂを残しつつ研究を進めている物だと考慮してしまっている。もちろんそれ以外の考慮もする訳だが、どうしてもその方向に考えが流れてしまうのだ。

もっとも、タブラであるという前提に立てば話の筋が立つのも原因ではある。

倫理的に問題あるから新しい異形種の研究をするならば見つから

ない場所で行う必要性がある。…そこに不便と同居する形でロマンとしての秘密基地を楽しむのだ。

体系だった知識が欲しいから、定期的に自分の知識を餌さに賢者たちを呼び寄せてそれらを喰らう。…知識を交換した賢者は新しい餌さであり成果として世に研究を広める。

指を折りながらそう思考をまとめて居た所で、奥の方から近づいてくる影が見えた。

「…シズ。数を減らすまで魔力弾の使用を許可。後ろのガラクタは任せる」

「はっ」

モモンガはどんな奴が近づいてくるのか確かめると、足を止める為に前に出た。

一撃は回を迷うだけの見た目と急接近するだけの性能を持ったのは一体、後は見た目からして研究途上だ。

「っ加速した？ さっきのは様子見か、それとも時間制の強化か。
グレート・フルポテンシャル グレート・マジックシールド
〈上位全能力強化〉〈上位魔法盾〉」

モモンガは能力値を増大させる魔法と念の為に一定率で物理攻撃を軽減化する魔法を使用。

相手の加速状態に付き合うフリをしながら、ひとまず突破を中断させた。

まずは小剣を掲げて相手の手を防ぎ止め、防げない攻撃は籠手で勢いを反らせながら何者かを確認しておく。

「鉄爪？ ホムンクルスや自動人形だオートマターとすると肉体武器と見た方が良いな…レベル依存系は本体次第で強化できる」

なめらかな加速があった段階でモモンガはゴーレムであるという仮定を捨てる。

確かに高性能のゴーレムならば加速は簡単だが、もつと直線的で強力な加速であることが多い。

剣技や拳技を導入しようとしたこの動きは、直線的なゴーレムでは不可能だからだ。高度な知性を持たせたとしても得意傾向から違おうだろう。

そして闇を照らす光弾が飛び交い、後続の異形が沈黙して行く。数発飛んだところで前衛の敵は切り結ぶのを止め、一度距離を取って一撃離脱を繰り返す。

「それなりに学習能力があるようだが判断力がまだ甘いな。攻撃が通じてないならば情報を持ち帰るべきだ」

敵の数が減った段階でシズは貴重な魔力弾から、実体弾のフレシヨットに切り換えて居る。

彼女にはその判断ができるし、目の前に居る個体がホムンクルスにしても自動人形オートマターにしても出来が悪過ぎた。

完成品の極致であるNPCと比較するのも可哀想かもしれないが、開発途上の品を侵入者対策に当てただけと思われ貴重な資料とは思えない。これならば倒しても問題無いだろう。

「さて、防具と無効化の区別が付かない哀れな子よ。ここまでだ」

モモンガは籠手というよりは上位物理無効の力で防いでおり、今度は受け止めることを完全に止めた。

爪のモーシオンに合わせてカウンターを決め小剣を相手の肩にめり込ませる。すると硬質な感触の後、僅かに遅れてナニカを断つ反応がした。

しかし動きに急な変化は見られず、腕一本が動か無いことによるバランスの変化による能力の低下しか窺えない。

「肩が動か無いほどの裂傷を受けて躊躇どころかダメージによる能力劣化なし。決まりだな、シズが正解だったか」

格闘戦を教え込んだホムンクルスの場合、人間の戦闘を参考可能なので強くさせ易いが、攻撃を受けると出血や筋肉の断裂で能力が下がるどころも同じだ。

それを考えれば自動人形オートマターに試験的な機構を組み込んで居ると判断出来る。

「さて、どの魔法で仕留めるかだが……。参ったな、崩すとマズイから強力な魔法が使えない。面白いシチュエーションだ……フッフ」

上位物理無効化Ⅲがあるため、相手の攻撃はレベル的にモモンガに届くことはない。

しかしこちらの攻撃は強力過ぎる物と、自動人形には効かない死霊系の魔法が主体だ。

強力な魔法を使ってこの地下遺跡が崩れても困るし、かといって白兵戦では格上を倒す程の能力を持って居ない。…正確には倒せるように『成る』魔法が無いでもないが、100レベル相応の戦士だとはり一撃で地下遺跡を破壊しかなないのが難点だ。

「仕方無い、効率悪いけど魔法を収束化させて倒すでしょう。
コンバージョンマジック ドラゴンライトニング
魔法収束化・龍雷」

モモンガの腕に絡みついた白い光が、急速に小さくなって指先から閃光が生じる。その瞬間に一直線に閃光が迸って、自動人形を貫いた。

コンバージョンマジック
魔法収束化は範囲の広い魔法を対象一体に変更する物で、
ワイデンマジック
魔法範囲拡大の逆の位置にある存在だ。

まさにこんな時の為の魔法だが、単体魔法と比較するならばMP効率的には最悪である。とはいえ他に方法は無いのでまさしく仕方の無いことではある。

「よし、撃破したな。この火力ならば壊れた体を調査できると思うんだが…」

「モモンガ様、少し先に上に空洞。…っ！」

破壊した自動人形を確認しようとした時、シズが危険を報告する。

退避行動を行うよりも早い反応が、その空洞からやって来た。

こちらの行動に迅速な対応出来る当たり、落下物を仕掛ける罠などではありえない！

飛来した幾つかをシズが叩き落として、更に念の為に仕掛けておいた上位魔法盾がダメージに敷居値を儲ける。

元のレベル差や遺産級である防具もあり、カスリ傷にまで留めて居た。

だが…これはモモンガが初めて受けた傷である。

「くおっ!? これが痛みか。ハハハ、素晴らしいな。上位物理無効化を突破できる作品ということだ。素直に称賛しようじゃないか」

神話級の防具に身を固めれば全く通じないレベルだが、遺産級なら

ばギリギリ突破できるレベル。先ほどの個体を囮に情報収集して待ち受け、シズが探知・報告した瞬間に行動する判断力を持っている。敵として見るなら微妙だが、味方の研究成果として見るなら実に頼もしい作品であった。

自動人形の研究成果ということならば、条件さえそろえば量産できるということだ。『彼』が作りあげた作品であると考えれば、研究は着実に進んでいるのだと祝福すらできた。

「戦う前に尋ねるとしよう。君はラピス・フィロソロム…いや真なる大錬金術師タブラ・スマラグディナの作品なのかね？」

『相手が誰であれ、試す様に仰せつかっております』

その言葉をモモンガはタブラの伝言なのだと判断した。

実際にはラピス・フィロソロムという錬金術師の遺産がこの奥にあると思わせて置いて、洗脳するアイテムがあることを隠した言葉なのだと推測する。

誰がどう応えても奥に誘導する為の言葉であり…同時にモモンガならば、そのアイテムの真価を引き出せると信じた言葉なのだと、受け取っていた。

「では採点と行こう。…シズ、手を出すなよ」

「はい」

上位物理無効化Ⅲを突破した時点でレベル60を越えて居る。

シズは実力的に対抗しえないし、狙撃しようと待ち構えるにもこの状況では少々難しい。

また範囲攻撃でモモンガごとという手段を取ると、先ほど苦労した様に周囲を爆破してしまう可能性の方が高いだろう。

「大人げないとは思いますがレベルが60台で70目指してるならこれだよな。〈時間停止〉、〈魔法遅延化〉からの〈魔法収束化・龍 雷〉つと」

モモンガは時間の停止した中で後方に移動しつつ、楽しみに先ほどの自動人形を撃破した魔法を使用する。

時間解除した瞬間に直撃する筈なのだが…。

自動人形は後方からの魔法を仰げ反りながら回避し、それでも不可

能だと悟っているかのように腕を犠牲にして直撃を避けたのだ。

そして即座に反撃に打って出ておりナニカが飛来して来る。

「やるなあタブラさん。時間対策が不可能と悟った時点で、知覚系だけ先行して実装したのか。それと…こいつは銀系みたいだな、面白い武器だ」

見えない筈の攻撃を避けたということは、時間が止まった中でも見ることだけは出来たということだ。

もちろん四方八方に目があるだけの可能性もあるが、何らかの手段で停止中の時間を見て居ると言う方が対処し易いだろう。

自身に絡みつくミスリル銀製の糸ノコギリを掴みながら、痛い痛いと感じて居た。

「格納型の腕が四本で足は最初から四本。腕は奇襲用かな？ここに来る奴はシーフやマジックキャスターの可能性が高いだろうし、それで十分なんだろうけど」

ミスリル銀製の糸ノコはオートマター自動人形の腕部から直接生えており、それが三本ほど飛んで来ていた。

指一本一本から生えて無いのは、腕の筋力依存なので指ではダメージを出しきれないと判断したのだろう。

とはいえこの程度の武器を握りしめたとしてもモモンガの指が落ちる事も無い。1ダメージを積み重ねてもたかが知れて居ると言える。

「さっきのが40台で、こいつが60台強として、次のランクが愉しみだな。したら俺でも危険かもしれないし、その時は地上で戦わないといけないや」

「…モモンガ様」

心配そうな顔でシズが見つめて来る。

このくらいで倒され屋しないよ…と言おうとして、一言付け加えておくことにした。

「心配しなくてもシズを置いて行きやしないよ。シズは友達の娘、つまり俺の親戚同様の大切な存在だからね」

「ん」

その言葉を掛けた瞬間に、シズ恥ずかしそうにそっぽを向いてしまった。

：自分よりも強い同族を見て、それでもタブラに置いて行かれた同族を見て、自分もまた捨てられるのかもしれないと心配して居たようだ。

「そろそろ倒して奥の研究室を確認しようか。〈時間停止〉、タイム・ストップ〈魔法遅延化〉ディレイマジック〈魔法三重化・魔法の矢〉トリプレットマジック。……〈鈍足化〉マシックアロー」

モモンガは停止解除と同時にもう一つ放った。

先に掛けた魔法マジックアローの矢は最大ダメージが低い扱いが扱い易い対個人魔法で、レベルが上がるごとに増える矢の数で押し切る魔法だ。

追尾性能があり避ける事自体が困難であった。

するとどうだろう、自動人形オートマターは先ほどの様に腕を犠牲にして直撃を避けるのではなく……。

防御すら捨ててこちらに向かって来たのだ！

「まあ無駄なんだけどな。おやすみ」

モモンガが魔法の矢に遅れて、停止解除と同時に放った魔法は足を遅くする為の魔法だ。

戦闘経験上こういったガーディアンは生命(?)と引き換えに倒そうと突撃して来ると看破していたので、予め進路に放っておいたのである。

自動人形オートマターを撃破した後、モモンガ達は奥の間にやって来た。

そこには手術台と作業台を兼ねた物があり、キマイラから採ったらしき生体パーツや、モモンガには理解できない機械類もある。

そして：恭しく飾られた宝玉の様なモノが飾られていたのであった。

「ビンゴ！ これユグドラシル時代でも見たけど、タブラさんの一部じゃないか。エグイよなあ：知識を求めてこれを自分の体に取り入れたら、タブラさんになるんだぜ。まさにタブラ化されるってやつだ」

ちつとも笑えないギャグを入れながら、モモンガは宝玉を取り出した。

それは良く見ると、ドクドクと脈動しており生命の輝きが窺えたのである。

こうしてモモンガ達は地下遺跡を攻略し、ラピス・フィロソロムの遺産：いやタバ・スマラグデイナの伝言を手に入れたのである。

どんな宝よりも失われた仲間との絆を手に入れたことは、モモンガに取って何度鎮静化しても収まらない、深い満足感を与えてくれたのだった。

外伝：タブラさんの伝言

シズは目を開けるとキョロキョロと周囲を見渡し、モモンガを見て小さく頷いた。

そしてテーブルの上に置かれたアクセサリー……自動人形用の記録装置を見て、もう一度頷く。

その表情にいつもの無表情さはなく、興味があるモノを追い掛けて居る時の様だった。

「…タブラさん…なのか？」

「どうやら上手く伝言を渡せたようだね。モモンガさん」

モモンガはシズに対して奇妙なことを尋ねた。

だがより一層奇妙なのは、タブラ・スマラグディナなのかという問いにシズが頷いたからだ。

声もまたいつもの抑揚の無い喋り方では無く、どこか面白いようなトーンが窺える。

「タブラさんは今、何処に居るんですか？」

「私が必要に合わせて拠点も姿を変えて居る筈なので、何処に居るかを説明するのは難しいな。時間も無いしシズ・ベースで人格の再統合が始まる前に、私が何を考えて居たかの説明をしておこう」

必要ならばその情報を使って追って来いというのだろう。

そこまで言っておいて、シズの貌をしたタブラは改まった口調に改める。

「…ユグドラシルを知る者は幸いである。自分が何処から来たのかを知っているのだから。それゆえにタブラ・スマラグディナが考える、この世界のカタチを紐解こう」

（自分で時間が無いと言っておいて…。そういえばこういう人だった…）

確か異世界に召喚された勇者が関係する物語の序文だったろうか？

ゲーム時代に良く聞かされた語り口を聞いて、モモンガは少しだけくすりと笑った。

これから重大なことを聞くのだから一言も聞き逃せないが、楽しかった懐かしい日々を思い起こさせてくれるからだ。

●世界のカタチ

「一体、何者がこの世界に呼び寄せたのでしょうか。そして何の為に……」

「手段は噂に聞くワイルドマジックだとは思う。だがタレントと言うモノがある以上、誰かは特定はできないな」

かつてタブラ・スマラグディナは人間社会に入り込み、時には巫人や異形種たちとも交流を果たして居た。

その旅も落ち着いたところでアルベドが発した質問に、タブラはつまらなさそうに答えた。

「目的に関しては絞ることができる。記録を遡る限り六大神とやらが最も古いプレイヤーの記録で、一地域とは言え彼らは人を平穩に導いた」

「……」

タブラが推論を重ねる間、アルベドは一切口を挟まなかった。

彼は思考を重ねて整理して居る間が一番楽しいのであり、その神聖な時間を邪魔する気は毛頭ない。

「あくまで仮説だが、『自分達を助けて欲しい』という願いが最初にあると思われる。そこで制御が途切れたのだとすれば、次に現われた八欲王や我々はそれに便乗した形だろう」

「我々は利用されておらず、道筋に乗っただけ……それならば報復は必要ない様ですね」

制御されておらず便乗したのだから命令などされていない、その後の混乱は制御不全による自業自得だし、自分達も操られていないのだから怒る必要はない。

その言葉にアルベドは頷き相槌を打つと、楽しみに窓辺に立つ主人を楽しませる為に続きをねだって見せた。

「大凡の世界創世神話に置いて、最初はいずれも『権能』と呼ばれる性質の押しつけ合いが始まる。だが時代が下り『神』に当たる者へ祈願する形式になると、グッと成功率も規模も小さくなっていくんだ」

「それが始原の魔法、ワイルドマジック。ドラゴンロードだけが……いえ彼らが主に使うと言う魔法……」

アルベドはこれまでのタブラの言葉を遡り、自らの解釈を訂正した。

ドラゴンロードだけではなく、タレントによつてそれを可能とした者が居るかもしれないからだ。

またドラゴンロードと呼ばれていても、実際にはドラゴンではないモノも含まれるために、タブラは断定する事を好んで居なかった。

おそらくね。と頷きながらタブラは他の者には見分けにくい笑顔を浮かべた。

誰にも告げて居ない仮説だが、身内であり彼自身の分身とも言えるアルベドにだからこそ伝えても恥ずかしくは無い。

「もう一度さっきの仮定に戻るんだが、何らかの大事件が起きて対処を余儀なくされた。災害なりドラゴンロード同士の争いなり、あるいは単に亜人の侵攻……。そんな感じのピンチに対して、ワイルドマジックを使用して『助けてくれる事が可能な存在』を呼んだのだろう」
「その結果が六大神と呼ばれるプレイヤーであり、人類の守護者を自称するフランスの建国ならば、確かにドラゴンロードの所業とは思えませんわね」

結果から逆算するのであれば、むしろタレントか何かでワイルドマジックを限定的に使用した人間の可能性が高い。

ドラゴンロードではなかったからこそ制御力が足りなかった。

そして好意的な存在だけでなく、次々に呼び寄せてしまい八欲王などの後続が現れた……。そう考えれば全ての辻褃は合うのだ。

「とはいえ、ソレは不測の事態であつたならば……だ」

「えっ?」

タブラはこれまでと真逆の事を言い始めた。

一度付けた辻褃をひっくり返し、別の見方を付け加える。

「ドラゴンロード達の処分も兼ねて居ると見方を変えれば、この地の支配者が邪魔者を一気に片付けたと思えなくもない」

「その場合は速やかなる報復を。タブラ様を利用する者に思い知らせ

てやらねば！ ご命じくたされれば直ぐにでも探し出し相応の苦痛を与えて御覧に入れます！」

六大神を呼び寄せ人類の保護を行い、文化圏という新しい文物を作り出した。

そして力を付けた六大神もろとも、邪魔になったドラゴンロード達を片付ける為に八欲王を呼び寄せる。

次なるシーズンに訪れたタブラ達は、八欲王が倒せなかった時の保険であり、その後始末を任せる為かもしれない。

一瞬でそこまで理解してみせたアルベドは、溢れかえる怒りを制御しながらタブラの号令を待ち詫びる。

「その意気や良し。と、言うべきかな。しかし私はそこまで焦る気は無いんだ。こちらの世界に呼んでくれた恩が無いとも言えないし……やるなら確実に勝てるよう準備をすべきだと思う」

「短慮を申し上げました。お許しください」

怒りを無理やり抑えつけながら、アルベドは涼しげな顔を浮かべて見せた。

タブラが恨んで居ない・協力する気なのであれば、勝手に動くわけにはいかない。激情に任せて暴れるとしても、それは彼が言うように確実に勝てるようになってからだ。

それまでは万が一にでも監視が付いている可能性を考えて、不快さを抱いたことを悟らせる訳には行かない。

「ということは人間の学者たちに協力して居るのも、戦力調達の一環なのでしょうか？」

「そのつもりがない訳でもないけどね。アレは趣味の一環だし……最大の援軍であるモモンガさんの到着を待つまでの暇潰しだよ」

外面だけは冷静さを装ったアルベドの怒りが霧散して行くのが判る。

タブラに取ってモモンガはこの世界に来るために最大の協力をしてくれた友人であり恩人であるし、アルベドに取っても最後まで残ってくれた至高の41人はセカンドマスターと言うべき相手だ。

タブラが処分・捕獲せよと命じない限りは、敬意を持って迎える相

手である。

「モモンガさんならば上位までのアンデッドを定期的に召喚できるし、こちらに来るための実験中は『強欲と無欲』を装備して居た筈なので、アンデッドの副官も準備可能だ」

「確か……アンデッドの副官は代償と引き換えに最上級の存在まで召喚できるのでしたね。それならば信頼面でも戦力面でも援軍としてこれ以上ない御方かと」

プレイヤーが一人増えるだけでは無く、それに準ずる護衛を増やせるのは何より心強い。

同じランクの勝負であれば潰し合いは避けられないし、それを製造可能なアンデッドで代用できるならば一気に優位に立てる。

仮に『支配者』とやらがレイドボス級の格上であつた場合でも、それらを犠牲にして情報収集や消耗戦を行えるのだ。まさにモモンガと合流できるかどうかで戦略も大きく変わってくる。

「それで……モモンガ様はいつごろの御到着なのでしょうか？ ゲートを潜る前に動き出す気配が見受けられましたが」

既に来ている筈などとはアルベドは口にしない。

何しろユグドラシル終了時に転移したのは同じなのに、六大神も八欲王もタブラも出現まで時間がずれて居るのだ。

ゲートを潜つたのは僅かな時間とはいえ、どれほどの誤差が出るかは判らない。

「おそらくは百年か二百年後……。だとは思うのだけど確証は無いな。ワールドアイテムの保有数が鍵だとは思うのだけど、こつちにはコレがあるからね」

「タブラ様が手に入れられた、『ダヴはオリーブの葉を運ぶ』ですか……」

それは行つた事の無い場所へ移動する際に、大きなボーナスが掛るという効果を持つて居た。

またランダム転移してしまった場合、最寄りの安全地帯に軟着地させてくれるレスキュー効果も所持して居る。

それゆえに世界の謎を追い掛けるギルドたるワールド・サーチャー

ズにタブラが協力し続けて、ゲーム終了間際にようやく手に入れた物だった。

「最初に転移した者が、都合良く人類救済を考えるととは思えない。となれば、何らかの引力があるだろう」

「それが最初に祈願した者の条件、人々の救済……。そこで願いの引力を使い切った、あるいは次の望みとして六大神とドラゴンロードを始末できる八欲王を呼び寄せた」

「法国を警戒して近寄って居ない為、正確な資料を確保できて無いが、サイクルは百年単位だと考察されている。」

「ワールドアイテムがキーならば、二つと三つの差でモモンガ達は百年後のはずだが……。」

「タブラが目的地へ移動する引力を持って居る場合は、百年分前倒しになっている可能性が高いのだ。」

「所持二つが百年後というのがデフォルトで、三つは二百年後なのかもしれない。」

「まあどつちでも我々の寿命からすれば関係ないと思うけどね。問題は動くのが間にあわず、ナザリックごと転移する場合。いやそれは良いか……。その場合は戦力の確保が楽になる」

「更に時間は掛ることになりますが、他の守護者もやって来るのであれば、むしろその方がありがたいとすら思えますわ」

「それほどまでにナザリックの戦力は充実して居るし、時間の経過が問題にならない以上はそちらの方が理想的な展開とも言える。」

「……もし100レベル複数人で『支配者』に勝つのが難しい場合は、ナザリックないし他の拠点持ちプレイヤーを味方に付ける必要があるだろう。」

「いずれにせよ、支配者が居るかどうかの確認が最優先だ。そしてオートマターオートマター自動人形やゴーレム使いなどのクラスを育成しつつ、モモンガさんを待つ」

「はっー!」

「こうしてタブラ・スマラグデイナは人間社会に融け込みながら、やがて来る機会を窺ったのである。」

●それが世界の選択である

タブラが目指したモノを語り終えた時、モモンガは茫然としていた。

この地の支配者。もし世界運営にまで関わっているのだとすれば、創造主と言っても良いかもしれない。

果たして、そんなものが存在するのだろうか？

「ちよつと待つてくださいいよ。支配者が居ると思った根拠はなにかあるんですか？ まさか居た方が自然だからとか言わないでしょうね！」

「武技の存在だよ。タレントに関してはそれほど違和感が無かったんだけどね」

驚きながらもソレを形にしようとしたモモンガに対し、タブラの残滓は他愛なく口にした。

「最初は魔法の様に誰かが『二十』なり、ウイッシュ・アポシ・ア・スターへ星に願いをの強化版であるシューティングスターでも使ったのかと思ったんだ」

「た、確かに『二十』ほどのアイテムを消費すれば可能そうですね。魔法システム導入なんかも五行相克を使えば……。じゃなくて、どこが妙だったんです？」

モモンガは強力なワールドアイテムの中でも更に特別な、二十と呼ばれる存在を思い浮かべた。

それらの幾つかをアインズ・ウール・ゴウンも所持していたし、PKやギルド戦争などで使用された例を見たことがある。

モモンガが口にした五行相克は魔法システムへの介入要求権であり、それが類似するアイテムを使用すればこの世界でもユグドラシルの魔法を使用出来るだろう。

タブラの説明で『何故自分がユグドラシルの魔法を使えたか、現地民が使えたのか』という疑問を解消したものの、ソレと武技を比較しても特段に支配者だとか創造主の介入を思い付くことは無い。

「いいかいモモンガさん？ ワールドアイテムでの干渉は『全員』に共通するんだ。もしかしたら言語の翻訳も二十かもしれないけれど、魔法習得ルールなんかは決定的だ」

タブラが実験したところによると、マジックキャスターを数人レベルアップしたところユグドラシルと同じペースで魔法を覚えたと言う。「ここからが重要なんだけど、モモンガさんは武技を習得できたかな？　ちなみに私どこるかアルベドも無理だったよ」

「そういえば……てつきり戦士職専用かと思っただけけど」
タブラはモモンガの反応に頷きながら、八欲王も覚えて居ないだろうと教えてくれた。六大神のころには無かったらしいが……。

「使える者の記憶を奪ってみたところ、訓練しながら重要な気付きをした時にフッと覚えるようなんだ。聖刻RPGよろしくクリティカルとファンブル時に経験値を割り振れるのかもしれないけど……」
「あの、聖刻RPGなんて知らないんだけど……」

タブラはモモンガのツツコミを無視しながら、話の結論を急いだ。シズをベースにした記憶整理が始まっており、意識が混濁し始めたのかもしれない。……まあ、タブラは好き勝手に喋るのが好きなので、自である可能性も高いが。

「才能や偶然もあるのかもしれないけれどね。『彼らは』クラスチェンジやレベルとか抜きで、望んでいる種類の武技を覚えれるんだ。タンクならば〈要塞〉や〈シールドバッシュ〉といったようにね」

「現地民だけが武技を覚える……そしてクラスチェンジとかレベルアップ関係無しに？」

「とても都合が良過ぎる。」

ワールドアイテムで介入したのであれば、プレイヤーやNPCも覚えることが可能な筈だ。

クリティカルやファンブルした時に覚えるにせよ、防御系や知覚系の武技くらいは覚えてもおかしくないのに。

「ここまで恣意的なシステムは〈星^{ウイッシュ・アホン・ア・スター}に願いをどころか二十でも無理だろう。それが支配者なり創造主が居ると判断した理由だよ」

ワールドマジックならば可能だとしても、現地民だけが修行によって取得できるというのは難しい筈だ。

よほどのMP（魔力）なりLP（魂）が必要で、細かい調整を考えれば相当の負担だろう。

ドラゴンロード級の存在の中でも随一とされるような存在でもなければ無理だろうし、そんな奴が居るとしたら支配者でも創造主でも好きな名前を名乗ることが可能だ。

「この世界の住民は基本的にカンストレベルが低いけど、絶対ではない。もしカンスト解除された人間が居れば、異形種だけでなく人間種を含んだユグドラシル棲人すべてより強いだろうね」

「ユグドラシルでは一定レベル以上になると人間種の方が異形種よりも強くなるけど、それでも武技が加わったら勝てない……か」

あくまで同ランク、特化型でも10レベル以内という制限は付くが、現地民の方が強い可能性が高い。

連続攻撃はともかく割り込んで来るリアクション行動などは、ワールドチャンピオンでも無理だからだ。もちろん100レベルになるまでの経過クラス・スキルの中に似たような技があれば話は別だが、それだって一度か二度、武技は精神力次第で何度も使えるのである。

それにしてもユグドラシル棲人は無いだろう、まるで宇宙人じゃないか……と思うモモンガであった。

「それでタブラさんは確信……はしてないのか。調査を先行って事は。次のデータはゴーレムかビーストマスターの遺産で回収できると思っただけですか？」

「多分ね。途中で消されたり転生する方法でも見付ければ別だけど。ルベドを作る研究中なのに、ワザワザ他のクラスを先に育てようとは思わないよ」

支配者が居るといふ可能性が高いと踏んで、タブラは調査を開始する。

居るかどうかも判らない相手の調査は時間も掛るし、戦力として新クラスの育成をするのも時間が掛ると予想しているようだ。

それらの技術の成果をまとめてルベド作成に注ぎ込んでいるとのこと。

「判りました！俺たちアインズ・ウール・ゴウンの冒険は始まったばかりと言う事ですね！」

「ん。……時間か。再開の日を……楽しみにして……いるそうです」

語りたいたいという欲望をタブラの残滓が吐き出した為か、記録装置があるから何度でも修正できる強みがシズにあるためか。

記憶の整理と共に言葉はあやふやになって行く。

消えゆく友人にすがり付きそうになったが、シズの貌に戻って居ることと、タブラの残したデータは他にもあることは判っているのでモモンガは少女に抱きつく運命を回避する事が出来た。

こうしてモモンガに新たな目標が生まれたのである。

タブラさん外伝：ルーンの詩

●出逢い

地下を通つての移動中、転げ落ちて来たドワーフらしき死体を前に、奇怪な姿をした男は足を止めた。

パッと見ではつまらなさそうに、その実は興味深そうに死体を見聞き、改めて魔力感知／センスマジックを併用する。

「めぼしいモノはなさそうだけど……？　待てよ、これはルーンなのか？」

幾つかのマジックアイテムを持っているがどれも低位の物に見えた。

一番目立つマントが不可視化／インジビリティであつたことから落胆したのだが、良く見れば文字が擦れて見える。

「間違いない、ルーンだ。助けるか放っておくか……どうしようかな」カチャカチャと蘇生のワンドを弄びながら男は視線を巡らせる。

そこは洞窟の中であり、この死体は上方にある穴から落ちて来たのだ。もしかしたらルーン以外にも何か教えてくれるかもしれない。

それに興味本位で地下道を通つたらこんな出逢いがあつたのだ、面白いことが起きるかもしれない。

「助けるか。灰になったら笑えるけど」

そう言つて覚悟を決めるとワンドの能力を起動。

合わせてポーションを取り出し、穴が一番太い場所に魔法のアイテムで仮設の部屋を造り出す。

やがて死体が生者に成り、無事に蘇つたのが判る。

目覚め／アウェイクンの魔法を使うと、ごほごほと出来込みながらドワーフが眼を開けた。

「馬鹿なワシ……儂は確かに死んだ筈。それともここは死の国なのか？」

「話が聞きたくて蘇生したんだ。できれば名前を教えてくださいと話がし易いんだけど」

ドワーフは信じられない様子で自分の体を確認したが、男の奇怪な

顔を見た瞬間に何かしらの納得をしたようだった。

どう見てもバケモノであるが、それだけに何が出来ても不思議ではない。

「儂はゴンド、ゴンド・ファイアビアドじゃ。いつそ、あのまま死なせてくれれば良かった物を」

「それは君の勝手だけれど、できれば情報を話してからにしてくれると助かる。あと……内容によっては相談に乗らせてもらうけどね?」

蘇生のワンドは気にして居ないが、せっかくの出会いを無駄にするのは惜しい。つまらない目的だったらがつかりしてしまうが、偶然出会ったと言うスパイスはきつと大抵のことを愉しませてくれるだろう。

「儂は衰退して行くルーンの技術をなんとかしようと思っておった。じゃが才能の無い儂では満足に実験することもできず、せめて材料を集めようとの坑道に来たのじゃが……」

「ああ……モンスターに追われて落っこちたと。ところで才能が無いとはどういう意味なのかな? ルーンについても教えて欲しい」

ゴンドの話では上層には放棄された街があるらしい。そこにある坑道の一つに、彼は危険を承知で鉱石集めに来たと言うことだ。素材集めの苦労はユグドラシルでも味わった事であり、なんとなく納得する。

思案し始めた男に呼びかけようとして、ゴンドはようやく名前を聞いていないことに気が付いた。

「そういえばお主の名前は何と言うのじゃ? 一度死んだ身としては興味も無いが、こちらとしても名前を知らんと話し難い」

「ああ、私の名前を言うのを忘れて居たか。タブラ・スマラグディナ、ただの錬金術師さ」

白い蛸のような奇怪な姿をした男は、つまらなさそうに自分の名前を告げる。

これがゴンドとタブラの出逢いであった。

●ルーン・スミス

それからタブラは魔化の技術に押されてルーンが衰退して居るこ

と、そしてゴンドは一字しかルーンを刻めないことを教えてもらった。

彼が所有する魔法のアイテムに刻まれた文字を見せると、驚いて自分が知るルーンの一部だと反応が返ってくる。

「確認するけれど、刻めるのは一字だけ。でも知って居る限りのルーンは全てチャレンジできるんだよね？」

「その通りじゃ。流石に上位のルーンや秘儀のルーンは全ての詳細を知っておる訳ではないが」

徒弟も務まらないゴンドに見る資格はないのだが、彼の家は代々続く名家ということもあり調べることはできる。

訓練するにも他にやり易い字はあるので無理には彫っていないが、やって彫れないことはないだろう。

（ルーンを刻むのは魔法やスキルじゃないのか？ 1レベルでも職を得たら全て覚えられるが、刻めるのは一字から成長と言うのはバランスがおかし過ぎる）

マジックキャスターの場合は1レベル上昇ごとに三つの魔法を覚えることができる。

上位職で魔法扱いのスキルを覚える場合は、それとは別に一つずつというのが定番だ（異形種など魔法戦士系は別にして）。

（考えられることは二つ。本来は上級職で全て刻める筈だったのが、中級職で可能になった為にチグハグになっている）

アサシンの里にユグドラシルからやって来た忍者が教えたことで、いきなり忍者に出来る様になったとイジャーニヤについて考察したことがある。

その案が正しいとしたら、単純にゲームと違うから前提職のアサシンが解除され易いということなのだろう。

幸い忍法はMP消費で差が出る魔法であり、むしろ良い面が出たのだが、ルーン工匠は逆だったのだろうか。

中途半端に刻めることが逆に幸いし、無理に目指させて一字しか刻めない絶望を味あわせて居るとか？

「タブラ殿？」

「ああ、すまない。つい考え込んでしまつてね。でも……もしかしたら何とかなるかもしれない」

いつもの癖で考え込んでしまったが、タブラは触手のような手を振って大丈夫だと答えた。

これが説明中だつたら留らないかもしれないが、思案段階ではそこまで夢中になる訳でもない。

というか思案の中断とは考え直せ、別角度で見直せと言う視点の切り替えとして歓迎して居た。

「なんじゃと!? それはどういう……」

「うーんとね、ルーン刻印が魔法だつたら難しかったかもしれない。でも私が見た所、ルーン工匠はむしろ……」

魔法や魔法を伴う技術者系スキルであると考えれば考えるほどに矛盾が出て来る。

レベルUPで初期の文字から中級、上級と成るにつれて文字数が増えて行くならば判る。

だが最初に全て覚えることが可能で、文字数だけが制限されているのはいかにもチグハグである。

「簡単に言うとな、むしろ武技に近いんじゃないかと思うよ。だとすると整合性が取れて来るし、覚えられなくもない」

「武技に近いじゃと……? そんな馬鹿な」

タブラは驚愕するゴンドを尻目にコインを何枚か取り出して行く。そして銅貨を十枚ずつ、幾つかの山にし始めた。

「この山が君らの覚えた技術だと思つて欲しい。戦士がこのくらいで連続攻撃や双撃を覚えるとして、ルーンの一文字目はここ。多段攻撃や旋回攻撃がここで……」

「二文字目がその辺り……確かに言われてみればそうかもしれないが……」

戦士であれば早い段階でスマッシュやフェイントを覚えるが、ルーンミスは上位職なのでそこには存在しない。

10レベルを越えた辺りで割りと上位の武技である連続攻撃に1レベルで双撃と仮定し、ルーン刻印の一文字目もそのくらいと仮定

する。

13レベル目くらいに多段攻撃で14レベルで旋回攻撃を覚える段階とすると、そのくらいに二文字目と仮定するというのは判らなくもない。

「しかし難しさの段階でいうならば、魔法の類でも同じなのではないか?」

「ルーン工匠は無数の武器で扱う武技の代わりに、無数の文字で刻む業技。そう考えれば最初に全ての文字を覚えられることや、一文字ずつというのも納得が行くんだ」

反論してみせるゴンドに、タブラは愉しそうに答えた。

剣やハンマーを使い分けて武技を使う戦士に対し、鋭さや硬さという文字を使い分けるルーン工匠は良く似て居ないか……と。

「この仮定が成立する場合、なんとかして君のレベルを底上げすればいい。そういうアイテムも持って居るけど……まずは君の御仲間の職業を教えてください」

「……? 殆どは儂と同じ武具に携わっている者じゃが……まあ良かったろう」

タブラはゴンドの言葉を聞いて嬉しそうに頷いた(ように見える)。

この『殆ど』と言う言葉が、もつとも聞きたかった答えなのだ!

「なるほどなるほど。理解した、おそらく解明した。断言は禁物だがルーン工匠に成る為の条件と刻印のルールが判ったと思う」

「ほ、本当なのか!? 儂らドワーフが長年かけて積みあげて来たモノをこれだけの短時間で把握したじゃと!!」

半信半疑ながらゴンドは嬉しさと共に、言い様の無い殺意を覚えた。

これまでのドワーフ達が積みあげて来た技術を丸裸にされて嬉しい筈が無いが、それを止める術も止める理由も無い。むしろ継り付いて教えを請わねばならない状況が、悲しいほどに頭を冷してくれた。

「良いかな? おおよそこのくらいの段階で戦士は……別に兵士でも剣士でも良いんだけど、上の段階の武技を覚える。条件は戦えることだ」

「ルーン工匠は技術職ということじゃな？　そこまでは判る」

積みあげたコインを一旦崩して、帝国製の銅貨だけを選んで十枚ほど積みあげ直した。

適正な職業を積みあげた時に上位の武技を覚え、あるいはルーン工匠になることができる。

「そう、技術職である必要が出て来る。そこで武具を扱うのは、ルーンを彫るのが武具であることが多いからだ。ならば自分で作れる職を選ぶのが『普通は』最適解だ」

「じゃが……儂の限界はここまでじゃ。どんなに苦勞しても二文字目にする。僅かあと少しに届かんのじゃ……」

涙を浮かべるゴンドを無視して、タブラはコインの中から更に別のモノを選び始めた。

良く見るとそれも帝国製のコインであるが、銀貨や年代の古い銅貨が含まれている。

「ここで問題は最適解だということだな。だけれども、それが誰しもの最善とは限らない。さっきの話によると武具以外の職人も居ると言うが、ベストをつくしたつもりでベターで妥協して居ることだっでありえるんだ」

「ベすと？　べたー？　何を言っておるんじゃ？」

意気消沈して居る為か、慣れない表現を理解するのが送れたゴンドにタブラは首を振って続きを話す。

元より彼はゴンドの反論を待つてはいない、実に自分が話したいことを話すだけなのだ。

「要するに君に他の適正があるかもしれないってことさ。煉瓦職人としてレゴ・ルーンブロックを作ったり、服飾家になってルーン染色を編み出せるかもしれない」

「り、立体的なルーンに色彩でルーンを表現するじゃと!?　まさかその様な方法が……」

いまいち納得できないながらも、言いたいことだけは理解できた。

10レベル積み上げる必要があるならば、敵性の無い武具職人ではなく煉瓦職人なりガラス職人なり裁縫でも良いのだ。

なんだつたらドワーフの国には数が少ない木材を求めて、アゼルシア山脈を越えてもよいだろう。その過程で木工職人や石材を試しても良いかもしれない。

「どうせリハビリは必要だろう？　その中で手に馴染む試して行っても良いし、さつき言った立体とか色彩のルーンを開発することが試練になるならば、それを越えれば限界を越えて成長できるかもしれない」

「……どんな方法でも成長できればそれで良いか……。どうせ一度は死んだ身じゃ、それも良いかもしれん」

蘇生した以上は、これからの人生はオマケ。

そう考えたことでゴンドはやる気をだしたようだ。技術を手に入れようと国を滅ぼすと言うならば断わったかもしれないが、そうであれば特に躊躇する必要も無い。

「しかし……お主はなぜ儂を助けてくれるんじゃ？　何のメリットも無かるうに」

「単に私の考察が正しいかどうかを調べられること……。あとはそうだね、面白そうだからだよ。君が成功して失敗して誰かに影響を与えて……その先を考えて見ると良い」

それが一番重要だとも言うかのようにタブラは答えた。

「それが私のせいであり、今回の出逢いが遠因だったら、まるで物語りのようで面白いじゃないか。ただ平穩に暮らすだけだと世の中なんて大抵がつまらないものさ」

私は古い物語りが好きだ、どんな由来か想像するだに楽しい。

私は新しい物語りが好きだ、どんな切り口なのか想像するだに楽しい。

私は私と同じではない考えが好きだ、どんな発想の違いなのか想像するだに楽しい。

だから私は偶然が呼びこむ出逢いを大切に、愉しくキャラクターを育てて行くんだ。

バケモノに相応しい語り口でタブラ・スマラグデイナは唄う様に言葉を綴ったのである。

「そうか。儂には全く理解できんが、儂の行動がお前さんの利益に繋がっていると言うならば遠慮なく力を借りることができると言うものじゃ。よろしく頼むわい」

「ああ、そうしてくれて良いとも。私は友人と違って愉快犯では無いからね」

ゴンドには理解できない表現で、ナザリック一の愉快犯の友人であるところのタブラは静かに笑った。

そして一度、ドワーフの国に戻ったゴンドが旅に出るのはそう遠いことでは無かった。

●ヒトの切り口

タブラが教えてくれる錬金術や薬草知識の他に、ドワーフの国で学べる技術をゴンドは一通り試してみた。

今までに溜めた研究費用を全て使い切る勢いで、それでも手応えが無いと知ると腕を磨くためと称して旅に出る。

その過程でようやく己の才能を見出したゴンドは、漂泊の果てにリザードマンの村に居付いたのである。

「友よ、ようやく二文字目を彫ることに成功した。それだけでなく様々な知識を教えてくれて儂は感謝しておるぞ」

「構わないさ。私は興味本位でやってるからね」

ゴンドにどんな才能があつて、カンストと思われたレベルを突破できたかはこの際置いておこう。

ここで重要なのは、彼が二文字のルーンを刻む事が出来たということだ。

「リハビリを終えての二文字目、その後の改良刻印。そして二文字目。どうやら武技に近いと言う推測は当たっていたようだね」

「そうじゃな。このまま行けば新しい改良刻印を覚えるか、新技術を思い付く為に修行するか……というところかの」

ゴンドが修行で得た技術が大して意味の無かつたこともあり、ルーンと組み合わせる努力はとうに捨てた。

ここは昔からある改良されたルーン刻印方法を覚えるか、まったく新しい物を覚えて見るかが大きな節目だ。

「儂としてはどちらでも良い、新たな技術を覚えられるということは何も素晴らしい事じゃからな。ゆえに友であるお主に望みがあれば、まずはそれを試してみようと思う」

「まあ試したところで成功するとも限らないしね。そのスタンスで良いと思うよ」

ゴンドはタブラのことを友と言う割りに、その逆は無い。

また変に遠慮して居ることからも、力関係が判ろうと言うものだ。しかしタブラにはどうでも良いことであり、最初から立ち位置は変わらなかった。

あえて言うならば、ゴンドの警戒心が強まって融けて行く段階だというくらいだ。単に独り相撲だったと言い換えても良い。

「前に行った染色と組み合わせたり立体でも良いんだけど……。そうだなあ、むしろ使いの方の方を覚えて欲しいかな？」

「いきなり話が飛んだの。お主はいつもそうじゃが……。まあええじゃろう」

万年賢者タイムと言うべきか、タブラという男の興味はそつ気なく時へ四方八方に飛び火した。

その時の興味がなにより優先され、それでいて以前からの思案が根強く残っていたりする。

「私達が装備を作る時の指針なんだけどね。対策アイテムは当然のことながら、その人の個性に合致した専用アイテムが重要なんだ」

「ほう……。個性を伸ばす専用のアイテムか。そいつは盲点じゃったわい」

二人は自然と視線を村一番のリザードマンである、ゼンベル・グラーに合わせた。

「対策アイテムということならば、簡単に言うところ冷気攻撃用の耐性アイテムか。フロストドラゴンの事を考えれば造っておくのも悪くは無いが」

「そう……。悩ましいのは専用アイテムを作る段階で、何が面白いかということなんだ」

単純に強いアイテムを持たせるだけならば、馬鹿にでもできる。

また、効率重視で持たせるのであれば、コスト優先で魔化の方が良いことになってしまう。

ゴンドもタブラに毒されて来ているが、元より研究者肌であり言いたいことは理解できた。

せつかく専用装備を作るのであれば、いつでも使えて、かつゼンベルの特性を生かせる方が良いだろう。

「アイデアが無ければ練習を兼ねて冷氣対策を作り始めるとして……。大斧はつまらないね、炎の斧で対策とか対比にしかない」「それはそれとして万能に見えるから悪くはなさそうじゃが……。いや、待てよ。それなら燃える爪の方がよさそうじゃ」

ゼンベルは厳つい大男で、片方だけ大きな手に大斧を構えて歩きまわっている。

だが彼を深く知る者は、その本質がモンクであることを知っているだろう。普通は格闘用の武具など無いので、剛力を活かせる斧を愛用して居るだけなのだ。

「炎と耐火の力を与えて……。いや、耐性なんて自前で可能なはずじゃ。ならば鋭さを持たせた方が良いか」

「判って来たじゃないか。便利なだけの武具なんて面白みが無いからね。それに……。強者と闘うことを考えればイザと言う時に無茶が効くと思うよ」

耐火アイテムを兼ねて、何時でも使える燃える爪。

そっちの方が普段使い出来ると考えるのが普通だが、二人の思考は明後日の方向に向かう。

より強いアイテムが現れた時にアツサリ乗り換える様な装備ではなく、これがあった方が良いと思えるような癖が強い装備こそが専用武具の真骨頂である。

となれば耐性なんかは他のアイテムや武技に任せて、独特の能力を持たせるべきであろう。

だからこそ普段はそれを使い続け、全く通用しない……。炎の精霊などどの戦いでは持ち還る決断を出来るのだ。

「ふむ。今持っておる斧と同じくらいの爪ができるのが理想じゃの。

二つ目は足を早くするアイテムで、その攻撃力を活かすか……。あるいは反対側の手に籠手でも付けるか」

「形状に関しては私の方で何パターンか知ってるから、後で幻影で見せてあげよう。まあ次のは彼の意見も聞けば良いんじゃない？ どうせ時間も掛るしさ」

ゴンドに渡した指輪は疲れ知らずの指輪／リング・オブ・サステナンスと、気力・体力を回復する活性化の指輪／リング・オブ・バイタリティだ。

残念ながら工作に経験値の指輪や能力値増強の指輪は効かなかったので、ルーンを彫るのに飲食の時間以上に短縮する事が出来ない。仮に冷気耐性の装備も準備するとなれば、次の装備へ手を付けるのは、まだまだ先の事に成るだろう。

……そんな事を思っていたのだが、事態は思わぬ方向に進行する。「何、他の村の勇者にじゃと？」

「ああ、そうだ。こないだの戦いで面白い連中を見掛けてよ。それつらに装備を造ってもらう代わりに、協力と呼びかけた方が良かったかと思っただ」

「仲間は最強の装備と言うからね。しかし……その方が面白そうだ」
ゼンベルに声を掛けると、リザードマン同士の争いが始まったと言うことだ。

二人は指輪の効果で食料が要らない為に気が付かなかったが、周囲では食べる物が不足して居ると言う。

ゆえに大規模な戦いになるのは避けられず、いずれ雌雄を決する戦いがあるのではないかと思われていた。

「仲間こそが最強の装備品か……。しかしゼンベルお主、意外と頭が回ったんじゃない」

「違うよゴンド。この男はね、単に勝負を試してみたいんだろう？ 選ばれし勇者に相応しい、専用のアイテムを持った者同士で」

「かーかっか！ そうだよ！ どうせなら俺は凄げえ戦いがしてみたいんだ」

ゼンベルという男、脳筋かと思えば……実はジャンプ脳であった。

夕日を背中にして心行くまで殴り合い、気がすんだら酒を呑みながら何々大笑。そういう光景が実に似合う。

そんな彼だからこそ、周囲のリザードマンをまとめあげた王国を造り、その全てを投げ捨てるのができたのだろう。

シャースーリユー・シャシャに国王の地位を任せると、ゴンドやタブラにくっついて気ままな修行の旅に出かけたのである。

●ルーンの詩

幾らか寄り道をした後で、世話になったドワーフに挨拶をしたいと言うゼンベルの言葉で国に戻るようになった。

それまで見聞したことや、武技に近いと仮定して考えを修正したゴンドのアイデアを仲間達に報告するのも目的だ。

「こつ、これは!？」

「ワシは今、素晴らしい物を見ておる！ この様なモノが実在しようとは……」

「ゴン坊よ、修行の旅に出たと聞いてはおったが、まさかこの様なモノを見付け出したとは……」

ルーン工匠達は驚いた様子で、預かり物の短斧を眺めて居た。

柄の小さな斧には無数のルーンが刻まれており、中でも幾つかの文字が常に輝いているほどだ。

「預かり物じゃから渡せんが、投げても手元に戻ってくる能力と、クアゴアなど瞬時に炭に還るほどの雷撃を放つこともできる。じゃがその真価は武器などではないとか」

「なんと……。これほどのルーンを刻む事が出来れば、それほどの力を得ることが可能なのか」

「まさしく伝説の武具じゃ。いや、本質は別であると言うがワシらでは片鱗すら凶り知ることもできぬのか」

話を聞くと柄の短いこの斧の真価は、あくまで幸運をもたらすことだという。

農作や工作で質が良い物ができますようにという祈りが主体であり、農業の神や鍛冶の神が使っていたのではないかと議論が飛び交った。

ドワーフの神が居るならば、きっとこの斧の持ち主に違い無いとすら言う者まで現れる始末だ。

「勘違いして欲しくないのじゃが、ワシは似たようなことが出来ると思っておる。もちろん、いつか将来。今では不可能じゃろうが」

「馬鹿な！ ワシらが知る限り五文字。ここに居る者では四文字が限界なのじゃぞ？」

「いや、伝説の時代ならば六文字の物が在ったと言う。ドワーフ工王のハンマーがそれじゃと」

「おお、大地を激震させると言うアレか！ しかし伝説でソレじゃと、二十文字を越えるコレは無理ではないか……」

ゴンドの言葉にルーン工匠たちは懐疑的な声を挙げる。

負けん気の強い彼らであるが、二十の文字に加えて恐るべき力を感ぜさせる秘儀の文字は到底届かぬ高みに見えたのだ。

「考え方を換えるんじゃ。この文字は二つに分かれており、受け入れる為のルーンと、後から追加したルーンに分かれておるとしたらどうじゃ？」

「それならば可能かもしれんが……。それでもせいぜい六文字を彫れるようになるだけではないか？」

「待て。その考えを勧めて、魔化と併用できるルーンを造ってはどうかじゃ？ さすれば文字を彫るのは無理でも、十文字分に匹敵する力を持てるかもしれん」

「その手があったか！ しかしそんな事が可能なのか……」

無理だと言う見解が見解に、そして意見へ、最終的には議論へと発展して行った。

これまで魔化に効率面で敗北して、消え去るだけであったルーン技術。

それを発展させる為ならば、彼らは命を賭して成し遂げるかもしれない。例えどれほどの年月が経とうともだ。

「儂はこのアイデアを『ルーンの詩』と名付けておる。賛同する者で研究を進め、否定する者で別の切り口で研究を進めればいつか可能になると信じておるのじゃ」

「ルーンの詩か。良い名前じゃのう」

「可能だとは思えんが、良い名前じゃ。この会合の名前にしてはどうじゃろう?」

「ガハハ。『ルーンの詩の会』か。良いじゃろう! まずは乾杯じゃ!」

「ルーンの詩の会に乾杯! ルーン工匠の明日に乾杯じゃ!」

議論が煮詰まり、とりあえず諦めずに研究して行こうとだけ結論が決まった。

彼らルーンの詩の会により、研究が進むかもしれないし頓挫するかもしれない。

そこにタブラは何の興味は無く、姿を隠したままドワーフ達の奮起を愉しそうに眺めて居た。

「しかしゴン坊よ。研究を進めるとして、何かアイデアはあるのか?」

「うむ。この斧を貸してくれた人物と共に、かつての王都に向かってみようと思う。そこでみな知識と力を借りたいのじゃ」

「王都か。……あそこにはクアゴアやドラゴンどもが棲んでおるが……」

「いやいや、これほどの武具の持ち主じゃ。もしかしたら倒せる……いや、先人たちの残した秘儀の書をコツソリ持って来るだけなら可能かもしれん」

「と言うことは三つの難関を越える方法を探さねばならんの。誰ぞ隠し道や迷路の構造を知っておる者がおるはずじゃ!」

次なる議論はいかにして難関を踏破するか、その知識を持って来るかが話題になった。

もはやルーン工匠が斜陽などと言う事を気にする者などおらず、クアゴアやフロストドラゴンを出しぬく方法を唾を飛ばして話し合うのだ。

タブラはその様子を眺めながら、迷宮を踏破可能な魔法や、溶岩の中の魔物を倒せることを黙っておくことにする。

そもそも彼ならばクアゴアを殲滅し、フロストドラゴンだけでなく霜の巨人を含めて倒せるのだが……。ドワーフの財宝にもアゼルシ

ア山脈の覇権にもこれっぽちも興味が湧かなかったからだ。

(しかし、仮にルーンが武技に近い構造だとするならば……。これも始原の魔法の一種なのかな？　そういえばマジックキヤスターはオリジナルの魔法を開発できると言っただけ。適当なマジックキヤスターでも捉まえてみるか)

そんな事を考えながら、タブラは次は何処に行こうかと思案し始めて居た……。

人々の成長 新しい着想

●新技術

モモンガ達は名前を上げたこともあって、時間こそ掛ったもの目的であるゴーレム工房の一つに呼び出されていた。

あちこちに並べられたゴーレムやその残骸に目を奪われながら、奥の間に通されて行く。

「今回お願いしたいのはゴーレム実験のサポートと言うことになるでしょうか」

「対戦相手……ではないですよね？」

工房長が頷くとモモンガは安堵を浮かべる。

ゴーレムなど恐ろしくも無いが、だからこそ適正な加減などできないからだ。

「むしろ適度な対戦相手を探していただく方ですね。都合の良い相手など早々見つかる物ではありませんから」

「探知魔法もありますので数を減らす形で良いのでしたら、まあ何とかなると思います」

数体のオーガかトロールか、上位種ならば一体でも良いかもしれない。

そんなニューアンスなのだろう。モモンガが戦力調整をして良いか尋ねると工房長はまたも頷いた。高名な傭兵……それも物判りの良い相手を雇う為か、肯定な反応以外を見たのは次の質問からだ。

「実験と言うと新型ですか？ 遠方から来た我々からすると、汎用以外の魔法を掛けられるゴーレムというだけで十分に凄いですけれど」

「まあそうなりますか……。普段ならば同じクラスのゴーレムを用意するのですけれどね。少し問題がありまして実戦データを急ぐのですよ」

ここに来て工房長は初めて言葉を濁した。

ハツキリと顔色を変えたと言っても良い。マズイことを聞いたとモモンガは察し、自分から言葉を撤回して見せた。

「あー。不都合があるなら構いませんよ。そんなにも付け加えるモノがあるのかと驚いただけですしね」

「いえいえ、あくまでこちらの都合です。……そうですね。どの道、見れば判りますので担当者と一緒に紹介しておきますか」

機嫌を損ねないようにしたのか、工房長は話題を変える様に急いで立ち上がった。

そのことをモモンガが不審に思うよりも早く、行く先が新しいゴーレム達が並ぶエリアということもあって興味が移る。

広さが必要なゴーレム工房の中で、決して外から見ることのできないエリア。

研究塔とでも言うべき場所には残骸などは無く、試作品や完成品ばかりが立ち並んでいる。

「この工房に限らずゴーレム作成魔法の基礎は、始祖であるソロモン・イブン・ガアヴィロール様から伝わった大いなる魔法を改良して居ます。今回の新型はそれには及びませんが、久しぶりの新機軸なのですよ」

「ほう……。まったく新しい概念の導入とは驚きですね」

モモンガはタブラが口にしたことのある、ソロモン・イブン・ガビーロールらしき名前を思い出した。

ゴーレム関連の名前だったっけ？ とか首を傾げならまあいいかと頷いておく。重要なのは名前では無く、新しい能力がどれだけ面白いかである。

「あそこに居る彼女らが作ったのが新型なのですが、違いが判りますか？」

「流石に門外漢なので直ぐには……。って！ これってもしかしてっ！」

モモンガは少しだけ工房長の言葉に妙なトーンを感じた物の、新しいゴーレムが自分から見ても異色であることに心が騒いだ。

この工房を始めとして周辺にあるゴーレムの能力は聞いている。

〈リペア／修復〉とかいう対物魔法以外にも自己修復の魔法や、ゴーレム創造魔法で修理が効く。同じ様に幅の広い強化魔法が、人体であるかの如く効くのだとか。

しかしそれらの魔法も、自分達の使うレベルの上級魔法に及ばない。

あくまでそれらの代用として、下位に複数の魔法を設けたのだと思えば納得が出来た。しかしながら目に移るアレは、ユグドラシル基準でも大きな変更だったのである。

「やつぱりそうだ。下級ゴーレムなのに武装の携帯が可能になってる！ 凄い改良ですね！」

「か……下級……。ははつまあ今から改良しますからね」

モモンガは喜声を上げるが、工房長は何故か苦笑してしまったようだ。

だがそれに気が付くこと無く、矢継ぎ早に言葉を連ねて聞き逃してしまった。

「聞き捨てならないわね」

「かつ、下級!? 最新型の傑作に対してどういう事ですか!」

「これってサーバント系の下級ゴーレムですよ。凄いやスタチュー系ですらない! 中級ゴーレムの中でも上位に位置するやつじゃないと、武装を保持はともかく真価を活かせないのに」

奥に居た研究者肌の魔法使い達が抗議の声を上げるのだが、モモンガは気が付かずにウンウンと頷いている。

怒りの声を上げようとするが、モモンガの勢いと聞き逃せない言葉に声が止まった。

「サーバント系? ……スタチューに中級? 何のことなの?」

「訳のわからない言葉で煙に巻こうと言うだけです! ケチを付ける為に他の工房から送られて来たに違い無い!」

「え? ……ここのってゴーレム造ってる工房ですよ? 分類って知ってます?」

耳聴く言葉に注意する女魔法使いに対し、青年の男性魔法使いは猛然と抗議の言葉を続けた。

モモンガは訳も判らず目を白黒させるばかりだ（目など無いが）。その認識差に対して救い船を出したのは他ならぬシズであった。

「……モモンガ様は嘘を言つて無い。スタチューというのはガーゴイルやミミックの事。それより強力なのが中級」

「それより弱いのが下級と思えば良いってことね？ まあそれなら確かに下級ゴーレムだわ」

「何を言ってるんですか……。この新技術はそんな能力差なんかひっくり返しますよ！」

子供の言う言葉だからか、判り易い目安が添えられた為か強い言葉は続かなかつた。

だが女魔法使いの方はともかく、男性魔法使いの方は収まらないようだ。

「言葉が過ぎました、申し訳ありません。ええと……我々の故郷では素材の使い方まで分類を分けてたんですよ」

「外の方ならば仕方無いですね。それよりも素材の使い方について教えていただけますか？」

ようやく下級と言う言葉に対する抗議だと理解したモモンガは、シズの言葉を参考に判り易い目安を付けた。

謝罪を受け入れたのか、それとも異なる文化に目を付けたのか女魔法使いは軽く頷いている。

「こちらのモモンガさんがサポートについて下さるそうだよ。道中で必要なだけ聞くといい」

「こんな……」

「それは助かりますわ。ゆっくり聞かせてください」

なおも声を上げようとする男を無視して、担当者として女魔法使いは頷いた。

こうなつてしまえば助手のできることなど多くはない。ゴーレム談義を行いながらどんな相手が訓練相手に良いかを話し合うことになったのである。

● 不公平な技術開発

話を聞きながらモモンガは思わず首を傾げた。

今回の様にまったく新しい発見こそ少ないものの、細かい魔法開発が頻繁なことだ。

(どういうことだ？ 凄い魔法は……というかレベルを越える様なのは全く無いのに……)

最初に100%の魔法を掛けたら、どうやっても100%になるのがユグドラシルのゴーレム創造魔法だ。これを25%ずつ地水火風の儀式魔法に分解し、より低いレベルの術者でも可能にしたのがこの周辺で使用されているゴーレム魔法であった。

(妙なマイナーチェンジが山ほどある。やはりこの世界の魔法のあり方とかスキルのあり方ってユグドラシルと根本的に違うのかもしれない。っていうかズルイぞ！)

最初は四つに分解しただけで、火は威力とか反応速度を決める要因らしい。という程度であった。これが時代が下るにつれて、ゆっくりしか動かないが負担の軽い魔法だとか、高速で動けるけど他が弱くないと儀式魔法が成立しないモノなど様々なバリエーションが開発されていた。

その殆どが元のゴーレム創造魔法を越えないレベルなのだが、これだけ新魔法が開発されて居ればモモンガとて羨ましくなる。

何しろユグドラシルでは新しくパッチが当てられるか、謎だったクラスチェンジ条件が判明する時くらいしか増えることは無いのだ。

(でも現地の人がこれだけでできるなら、タブラさんが創造主が居るんじゃないかって疑うのも無理は無いよな。それに組み合わせを見るのは楽しいし)

例えば先ほどの『ゆつくりしか動けないが、負担の軽い魔法』を例に取ろう。

このバリエーションには子供並み、幼児並み、赤ん坊並みの細かい差で開発されている。

(戦闘には役に立たないからユグドラシルじゃあ無意味な魔法だ。でもこれがまさか、馬車型や船型ゴーレムに繋がるなんて！)

一件、赤ん坊並みの反応速度しか出せないゴーレムに意味は無いように見える。

だが船ならばそこまで高速で反応する必要はないし、サイズを決めるらしい地系の魔法に負担容量を避ける方が重要だ。これが馬車ならば中間で、子供並みくらいになる。

これらは戦闘には不向きな性能しか出せないのだが、輸送と言う意味では天と地の差があった。

〈クイックマーチ／早足〉とかいう魔法や、〈ヘイスト／加速〉の様な速度上昇系魔法で強化できるのだから、本当に戦闘に向かない訳でも無い。

色々な魔法とアイテムの組み合わせを考えるのはモモンガも大好きなので、自分も魔法が開発出来たらなあ。と思わざるを得無かったのだ。

「相方の人には悪いですが、こちらの主導でモンスターをおびき出す段取りで良いですか？」

「彼は開発者ではありませんので考慮する必要はありませんわ」

おや？ とモモンガは内心で首を傾げた。

先ほどの男性魔法使いの反応は、到底そうは見えない熱心さが見えたからだ。

「しかし助手とはいえ食って掛る程の熱意です。そうとうにこのゴーレムに関心を持たれている様に見えましたが……」

「このゴーレムは比較的の仲の良かった他工房との共同開発なんです。あの人の後窯に座りたいんでしょうね」

そこまで聞けばモモンガも判って来るものがあった。

魔法の才能は男女関係ないが、工房の外にも幅を利かせている職員は外との折衝もあり男性が多い。共同開発者になれば、実質的なプロジェクトリーダーはあの男のモノになるだろう。

今はその工房とは仲が悪くなつて、共同開発も打ち切られたことで尚更に発奮して居るのだろう。上手くやればこの時代に新型をもたらしたのは、自分の成果だと思えなくもない。

「なるほど。他のゴーレムと比較されるのを嫌うとか、急いで開発する理由はソレですか。しかし、その工房と方向性が違うのではありませんか？ 急ぐ必要なんかなさそうですけれど」

「ごちらのグリージョ・カバリエとあちらのグラオ・リッターの差はありません。装備の方向性の差くらいに見えますから、同じことを研究されたら困ると思ったのでしょう」

地区の差で言語が違う以外は、素体としての性能差はその工房との無いらしい。

この女性魔法使い……ガブリエツラの希望するのは大味な装備で、武器を入れ換える意味を持たせるほどの性能差を求めるゴーレムを目指している。

対して向こうの工房でハンスという共同開発者が考えて居るのは、地味な強化案を積み重ねるモノらしい。先ほどの男性魔法使いも、もしかしたら同じ構想で被っているのかもしれない。

「ともあれ了解しました。周囲を探知魔法で搜索する時に、一応はゴーレムの反応も見ておきましょう。お話を聞くと不要そうですが、先ほどの方たちを考えますとやっておいた方が良いでしょうね」「お手数をおかけしますわ。とはいえテスト相手の戦力を削る際は、程ほどで構いません。多少壊れるくらいの方が性能が見れますから」求められている性能はストーンゴーレムながら、アイアンゴーレムに迫る能力らしい。

装備を使うことで匹敵できるならば、武装を持たせる意味はあるということらしい。ということはオーガ数体を問題居せず、時間さえかければトロールも十分に倒せる程度の能力が必要とのことだ。

「判りました。今回はそちらのゴーレムに前衛を任せられますからね。安心して対処出来ますから、多少の融通くらいは問題ありませんよ」

こうしてモモンガ達は性能試験の為、敵対的な亜人の棲む地域へ足を伸ばす事になった。

霧の中を進む未来

●五十歩百歩の新技術

街道を外れて荒野に進むと途端に人外魔境が訪れる。

道は繰り返し踏みしめることで通り易くなり、同時に獣やモンスターも警戒するからだ。

そこから離れるということは危険を承知で進むということである。

「順調なことは順調なんだが……」

起伏で視覚が寸断され風は臭いを吹き消して行く。

モモンガは何も無い荒野を実験場を選び、巣穴からノコノコ出てきた妖魔どもを標的に選んだ。

「もうちよつとやれると思うんだけどなあ」

テスト中のストーンゴーレムは順調で、大剣を振るってゴブリンを蹴散らしオーガと正面から打ち合う。

雑魚にも囲まれて居る為に最初こそ苦戦するもの、お互いの累積ダメージが増えて行くにつれ優勢になって行った。痛みで能力が下がりず恐れを知らぬ、魔法生物の利点が如実に表れて行った結果だろう。

クリエイト・サーバントで素材を石に選ぶと、そこそこの性能を持ったストーンゴーレムになる。このゴーレムはオーガとほぼ同じ性能であり、改良型だというならばもっと強くても良いと思うのだが……。

『シズ。一体目を通すが、周辺の雑魚を片付けろ。一対一だった場合を見て見たい』

最初のオーガを片付けたところでモモンガは「ヘメツセージ／伝言」を飛ばし、後方のシズに指令を与えた。先ほどはゴブリンに囲まれながらオーガと戦っていたが、同等の条件ならばどこまで戦えるかを知りたかったからだ。

「お前だけ通っていいぞ……という訳にはいかないよな。シズに言っ
といて良かった」

モモンガはマジックキャスターにも使える小剣を操りながら、オー

ガだけを後方に通そうとして失敗した。

威圧したり遮って居た集団が残らず移動してしまい、シズがクロスボウで始末して行くのを横目で見守ることになる。最初の様に範囲魔法で薙ぎ払えば残りも含めて一瞬なのだが、それでは怯えて逃げ出してしまふのが問題だからだ。

「おつ。武器が大きいからダイナミックなスイングが当たるとデカイな。……うんうん、こうなると独壇場だなあ」

性能が発揮し始めると、ジツクリと見たくなるのが偶に傷。

本職の戦士ではないのでゴブリンに刺されることもあるが、60レベルのゴブリンなんか居ないので気にする事も無い。どちらかといえば見られて居たら怪我を心配される方が面倒なくらいだ。

「魔法の武器じゃないし武装の差はリーチくらい？　もうちよつと重い武器だどうなんだろう」

そんな事を言っている間に二体目のオーガを倒してしまったので、残りの雑魚を殲滅する速度を見ることにした。〈フライ／飛行〉を唱えて敵の集団を抑えるのを止めて、ゴーレムが後方の指示通りに戦うのを眺める。

三体目・四体目のオーガも居るのだが、ぶつかりあったところでゴブリンの残りを叩き潰すと群の大半が倒されたことになる。

黙々と剣を振るうゴーレムは疲れた様子も無く、流石に不利だと気が付いたオーガが逃げ出し始めた。これに追いついて三体目を簡単に倒すのだが、効率の良い移動をして居なかつたので四体目には逃げられてしまった。

「今日の戦いを総括しますと、良くも悪くも魔法生物の特徴が出たと言えるでしょう。言いたくは無いのですが……」

「このゴーレムで無くても良いということね？」

後方で戦闘を見て居たこともあり、研究者でもある女魔法使いのガブリエツラはモモンガの言葉を素直に受け入れた。

「大剣の威力が活かされれば強力な一撃になりましたが、正直なところ、クリエイト・サーバントで作った普通のストーンゴーレムもあのくらいの威力を出せます」

「自分で作ったんだもの、そのことは知って居るわ」

もつとハツキリ言えば、クリエイト・サーバントは材料さえあれば普通に発動する魔法なので凄く弱体化して居る。

儀式魔法化したことで使用するMPも掛る時間も桁違いだ。利点は低レベルでも作成できるとか、その影響もあつて複数の系統のマジックキヤスターでも可能というくらいしかない(工房以外では教える筈も無いが)。

正直なところ、何故造つて居るのか判らないレベルであった。

低レベルでも作れるが公開しないのでは量産できないし、レベルを上げようと頑張る者が居なくなるという意味では良くないのではないのだろうか？

「しかしこれだけの損傷でも直せるのは魅力的ですね」

「普通はここまで壊れたら捨てる。驚嘆」

一方で目線を変えると別のモノが見えて来る。勝利こそ納めたもののストーンゴーレムはボロボロになつていたが……。

〈リペア／修復〉の魔法を複数回掛ければ直せるし、大本の儀式魔法を使えば完全に直ると言う。ゲームだったところにナザリックの維持費を稼いでいたモモンガとしては、実に興味あるところであった。

「褒めてくれるのはありがたいけれど、それは始祖の手柄よ」

話は戻るが今回の実験そのものはよろしくはない。

モモンガ達が関心を持つて居るのは、始祖……タブラが既に導いていた部分であるからだ。

「土木作業をするのでなければ、武装を変えてみるしかないですね。もう片方の工房ではどんな装備なんです？」

「あつちは最初に決めた武装から変更しないから、グラオ・リッターは斧と盾装備のはずよ。人型ゴーレムを専門に使う『人形遣い』に任せ意見を聞くのが定例かしら」

幸いにも他所の工房にライバル意識を持つて居ない様なので、比較例について尋ねて見た。

色んな情報が聞ける方がモモンガとしても楽しいし、研究を続けるならば有益であろう。

「あー。拳で戦う延長線ですか。悪くはないですね」

「逆に言えば改良しても代わり映えしないって話だけどね」

重量のある斧で戦うのはゴーレムの剛力を活かすなら良い選択肢だと言えた。

それほど大きくはないが素手よりは長いし威力も大きくなる。盾を持っては防御力もあがり総合的な耐久力も向上するだろう。

二つの工房を比べると、研究者としての視点が見えて来るから面白い。

あちらの工房は戦力としての商品化を図っており、こちらはあくまで研究用に差別化を図って居るのだ。どちらが良いとは言えないが、完成度から言えばあちらの方が一歩先に行っているだろうか。

「参考までにウッドゴーレムはどうなんですか？」

「うちは完全な作業用にして居るから元の『櫛オウの木の従僕ク』と呼んでるけど、あつちはバイゲ・リッターと呼んでカタパルトやバリスタを運ばせてる筈よ」

「輸送用？ 確かにその方がいいかも」

クリエイト・サーバントで使用する素材は木からなので、ウッドゴーレムを造ることもできる。

だが下級ゴーレムは素材が持つ魔力で性能が決まってしまう為、造つても単純な作業用にしかならない。材料が櫛オウの木であるため櫛オウの木の従僕クと呼ぶのは何処も変わらないのだろう。

「だから斧か槌が妥当なのは判ってるのよ。オーガより強ければ警備や街道整備も楽になるしね。だけどそれじゃあ何のために手で持てるのか判らない……」

「なるほど……変更する意味ですか」

アックス類やメイス類をシールドと共に持てば普通に強くなる。

だが極論を言えばゴーレムの手に棒を括りつけ、鉄板とは言われないが銅板でも張りつけければ十分なのだ。それでは研究する意味が無いし、次の作品に掛ける情熱も失われよう。

モモンガはユグドラシルを思い出し、色んな魔法での戦術を苦心して居た頃を懐かしく思う。

初心者のころは苦勞したが、たち・みー達と出逢ってから仲間が居ることにより方向性は絞られたが、パーティ戦闘の為に様々なバリエーションが生まれた。環境が戦術を選んだとも言えるが、マジックキャスターで行くという最初の頃の構想は変わることは無かったと言えるだろう。

「仲間……を前提に考えて見るのはどうです？ 前衛を任されるのは当然にしても、単体で全てを蹴散らせて命令は無いですよ」

「幾らなんでもそれはないけど……そうねえ。あつちのバイゲ・リッターなんか仲間前提だし……アリといえばアリかしら」

大型武装であるカタパルトやバリスタを運び、人間では時間が掛る巻き上げを瞬時に行う。

手のあるウツドゴレムの使い道としては悪くない選択肢だろう。同じ様に何かしら相性の良い武装があれば、ソレをベースに色んな装備を使い回すという選択肢が生まれるかもしれない。

「仲間を守ると言う意味では盾？ 斧や槌じゃないとしたら剣くらいかしらねえ」

「固定しちゃうと偏りますし、副装備は盾と何かを推奨するってことでいいんじゃないですか？」

先ほどはモモンガが数を堰き止めて居たが、普通の戦いではそれこそゴレムの役目だろう。

だが現状では止めるのが精一杯で、戦果を期待する前に仲間がピンチになる可能性の方が高い。

必要なのはむしろ長さで、出逢い頭にオーガを狙って確実に倒せることだ。

雑魚に囲まれても二体目・三体目とオーガを倒せるならば戦況が逆転する事もあるだろう。

「その意味では大剣のリーチも効果あった気がしますね。もうちよつと有利に戦えれば理想的なんです」

先ほどの戦いを思い出すが、序盤はともかく二戦目は圧倒して居た。

周囲に雑魚が群がって居なかったという前提に立つものの、振り回

す事でリーチと威力を十全に発揮して居たと言えるだろう。

「長物ということかしら？ 私は武器にあまり詳しくは無いんだけど……」

「大丈夫。ちよー得意っ」

珍しいことにシズが自己主張を始めたので、モモンガさんは暖かく見守ることにした。

解説を聞きながら自分の過去を思い出し、ちよつとしたアドバイスをしてあげる。

「シズ。せっかくだから絵でも描いてあげなさい……あー。一般的な武装のレベルでな」

「大丈夫。ちよー得意っ」

もしかしたらシズにとつて、ゴーレムは弟分や妹分で研究する人はその母親くらいの印象なのかもしれない。

そんなことを想いながらモモンガは、シズの描く可愛らしいMADウエポンを楽しく見守るのであった。

●支えの無い天秤

よくよく考えればサポートのモモンガが研究に口を出す必要は無いのだが、つい夢中になった。

気が付けば夜が更けるまで相談に乗って居たのだが、他人のビルドで飯が美味しいとも責任の無い討論は最高だとも言う。

「……余計な事を言う様なのですが、腕回りはもうちよつとシンプルで良いと思います。その分パワーを上げた魔法を開発できないのですか？」

ここに来てモモンガはようやく本題を切り出す事にした。

先ほどまでの討論は仲良くなる為の方便であり、ただの趣味である。本命はこの、『狙った魔法を開発できるのか』という質問をぶつける為に不自然で無い様にする為の前フリに過ぎない。

「言いたいことは判るけれど難しいわね。うちの工房は研究の意味や重さを追求しているの。そういう細かい調整はあっちの方が得意な筈よ」

「なるほど。どうしても研究分野で差が出ますよね」

どんな制限があるのか、得意不得意による開発能力の差などが知れたかった。

もちろん始祖が本当にタブラであるのなら、そんなことはとつくに知って居るだろう。だが彼が研究したことを追っていく上で、無条件にデータだけを聞くのと、自分なりに把握しておくのは意味が異なる。

そしてタブラが研究に詰まった時に協力し、あるいは独自の動きを模索する為に重要な事だ。

せつかく新しい世界に来たのだし、自分なりの目的を探すのも良いかもしれない。それが友人であるタブラの役に立つことならば理想的だろう。もしタブラが推測した様に、ナザリックもやってくることを考えれば打てる手はできるだけ多いにこしたことはないのだ。

(タブラさんがこの辺りでやろうとしたのはホムンクルス・ゴレム・ビースト、そしてその使い手たち。てっとり速い戦力UPと……)

モモンガはタブラの影を追っていく中で、それなりに彼の方針というものを掴んで居た。

創造主とやらが居た場合に備えて戦力を拡充する為、様々なクリーチャーの創造に励んで居る。

(あとは並行して魔法の開発を確認つてとこか。……今のところ自分が強く望むことしか対象にできないみたいだな)

ガブリエツラが所属する工房では形状を弄ることに終始しているそうだ。

彼女が成功させた武装を所持できるモデルの他、下半身が四足の研究があるらしい。しかしながらその個体も八脚や蛇型を造るバリエーションはできたが、性能差を出す様な微調整は難しかったそうだ。どの個体もストーンゴレムの性能を越えはしないとか。

「いずれ四本腕で大型武器と盾というのを試してもらおうとして、ひとまずは斧槍か槌槍でも持たせましょうか」

「そうね。そのくらいならあり合わせの材料で製造できそうだし良いんじゃないかしら?」

「四本腕……つよそう」

残念なことに武器の形状をしたゴーレムは既に失敗したことがあるそうなので、四本腕を提案してみた。これで簡単に完成する様ならば、自分が興味があれば成功し易いことになる。交流があった工房の情報仕入れることが出来るならば、微調整のバリエーションと得意な者の性格を知れば、参考資料としての比較が進むだろう。

（重要なのは目的か……。俺も覚えることができなにか試すのに、何か目的でも探した方が良いのかな）

現時点では魔法の開発をタブラがしたのか、洗脳したマジックキヤスターにやらせたのかは判らない。

仮にタブラが不可能であった場合でも、モモンガならば可能かもしれないし試してみる価値はあるだろう。それに何より、目的が無いよりは有った方が面白いのは確かだ。

（んじゃ暫くゴーレムの依頼に付き合いながら、何をしたいかを考えて見るか）

付け焼き刃の剣技よりは魔法かなーとか思いながら、何を覚えるのが良いかとモモンガは皮算用。それが可能なのかは別として、久しぶりに良い夜を過ごすのであった。

ジャガーノート

● sideeー？

ゴーレム工房でガブリエツラ女史の助手である、イシドロという研究者は優秀な男だった。

作成用の儀式魔法のみならず第四位階にまで足を掛け、更に膨大な資料から何が必要かを割り出せる頭脳がある。加えて名家の出身だと言ふことから来る、高い交渉能力まで備えているのだから周囲が期待するのも本人が増長するのも無理は無い。

「そのまま叩き潰してくださいー！」

「自力だけで行けとき、魔法の援護は要らん」

ストーンゴーレムはオーガと同レベルだが、その戦いは圧倒的であつた。

剣が相手の肩口を切り裂き、相手の剣はゴーレムに追加した木製鎧を叩き割る。だが追加装甲が全損するまでに、余裕で二体以上のオーガを葬れるだろう。しかも壊れても取り替えが効く装備である、ダメージレースは比較にもならない。

「しかし新しいやつをもらっちゃまって悪いな」

「貴方に来てもらうなら安い物ですよ」

名うてのゴーレム使い、それも人形使いと称される傭兵の一人をイシドロは雇うことにした。

希少な人員を呼び込む材料であり、同時にテストを行えるのだからお互い様と言える。ここまでの交渉をアツサリと決める手腕を見れば、工房長が駄目出しをする訳が無い。

「まあそれでも新しいのがあれば、古いやつを弟子に譲れるからな。感謝はして居る」

「そう言っていただけなら、このまま早速テストを続けましょう。キャンプ地に戻るまでもう少し勝ち星が欲しいですね」

とある目的の為、イシドロのみならず工房の皆は実績を欲して居た。

責任者に黙って二騎目のゴーレムを動かすなんて、そんな暴挙が許

されたのも周囲が焦って居たからだろう。

「何を倒せば良いんだ？」

「そろそろトロールに行ってみましょう。確かジェリコさんは炎撃を付与できましたよね？」

イシドロは自信家なところはあるが決して愚かでは無い。

前もってトロールの特性も調べており、人形遣いを呼ぶ際に炎のダメージを付与できる相手を選んでいたので。もちろん他の魔法も低位であれば使える為、オーガレベルには負けるなど最初からあり得なかった。

確かにイシドロは優秀な男だったのだろう。

天才でこそないが二物も三物も才能を備え、予習を忘れず傾向と対策まで練っている。

だがモモンガと違って致命的な欠点を持って居た。予想外の事が起きる可能性は常にあると考慮し、万が一にそうなってしまったら何を優先するかどうかの判断。その資質において欠けていた。

「ジェリコ親方！ 神殿から何かやって来ます！」

「なんだと!? ラザロ、マツチモ、トライ・デ・トライアルを仕掛けるぞ！」

「へい！」

トロールを探して移動していた最中、見張りを任せている弟子の一人が予定外の声を上げた。

ジェリコと呼ばれた人形遣いは即座に迎撃戦を選択。今まで使っていたストーンゴーレムだけでなく、木製アーマーを製作する為に借りているウッドゴーレムまで動員することにした。

「なんで新型の性能を試さないんですか!？」

「素人は黙ってる！ まずは能力を見てからだ！」

〈リーンフォースアーマー／鎧化〉を始めとして低位にある強化魔法が、それぞれが操るゴーレムに付与されて行く。

これが周囲の国に脅威を抱かせる、この国のゴーレムと人形遣いの戦闘能力だ。そして馬鹿正直にぶつかる様な奴はこの場には居ない。

神殿からナニカが迫って来る。見た目は髭面、股間には叉袋を持つ

奇怪な姿。

それに対して二騎が盾と防御魔法を使って足止めし、親方であるジェリコが満を持して突進を掛ける必殺のフォーメーションを組んだのだ。

「親方、こいつゴーレムだ！ 速つ……」

「ちくしょう、俺のゴーレムまで抜けられちまった!？」

「又袋は飛ぶ為の仕掛けだど!？」

正確には大きな袋を馬の代わりにして、上にゴーレムが乗って居たと言うべきだろう。

そいつは高速移動で二騎のゴーレムの脇をすり抜けて、ジェリコの新型に迫ったのだ。いや、正確には……。

「いかん！ あいつは俺たちを狙ってるぞ！ ラザロ、てめえは依頼人を逃がせ!？」

「親方!？」

敵のゴーレムは指揮官潰しを命令されているのか、それとも神殿に指揮官でも居たのか。真つ直ぐこちらの本陣を目指して来る。

幸いにもチャージを掛けるつもりでヘクイツクマーチ／早足を掛けていた為、ジェリコのゴーレムが横入りする事が出来た。

壁役以外で戦闘の役には立たないウッドゴーレムをイシドロの護衛に付けて、ジェリコ達はゴーレムの後ろに回り込みながら必死で戦闘を続ける。

だが元より襲撃者は格上のゴーレムであったのだろう、全滅するまでそう長くはかからなかった。

●黒の叡智

時間は掛ったものの、ゴーレム工房から一件の事がモモンガ達にも伝えられた。

自分達が実験して居るゴーレムと同等の相手が、帰らぬ運命となったのだ。これに興味を覚えると言う方が嘘だろう。

「ひとまず自分が先行します。ガブリエツラさんはシズと一緒にゆっくり来てください」

「モモンガさん一人で大丈夫ですか？」

報告を聞いた一同は、イシドロ達が実験に向かった場所へ行くことに成った。

とはいえそのまま向かったのでは彼らの二の枚だ、十分な距離を離して調査を行うという方針を決める。

「私一人なら飛行することも、遠距離から視覚を飛ばす事もできますからね。安全が確認できたらシズにメッセージを送りますので」「それならば仕方ありませんね」

追加報酬など、この際どうでも良かった。

モモンガには単独で先行する必要があったのだ。千載一遇のチャンスが目の前に在ったからである。そしてシズを置いて行くのも、監視の眼を留めておきたいというのが理由だ。

（今なら人形遣いとか言う傭兵たちの死体が手に入るかもしれない。……『黒の叡智』を試すには良い機会だ）

黒の叡智はモモンガが所有するスキルの中でも独特な物だ。

生贄を捧げて習得魔法を増やす物で、幾つかの条件があり面倒さもだが実現性に問題があった。

（効果を発揮しても俺の知らない魔法じゃないと意味が無いんだよな。オマケに入手易くするイベント起こしても必ず可能とは限らないし、死体の数は有った方が良いしな）

まず入手できる魔法はランダムで、意味があるのは知らない魔法のみ。

つまり多くの魔法を覚えているモモンガには既に意味が無いことの方が多くのだが、＜クイックマーチ／早足＞などユグドラシルにはない魔法や、人形遣い専用の付与魔法は魅力的だった。

このスキルがちゃんと機能するのかを確認し、かつ新しく造られた本当に魔法なのか良く似た別のナニカであるのか。それらを調べるには、今回の様に現地魔法を沢山覚えている居る死体は有益だと言えた。

「できればゴーレムに守られて生きていてくれると助かるのですが……」

「生きて居れば相手の能力を聞けますしね。ただ、ゴーレムだけが生

き残って居る場合、このエンブレムを見せてください」

死体を生贄にするよりも、生きている人間を生贄にした方が魔法を覚えられる可能性が高い。

その意味を隠して希望論を述べたモモンガに対し、ガブリエツラは勘違いをしたのかドン引きしそうになるほど冷徹な答えを返してきた。

「シズ、ガブリエツラさんをちゃんと守るんだぞ」

「ん。任せる、大丈夫」

この女研究者はマッドな素質があり、そんなところに生みの親の性質でも見たのだろうか？

シズは意外なほどガブリエツラに親切にしており、言葉少ないタイプではあるがゴーレム関連の疑問にやっていた。ガブエツラの知らない知識もあり、この組み合わせならばシズを置いてまで着いてこようとはすまい。

そしてモモンガはくフライ／飛行の魔法で一直線に指定された地域へ移動。

目的のモノを無事に見付けだす事が出来た。

「しめしめ。ウッドゴーレムが獣から守ってくれたのか。偉いぞ」

そこではこの間の助手と見知らぬ傭兵の死体、そして何人かの職人たちの死体があった。

これらをまだ動くウッドゴーレムが守っており、最後まで抵抗をしていたようだ。本来であればウッドゴーレムを排除せずに二人を殺せる筈が無い。それが可能と言うだけで多くの情報をモモンガに与えてくれたのだ。

「ゴーレムが無事ということとは相当な防御力が素早さを持っている。加えて相当な知能……もしくは的確な指示を与える奴が居たのかな？」

襲った相手と戦っている筈なのに、ここには敵の血飛沫も鎧の残骸も無い。

つまりウッドゴーレム程度では傷も付けられない相手であったの

は間違いが無く、かつ無視して行けるだけの余裕があったということだ。

もちろん目撃されるのを嫌がっただけだとか、ウッドゴーレムの体に残った傷から武器の情報を知られたくなかっただけかもしれない。それでも圧倒的な戦闘力があるならば、叩き潰してから二人を始末した方が遥かに楽なのだ。

(地下墓所^{カタコンベ}に居たホムンクルスくらいの実力があれば可能かな？ だとしたら面白いんだけど)

そう言いながら儀式を行う場所を地下墓所^{カタコンベ}の最奥にあつたタブラの実験室に定めておく。

あそこならば邪魔者は入らないし、情報系の魔法で調べられない様な工夫がしてあるからだ。

(思いこみは禁物だけど、もしタブラさんの作ったナニカがやったのだとしたら、そこにも行って見ないと)

そうであるならば彼の残した情報を手に入れることが出来るかもしれない。

自分が実験するのにも地下墓所^{カタコンベ}が都合良い様に、その場所にも何かがある可能性もある。もちろん何も無い可能性もあるし、敵対する存在が居る可能性だってあるから油断はできないのだが。

「お、居た居た。こっちは片方倒されてるな」

暫く周囲を搜索して、馬車の周辺に死体を二つ。それらを守る様にストーンゴーレムを発見した。

もう一体ほど……モモンガ達が実験して居るのと同じタイプのゴーレムが有ったが、それは破壊されている。

「このゴーレムは木製のアーマー付けてんのか。ところどころにあるスパイクはソードストッパーかな？ ちゃんと考えてるんだなあ……」

流石にストーンゴーレムの重量ならば、大きな足跡が付いている。スキルの無いモモンガでも区別出来る程度に戦場痕が残されていた。

その足跡は一体がUターン、そしてもう一体がその場で激しく動い

ていたのだろう……というくらいは判別が付く。

あまり詳しく調べようとすると、イライラして踏み潰したくなるので後でシズを連れて来るまでは放置しておいた方が良さだろう。転移の目標先として記録しながら本命の思案を進めておくことにした。(さて、ゴーレムのお陰で全員分の死体が手に入ったな。人形遣いは全部もらうとして……こいつどうするかなあ)

判断を難しくしているのはイシドロの死体だった。

欲を言えば全員分の死体は欲しい。ただでさえ入手確率は低いのだ。死体では成功度が落ちるので尚更だった。

(しかしなあ。まったく死体を確保できませんでしたというのもおかしいし……連れて帰れば感謝してもらえるだろうしなあ)

他は獣に喰われてましたとか、アンデッド化を避ける為に焼いてしまったで済む。

だが責任者であるイシドロの死体まで処分したら疑われる可能性が高い。加えて蘇生してもらえない身分なのだから、工房としても有能な研究者を蘇らせるつもりだろう。

(まあ必要な魔法を入手できる可能性も低いしな。生き返った後で今回の情報でも手に入れるか)

結局、判断を分けたのは成功率×入手率の問題だった。

前提条件としてマジックキャスターをある程度積んで居るとして、レベルUP×3の魔法を覚えている。本命はそこからクラスチェンジしてから覚えた魔法なのだ。既に覚えている魔法がヒットして、無意味に成る可能性の方が高かったのである。

だが結果としてモモンガの判断は失敗だったと言える。

なぜならばイシドロの蘇生が失敗してしまい、逆に人形遣い達から異常なほどの確率で現地魔法を入手できたからであった。

●意外な結果と、その意味

一度街に戻り、黒の叡智を試していたモモンガに意外な情報が入った。

イシドロの蘇生が失敗し、灰となってしまうたという残念な事実だった。

「あいつ二十レベルくらいはあつたら。普通、蘇生に失敗しないはずなんだけどなあ」

「お金けちった？ かも」

それは無いだろうとモモンガは思う。

連れて帰った時に感謝されたのだが、インドロの実家は名家で金持だった。蘇生の為に必要な触媒や、金貨の類が支払えないとも思えない。

「蘇生の魔法がオレが思ってるのじゃなくて、現地で作られた成功度の低いのだった？ それとも他に理由があるのか……」

「そこまでは聞いて無いです」

実験は延期されており、儀式のこともあつてモモンガはシズに連絡役を任せていた。

あくまで世間話で目的を持って聞き込みをさせておらず、今の段階で集められる情報には限りがある。

「詳しく調べる？」

「いや、構わない。……しかし惜しい事をしたな。こんなことなら、あいつも儀式に使って魔法を増やしておくんだった」

確率が低いからとモモンガは死体の確保を諦めた。

それなのに後悔して居るのは、人形遣い達の死体から二つの魔法を得られたからである。

「うーん。成功する筈の蘇生が失敗して、ありえないレベルで儀式が成功した……。どういうことなんだ？」

儀式の成功度は他人が作った死体では確率が低くなる。

仮に犯人がタブラの手の者で、他人扱いではなくギルメンが手を貸したレイド扱いなら……。まあ成功度そのものは判らなくは無い。

しかし問題なのは、低レベルながら魔法を入手できてしまったことだ。

普通ならば数十分の一〜二を引き当てるなど有りない。だからこそ高レベルになるにつれ、儀式を行わなくなっていくのだ。

「クラス専用魔法なら確かに覚えて無いけど……。奪えない筈なんだけどなあ……。こつちに来て儀式が強化されたのか、それとも他に原因

があるのか」

黒の叡智が文字通り全ての魔法、クラス専用魔法でも奪う儀式に成ったのであれば問題は無いどころか、喜ぶべき事態だ。

あるいは覚えていない魔法を選んで奪えるならば、次々に儀式を行えば多くの魔法を覚えられるだろう。やはり喜ぶべき以外の道は無い。

「やっぱり可能性としては、人形遣いたちが現地で作られた魔法を選んで覚えていく可能性だよな。……でもそんなに都合良く覚えられるものなのか？」

最も可能性が高いのは、現地魔法を中心に覚えていたということだろう。

ユグドラシル由来の魔法をあまり覚えて無かったのであれば、ヒツトする可能性が高くなるのは当然だ。イシドロが三十分の五くらいであっても、人形遣いたちが六分の四くらいで覚えていたならそうもなろう。

「それに、そこまで都合良く覚えられるほど凄い能力が現地民にあるなら、なんでイシドロは蘇生に失敗したんだ？」

現地民だけが持つ生まれ持った才能と、武技や魔法を作り覚える力。

それらを駆使して才能を伸ばして居るならば、確かにポンポンと都合良く覚えられる理由も判る。だがその場合でも、蘇生に力は使えないのだろうか？

「……消費系？ 凄い弾、作るの材料いっぱいいる」

「あー。その可能性もあるか。力にはリスクがある……？ クソ運営だったらそのくらいの隠し条件は付けるよな……」

レベルUPと同時に何らかのリソースを得て、リソースを消費して居るのだとしたらどうだろう？

生命力の消費……あるいは始原魔法における魂の消費。現地でそう呼ばれている事実をモモンガはまだ知らないで居た。

コンペディウム

●背景にあるもの

依頼の継続はともかく、その理由は予想しない物であった。他の工房のゴーレムも襲われた為に、調査に向かわなくては『ならない』というからだ。

「今のところあそこへ行つて無事だったのは私一人。邪魔者を排除したのだろうと疑われていました」

「だからこそ調査が必要だというのは判りますが、そんなに開発抗争が激しいんですか？」

ただ一人無事な研究者を疑う。

疑うには順当ではあるが、理由がなければそこまでされることはない。運が良かったで済まされる筈だ。

「疑問に疑問で返す様ですが、モモンガさんならばうちのゴーレムを欲しいですか？」

「うっ……」

ナイワー。

それが正直な感想だ。開発の護衛をして居るのは依頼だからで、意見を出して居るのは興味があるからだ。

だがストーンゴーレムは所詮オーガ級の戦力にしか過ぎない。

盾役として前衛に置くにしてもくりペア／修復の魔法を奪え無かったので、壊れるに任せるか魔法が封入されたワンドを購入しないといけない。

戦闘面で非効率、経済的にはもつと非効率だ。

「その沈黙が全ての答えです。少なくとももう一ランク。せめてトロールを余裕で倒せるくらいでなければ所持する意味も無いでしょう」

「……今更になってくりペア／修復を覚えるのも難儀ですしね」

この地域は妖魔が多いので基本単位はオーガである。

雑兵のゴブリンは気にしないにしても、上のランクであるトロールを『余裕で』倒せなければ意味が無い。そこまで行けば時々くりペア

／修復＞のワンドを使えば済むだろう。

「現在のストーンゴーレムはあくまでテストケースです。最も優秀な工房へ都市からアイアンゴーレムの発注が、そしてシルバーゴーレム研究用の資金が降りて来ます」

「あー。コンペなんですね。そういうことならば納得できます」

今やって居るのはあくまでテストケースで、せいぜい裕福な名家や傭兵相手の商売に過ぎない。

だが都市そのものからの発注であれば、一ランク上の発注が見込めるだろう。別にアイアンゴーレムが二倍強いと言うことは無いが、トロールくらいは余裕である。

ちなみに共同研究して居る工房は前回のコンペで選ばれているので、無条件で審査の対象外らしい。

続けて天才が出る可能性があるのも微妙なルールだが、続けて出ない可能性の方が普通だから妥当とも言える。

(そこまで判れば色々見えて来るな)

死んだイシドロという研究者や、他の工房は名誉と富を求めて開発に躍起になっている。

それに対してガブリエツラは先に武装可能になった技術を、確実な物としておきたいのだ。むしろ無数の作例を造ることで、後の研究に活かしたいというところだろう。無理してアイアンゴーレムで無くとも良いのだ。

「背景は了解しました。とはいえ例の遺跡には何も居ませんでしたし、隠れているとしたら出現条件があるのでしょうか思えません」

もつとも推測はできている。

モモンガはゴーレムを連れて居なかったし、危険な場所へ護衛対象であるガブリエツラを連れておらずゴーレムも持ちこんでは居ない。

「少数でゴーレムと共に移動する事ではないのですか？」

「それならばイシドロさんの死体を回収した時に狙われている筈です。もう一つ二つ、付随する条件があるでしょう」

それはあくまで前提条件だ。

モモンガがアンデッドであったとか、後から加わったら駄目だとか

考えられるが……。他にも隠された理由があると予想され、ソレをクリアしないことには駄目だろう。

「一番良いのは襲撃を横から眺める事ですが、他の者が動かない以上は無理でしょう。旧型で構いませんのでお借りしてから、私が何度か試しますよ」

「そうですね。それが良いでしょうか。……では適当なモノをお貸しします」

そんなことを相談しながら工房の一角に移動する。

工房にあるゴーレムで出荷待ちや製品サンプルは無理なので、研究中のゴーレムの中から持ち出しても問題無い失敗作を借りることに成った。

「これは……なんとも独創的です」

「……移動するバルコニー」

「騎乗型ゴーレムを造ろうとした時代の名残だそうです」

案内されたのはゴーレムの頭の代わりに荷台が取り付けられた存在だった。

バーはあるがレバーではなく、あくまで掴まる為の支持にしか過ぎない。もちろん上から指示しても機動性が上がるなんてことも無かった。

近くから魔法を付与できるというのも、むしろ危険性を誘発する物でしか無い。

荷台が肩を圧迫するので腕回りの動きは保障されておらず、戦闘力は低い。一台くらいならば演説用に使えるかもしれないが、それならば馬車で十分だ。要するに完全なる失敗作がそこに在った。

「もう一回り大きくして、中に籠れるように出来なかつたんですか？」
「申し訳ありませんがソレは貸し出す事ができません。資料的にも物理的にも」

あ、あるのね。

言われて視線を追い掛けて見ると、腹の辺りで真つ二つに折れたゴーレムがある。どうやら耐久面で失敗した様であった。

「とりあえず了解しました。できればクリペア／修復のワンドもお

借りできれば助かるのですが」

「では前金の代わりに差し上げましょう。ゴーレムもですが無事に戻ってくれば、報酬の一部として買い戻す事も可能です」

要するにゴーレムは壊して構わない、ワンドは必要経費としてくれるということだ。

黒の叡智によってゴーレム強化用の魔法を奪っていたので、どんな能力になるのか試せるのはありがたかった。もしかしたらそんな風に話を誘導できるかもしれないとは思っていたが、上手く行って満足したモモンガである。

● 走れ、シズバンテス！

モモンガ達は森に向かっていったが、人目が無くなった辺りで探知魔法を掛けた。

話の経緯からするとスパイが追い掛けている可能性もあつたからだ。

「シズ。当面の目的は『黒の叡智』の詳細を確認する事、その為に今回は研究者や人形遣いたちの死体を確保する事だ。犯人の探索に関しては下見程度だな」

「はい」

依頼をけつして蔑にするというわけでもないが、モモンガは未知に對して無警戒で当たろうとは思わない。

問題の最終解決に達する糸口を掴む気はあるが、あくまで今回の主目的は死体の確保程度に留めている。

「これより前回の成果、奪取した魔法を試す。効果が大きければ死体を確保する意味は強まるし、そうでなければあくまで布石の一つだ」
「はい」

要するに『黒の叡智』が変わったのかを時間を掛けて試すことで、この僅かにでも世界の事を知る。

そして効果がありそうならば、戦力強化という意味でも、知らない魔法をドンドン増やしておきたいという事だ。

(理想的なのは知らない魔法を確実に奪えるように成ってるって事なんだけどなー。せめて発動だけは確実にする……に成って居て欲し

いもんだ)

ユグドラシルでの黒の叡智における『生贄』は、フレーバーテキストではなく縛りが非常に強かった。

死体を捧げるだけでは済まないし、補正を得ようと思っただらレイド戦闘も必要だったくらいだ……。と何度目に成るか判らない思い出話の途中で奇妙な姿を確認した。

「なあシズ、なんで乗ってるんだ？」

「このゴーレムは騎乗用」

だから乗ったとシズは主張して居る。

頭の代わりに荷台を着けたゴーレムの上で、支持棒を掴んで待機。決して降りないぞと強調して居た。

「ははははっ。そうだな、そうだな。実験してみないと駄目かどうか判らないよな。危なかつたら無理せず降りるんだぞ」

「はい」

乗りこめるロボットを想像してしまうので、つい欠陥品だと思ってしまう。

だが使ってみるまで判らないし、現地民の体力では無理でも自分達ならば使いこなせるかもしれない。そして何より遊びごころというのは退屈しない為に重要な要素だ。

「確りと掴まって居ろよ。＜クイックマーチ／早足＞！」
「ん」

奪った魔法の一つ＜クイックマーチ／早足＞は＜レッサー・デクス／下位敏捷増加力増大＞の下位互換魔法だ。

習得レベルが低いという以外に意味は無く、高レベルのモモンガには何の得も無い。これならばむしろ＜リペア／修復＞の方がよっぽど役に立っただろう。

だがしかし、こうやって実験してみると細かな差が目立つようになり成って来る。

＜レッサーデクス／下位敏捷増加＞が敏捷由来の全ての副能力値が上がる魔法だとしたら、＜クイックマーチ／早足＞は移動速度しか上昇しない。

上の魔法を覚えていると一見役立たずに見えるが、高レベルの消耗戦を知るモモンガにとつては見過ごせぬ利点があった。

「MPの消耗が少ないからか、長距離移動では役立つかな？」

戦闘が十分程度だとしたら、移動速度のほかに反応速度・攻撃速度・回避速度……全てが上がる方が重要ではある。

しかし一時間どころではなく、三時間だとか半日動かし続けるならその差は大きくなるだろう。使い道さえ見付けられるならば現地で開発された魔法は役に立つこともある。

「ぶくん」

「あとは人型じゃなくて馬車や船型の方が顕著なんだろうけど」

更に言えば戦場での人型と、国家規模での輸送型となれば随分と変わってくる。

十歩と十二歩の差は大したことはないだろうが、時速二十kmや三十kmがベースならば、半日の行程で随分と変わってくるからだ。

「それはそれとして騎乗する意味が全くないな。クロスボウでそれなら、槍でも意味がないだろう」

動いたびに撃ち難くなるし、ゴーレムの格闘攻撃も威力を削がれている。

かといって敵から離れられるほど速くは無い。＜クイツクマーチ／早足＞を使用したとしても、互角の速さだったら意味がある程度だ。手に持つのが槍なら馬の代わりになるだろうがソレなら最初から馬でいい。

「＜フレームストライク／炎撃＞はただの炎付与だし……こんなもんか。シズ、ご苦労だったな」

「……高台の代わりに成る」

やっぱり上手く行かない物だなあ。と失敗作であることをつくづく痛感した。

門外漢の自分でこれなのだから、研究者たちのガツカリ感は半端ないだろう。

「シズ？ 実験は終わったしもう降りていいぞ」

「……見張り台の代わりに成る」

珍しいことにシズが首を振った。

しかも自分でも信じていない様な主張を繰り返し、役に立たないゴーレムの弁護をしている。

「荷物を載せて運ぶこともできる」

「馬車で……もしかして気に入ったのか？」

三度目の主張を聞けばもはや疑う余地もあるまい。

「モモンガ様……」

「あー。極力壊さない様には注意しよう」

馬車で十分だろうと言おうとして、言葉を呑みこんでから尋ね直した。すると体勢を維持する為の支持棒をギュっつと掴んで離さないではないか。

ふっ。と溜息とも笑いともつかぬ苦笑を浮かべて仕方無いなど付け足す事にした。

「死体が手に入れば他にも実験できるかもしれん。安かったら購入を申し出て見るか」

「見付ける。絶対に」

昔の実験がバレたらいけないし、笑われるようでも困る。

駄目だと言われたら諦めるんだぞ……。そんな理屈がシズの顔を見たら口に来れなかつた。代わりにくりペア／修復のワンドを渡してしまう辺り、NPCに甘いのかもしれないと反省するモモンガであつた。

●先導者^{ストリーカー}

現地に到着したモモンガ達は、前回できなかつた本格的な調査を開始する。

足手まといになる研究者さえいなければ、自在に動くことが可能だからだ。

「何か判るか？」

「前回と同じ。足跡が無い」

獣に食われたり潰されるなど残骸になっているモノも含めて、モモンガは研究者や傭兵の死体を端から回収して行く。

その間にシズは地面や木々をあちこち確認して詳細な情報を追い

求めて行く。

「ということとは飛行か高度な隠蔽スキル……か」

「違ったらごめんなさい」

シズの追跡能力を完全に振り切れる存在の可能性はゼロではない。しかしそんな奴がこの辺に居るだろうか？ 居るのだとしてゴレムの実験を邪魔する程度に使うだろうか？

「まあ飛行かな。前回も隠れて生物探知も使ったというよりは、遠距離から俺のことも見て警戒していたという方がソレっぽい」

どちらかといえば飛行して居る相手と言う方が確率としては高いだろう。

高速で突っ込んで来たから人形遣いも研究者も逃げられなかった。前回出逢わなかったのも遠距離からモモンガを見ていたので、危険な奴だと思つて迂闊な戦闘を避けたと考える方がありえるのだ。

「生物？」

「その可能性が高いというくらいだ。グリフォンでは無理だろうがワイバーンやロック鳥なら簡単だろう」

グリフォンはストーンゴレムよりも強いが、研究者だけならともかく傭兵までを一瞬にしてというのは無理だ。

どうしても反撃を許してしまうし、その場合は羽が散乱する事になるだろう。その点はロック鳥も同様だがサイズの問題で瞬殺そのものは可能である。

「羽が無いという点を考えれば高速移動できるタイプの複合獣^{キマイラ}くらいだが……ビーストマスター関連のデータなのか？」

「ハム助や大福みたいなの？」

複合獣^{キマイラ}の子供達は速攻で死に掛けたので、仕方無く専門家に預けて養育して居る。

旅に連れて行ける最低限の成長をするまでお預けとあつてシズは密かにお冠りだった。おこだと言ひ換えても良い。

「しかしなあ。ゴレム研究者の殺害にゴレムのコンペ。これだけお膳立てが揃つて別件つてのも変だよなあ」

もちろんタブラが用意したイベントでなければ、無関係に引き起こ

された可能性の方が高い。

死んだイシドロがたまたまこちらを選んだことが契機に成ったのであれば、仕組まれたというよりは、ランダム要素の方が高いのだ。「一端離れて変装するか、後は神殿まで行って〈ブレス・オブ・ティターニア〉／妖精女王の祝福」を使ってみるしかないな。流星にここじゃあ〈センス・エネミー〉／敵意探知」とか意味は無いし」
〈センス・エネミー〉／敵意探知は目的意識を持って狙われている場合には意味が無い。

もし前回にモモンガの姿を見られて覚えられているとしたら、〈デイズガイズ〉／変装の魔法を使って外見だけでも変化させておく必要があるだろう。

そして古い神殿へ訪れたモモンガ達を出迎えたのは、笑えるくらいに男のロマンであった。

「ここも地下？」

「いや……この様子だと相当長い通路だ。おそらく向こうの山まで通じているぞ」

隠し区画に入ったところで〈ブレス・オブ・ティターニア〉／妖精女王の祝福を使用。

するとドンドン奥に進むではないか。しかも一切曲がること無く、ひたすらに山側に通路が続いている。

「モモンガさま。ここ全部同じ調子で掘ってある」

「……これはゴーレムでの作業だな。生物に同じ作業を繰り返させるのは不可能だ」

トロールの亜種どころか巨人でも通れそうな穴がそこにある。

ただひたすらに掘り進められており、力作業と無意味な繰り返し任務はなるほどゴーレムに向いている仕事だ。

「足跡は二種類くらいないか？ おそらく力作業をやらせている個体と、土砂を運ぶ個体が存在する筈だ」

「当たり前。モモンガさま凄い」

基本的にゴーレムは単純な命令しか受け付けない。

唯一の例外はこの国の住人がやっているように、主人が逐次命令を

与える方法だ。ただ後者は操る人間の方が単純作業に向かないのでこんな大トンネルは不可能だろう。

「しかしこのトンネルの中を抜けて来たとして、どんな形状をしたゴーレム何だろう……」

飛行して居るから足跡が残って居ない。

そこまでは大前提として把握して居る。しかしながらトンネルのサイズで相手の大きさが逆算出来る以上、これより大きく無い事は確定して居る。少なくともロック鳥やワイバーン程のサイズは無理だろう。

巨人サイズだからといって翼があると、もっとサイズが必要だからだ。

「あ……あつた」

「壊れてる」

暫くして発見したのはゴーレムの残骸だ。

土砂で汚れている事、上にポツカリ穴が空いている事を考えれば地震か何かで作業中に破壊されたのだろう。

「ウッドゴーレムみたいだし、土でも石でもないから放置されたのかな」

ある意味シンプルな命令を組み合わせた事の弊害だろう。

作業中にゴーレムが壊れることを前提に入れて無いので、残骸を処分する係が居ないのである。あるいはこのゴーレムがたまたまその係で、居なくなった可能性も無きにしても非ずだが。

「この先に本拠地があるとして、そこから先の探索が本番だぞ」

「はい」

こうしてモモンガ達は秘密基地に隠されたゴーレム目指して行った。

ジ・グラード

●意図せぬガード狩り

モモンガ達が穴から先に暫く進んでいくと、途中途中に入り込んだらしき獣や亜人種の死体があった。

古い物でも腐敗を始めた前後であり、まだゴブリンなど妖魔系か、それともエルフなど妖精系か容易に判別できる。

「シズ。傷口の形は？ それと……足跡はどうなっている？」

「傷は地上と同じゴーレムサイズの剣。足跡はゴブリン達だけ。やっぱり無い」

モモンガはシズの答を聞いて暫く考えて居たが、ややあってもう一つ付け加えた。

表で暴れ回った奴であるならば、もう一つ確認しておくことがあるからだ。

「傷口の方向はどうだ？ 全て奥からか？」

「ううん。中には入り口の方からもある」

モモンガはそれを聞くと、手だけは動かして念の為にゴブリンシャーマンらしき死体をゴーレムに載せながら、幾つかの事態を想定した。

シズはそれを手伝ってゴーレムの荷台に括りつけ、黙って聞いている。

「あまり考えたくないがガード用のゴーレムが外に出て居る可能性があるな」

「外？」

シズは思わず首を傾げた。

ナザリックに所属するNPCに勝手に行動する者はいない。モモンガ達に命じられて連れだされるのも、初めてであるくらいなのだ。「理由そのものはいくつか考えられるが、追い掛けて出たのか、外も守るべき領域だと設定してあったのか」

自分の理解が及ばない事なので、シズは静かにしておいた。

ナザリックの外に出るなど考えられなかったが、なるほど言われて

みれば侵入者を追って、ナザリツクの別階層までならアリかもしれない。

言われるまで考えた事も無かったが、例えばシズにとつては妹であるエントマなどは第二階層の黒棺に行ったことがある話を聞いた様な気が……。

「モモンガさま、ちよー凄いい」

「あ、いや。そうじゃないんだ。……この手の手法に覚えがあつてね……あつてな」

思わずもれた尊敬の声にモモンガの心がくすぐられた。

大したことないぞと言いたいような、ギルメンから教えてもらった知識ゆえに自慢したいような。

「あーうん。そうだな、やはり教えておこうか。能力的に倒せない筈の存在や、自分達だけでは難しい集団を誘き寄せて倒す方法がある」「分断？」

シズとて愚かでは無い。

モモンガのくれた情報から、誘き寄せて個別に倒すくらいは直ぐに思い付ける。

「そのの亜流だな。モンスターが壊さない公共施設……特定の属性防御で壊せない所に引っ張り込むとか。ナザリツクだとそうだな……」

「おお……」

町の周囲まで超強力なワンダリングモンスターを引っ張って来て、NPCのシテイガードや他のPCと一緒に倒す。

あるいは呪われたアイテムで呼び出すポップ型レイドボスを、ギルドの中の狭い場所で倒すなどなど。そんな知識を披露すると、シズは凄いい凄いと感心してくれた。

「そういう手法は良くも悪くもガード狩りとか拠点狩りと呼ばれて、やり過ぎたら運営に目を付けられるんだが。ま、まあ脱線はここまでだ。言いたいのはソレに近い状況だということだ」

モモンガは足元の土に簡単なT字路を描いた。

銀貨と紐を使ってガード用ゴーレムを現すマークを造ると、次いで銅貨を何枚かT字路の上に置いて状況を説明する。

「本来はこの通路を始めとした、内部のみで行動する予定だった。命令された範囲はそこそこに広い」

「穴が空いて、そこ行っている間にゴブリン来た？」

研究者達も、な。

モモンガはそう言いながら、先ほど見付けた穴を振り向いた。もしかしたら今もまた、ゴーレムは外に居るかもしれないのだ。

「神殿が出口で、神殿から少し行ったところまでは範囲だった。偶々外から研究者を見掛けて……なんだろう。単に外の警備として回っている最中かもしれないがな」

「夢中になったら、めー」

通路の警備が主任務であるならば、追撃したり、見掛けた相手を襲うのはやり過ぎだろう。

事実、侵入者である二人が入り込んで居るのである。

「そういう訳で、何が起きているのかは判った。問題なのは……解決するのが面倒と言うか、して良いのか判らんことだな」

問題なのは、与えられた命令が判らないこと。

シズの常識に合わせて、ゴーレムの移動半径を適当に付け足したが……。そもそも目に着いた人間・亜人種を殺せと命じられている可能性もあるのだ。

「まあ最悪は姿を消せば済むか。飛んで逃げても良いしな」

そう言いながら、改めて通路の大きさと、先ほどの穴のサイズを思い出す。

状況に関しては把握できた。しかし、形状に関してまったく判って無いのである。少なくとも翼で飛ぶ魔獣ではないというくらいだ。

●それは聖なる塔ではなく

やがて二人は通路を抜けて、大きな盆地と高い塔を見付ける。

盆地には小さな穴が複数開いており、モモンガは妙な既視感を感じた。

「これはまさか……鉱山か？　そうか廃鉱を利用したんだな」

考えて見ればゴーレムを造るのであれば、有望な鉱山を利用するのは当然のことだ。

だがどんなに有望であっても、いつかは掘り尽くしてしまう。

「廃鉱ならば誰も見向きもしなくなる。なるほど、流石はタブラさん良く考えたな」

ゲームであるユグドラシルに置いて、無限にポップするのは下位の鉱石のみだった。

七色鉱のようなレア鉱石は基本的に同じ場所に続けてポップしないので、暫くは生産PC以外は見向きもしなくなるのが定番。最初に占拠した時、そして封鎖された時に忍び込んだ時……。よく秘密基地みたいだなと話込んだものだ。

「んー。だとすると少し悪いことしたかな。このルートって、全部調べた後で解放される場所だよな」

「だから罠がなかった？」

今まで来た道を振り返って見ると、納得できる物があった。

本来はガブリエツラが言って居たゴーレム・コンペのような、別のイベントで紹介されてからこの道を見付けたのではないだろうか？

だとしたらタブラが自慢したい秘密基地を、出撃路・兼脱出路から逆走してしまったのだ。

「まあしようがないな。……もしそうだとするならば、あの辺が正規のルートで……闘技場ポイ場所はそのまま試練の間かな」

「モモンガさま、あそこ」

タブラがノリノリでイベント形式の作りをしたとして、逆算していくと幾つか想像できることがある。

その中でシズが指差したのは、塔の脇だ。

もし飛行魔法で塔を登った場合、どうなるかが端的に判る。

そこに在ったのは……。

「ゲツ。無数のガーゴイルかよ。……あれ面倒なんだよなあ」

ガーゴイルはクリエイト・スタチューで創造されるゴーレムの一種だ。

最近良く見て居るクリエイト・サーバントで造られたゴーレムよりも、機能が限定されているからこそ強い。石で造られているがアイアンゴーレムよりも強かった。

「飛んで一直線に宝物殿つてのは駄目ってことだよな。……ガーゴイルは警備用だから魔法知覚のレベルも高いし」

「……わたし、隠れてる？ 駄目？」

モモンガならば攻撃されても困らないし、不可知化も上位で行えるから問題無い。

しかしシズはそうもいかないのだ。回数の限られている不可知化でもガーゴイルに感知される可能性が付きまとうし、回数制限の無い不可視化ではほぼ見抜かれる。

「シズを置いて行くわけにはいかんさ。まあボスの間に直行するとしてどうか」

「……ごめんなさい」

謝るシズに対して、そんなことはないさとモモンガは頭を撫でる。

今回は偶々出口から逆走したからこうなっただけで、イベントに沿って正規のルートからくれば別だったろう。おそらくは攻撃してこない場所に移動できた筈だ。

「どつちみちボスとは戦う羽目になっただろうから気にするな」

「はい」

建物の中に入れば連れて居るゴーレムはともかく、シズが隠れることの可能な小さなスペースもあるかもしれない。

部屋を封鎖してしまえば問題無いし、ボスを倒せば中を安全に移動するルートもあるだろう。

そんな事を思いながら塔の中に進むと、祭壇のような場所にボスらしき影。

そして……今までやってきた場所から、けたたましい音が聞こえて来るのが判る。

「二体同時とはまた面倒な。……まあボス部屋に入った段階で、アラームがあつたんだらうけどな」

「あっち先？」

モモンガはその音を聞いた段階で即座に塔の外を確認した。

もしガーゴイルも連動する様ならば、目立ちたくは無いが高レベルの魔法も必要だろう。動か無いのであれば、一度外に出てからガード

用のゴーレムを倒した方が良い。

「よし、動かないな。さつき言った分断と同じだ。先に外のガードゴーレムを倒すぞ」

「了解しました」

モモンガが冷静に指示をしたことで、シズも本来の冷徹さを発揮する。

愛着を見せていたゴーレムも隅っこに退避させ、自身は障害物となる場所に身を隠す。

暫くして現われたのは、腕と一体化した剣と盾もさることながら、大きな叉袋が象徴的な人型のゴーレムだ。

股間にある叉袋は実に特異で巨大、あんなに巨大だったら困るよな……と思わなくもないが、ゴーレムだから別の機能があるのだろう。

「もしかしてジャガンナートの山車か!？」

ジャガンナートの山車というイベントがあり、元は神様を祭るお祭りだったらしい。

それをモデルに暴れ回る神像ゴーレムを止めると言うか、相撲と称するレイドバトルに挑んだものだ。その時にタブラとかわした会話も直ぐに思い出せるくらいだ。

『祭りがあったという現地では、俗世の苦勞を嘆いて山車の前に身を投げる人々が居たそうだよ。これがジャガーノートの語源であり、イベントの元ネタと言う訳だね』

『神像だからって強過ぎませんかあのゴーレム!? しかも山車は山車で妙に強いし!』

そんな過去の話の思い出しながら、モモンガは戦闘パターンを想定した。

イベントの時は複数回攻撃とか馬鹿みたいに高い耐久値に困ったものだ。それというのも山車型のゴーレムと神像のゴーレムは別物で、途中まではそれに気が付かせずに偽装情報を表示して居たのである。

「確かに台車に乗るよりも、あのくらいのサイズの方が狙い難いけど……。この場合は妥協の産物なのかな」

又袋が浮遊して、馬に乗る様な形で上に居るゴーレムが動いている。

逆に言えば上のゴーレムは移動力の低いパワー型であり、60レベル強から70レベル弱だとしても、かなりの攻撃力を持って居るだろう。レベル差があるからそれほど通らない筈だが、モモンガにもダメージを与えられる可能性がある。

「シズは時々狙撃で下を狙ってくれ。ただし無理はしなくていい」

「はい。ピー玉を狙う」

「アーアーアー！ 聞こえない!?」

シズが直球を口にしたので、モモンガは聞いて無いフリをした。そして飛行用というよりは高速移動用に＜フライ／飛行＞を唱えて戦闘態勢に入る。

「まずはこのくらいから行ってみようか。＜ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大＞＜ライトニング／雷撃＞」

モモンガの放った雷撃は通常よりも幅広い。

形状も一か所において炸裂する球型よりも、広範囲への放射型の魔法だ。かなり相手が早いので、まずは小手調べに当て易さ重視と言う訳である。

「おつ、上手いぞ。さすがにこのクラスだと馬鹿じゃないな」

ゴーレムは高速で小さなターンを掛けて軌道を変えた。

おかげで電撃の直撃を避けて、大した被害も出さずに接近を続けている。

「見えたかシズ」

「……はい」

先制攻撃は他愛なく防がれてしまった。

だがソレは意図してのことだ。魔法は最初から消費魔力を抑えてのモノだったし、一部始終を狙撃手であるシズが見守って居ただけら。

「じゃあ段階を上げて見るか。次は一応の上限で行くぞ。＜トリプレットマジック／魔法三重化＞＜ドラゴンライトニング／龍雷＞」

「……」

モモンガは先ほどよりも強烈な雷撃を放った。

それは龍が空を駆けるように跳ね、先ほどよりも範囲こそ狭いが的確に回避機動を呑み込むように迸る。これ対してゴーレムは盾を構えて被弾面積を最小にすると、やはり直撃を避けたのだ。

「シズ。次は同じやつをもうちよつとキツクいくぞ。チャンスがあったら遠慮するな」

(……)

もはや声に出して反応する事無く、シズはクロスボウを深く構える。

当てる為に全ての感覚を投入し、その時の為に没入して行く。

そしてゴーレムがモモンガの至近に迫り、猛烈なチャージアタックを掛けた時にチャンスが訪れる。

「私に構わずやれ！ <マキシマイズ・マジック／魔法最強化><ドラゴンライトニング／龍雷>」

(っ！)

チャンスを造る為、モモンガもまた最低限のブロックを掛けた。

<フライ／飛行>による移動で僅かに距離を取り、片手に構えた小剣でゴーレムサイズの剣を受け止める。残る片手はシールドの根元である肩口に向けて解き放つ。

「モモンガさま、大丈夫？」

「痛っう。思ったよりも痛いな。だがレベル差もあるし単純な物理攻撃ぶごとき問題無いよ」

シズはクロスボウを放った直後に移動を始め、モモンガは手を挙げて応えた。

60レベルを越えれば物理無効化は意味を為さなくなるし、防具も現地に合わせて居るのでたかがしれている。だからといってモモンガが持つ斬撃耐性を無力化する訳ではない。

「しかし性能としては大したもんだ。これは二体に分けたことホバークラフトのメリットだな。レベルと威力重視型が火力担当、ホバークラフト輸送型が回避と移動力を担当した結果だ」

プレイヤーを相手にするならば、もう一段階の強化が必要だろう。

だが傭兵モンスターを相手にするならば問題無いし、現地の英雄級やノーマルなドラゴン・巨人であれば十分に通用するだろう。何よりゴーレムは魔法レベルさえあがれば、量産化可能なのである。

そしてこの地のゴーレム製造魔法は、儀式化する事で本来よりも低レベルで可能。

定期的に開催されるゴーレム・コンペによって、徐々にレベルUPや形状の進化を図れば、いつかこのランクに到達する事もあるだろう。

「徐々に高い目標を目指す様にさせればレベルも上がるし、もしかしたら儀式魔法も更に……」

「モモンガ様。そこは危険」

へっ？

ガードゴーレムからは十分に距離を取って居ると言うのに、不思議とシズから忠告が飛んで来た。仮に射撃武器が隠してあっても、問題無く避けられるし刺突武器の耐性は……。

「そこは本殿から射線通ってる」

（「熱っちいいいい!？」）

猛烈な痛みを受けると同時に精神の平常化が発動する。

弱点属性である火炎ダメージには耐性がなく、アミュレットによってカット率を底上げしていても激しい痛みを受けたのだ。

「ここまで届くとは驚きだな。私の油断だが、むしろタブラさんの設計を褒めるべきだろう」

「……」

＜フライ／飛行＞でゆっくりと本殿に続く入り口から離れば、射線を切ると第二撃は無かった。

さっきの攻撃は単発だったのかもしれないが、ここはチャージ式で時間が掛るのだと思っておこう。

「うん、そうだ。おそらく本殿の方もこいつと同じ形式だな。きっと火力を発生させるやつと、届かせる為の砲台は別物なんだ」

「その可能性はある」

とはいえレベル差の問題があるので、シズの視線の方が痛い。

今までにないダメージを喰らったと言っても、火炎ダメージ込みでものたうち回るほどではないし、むしろ威厳が損なわれかねない方が問題だった。

モモンガは冷静に観察すると方針を決めていく。

ここまでは予定通りだ。着実にガードゴーレムを無力化し、ボス・ユニットの方は力任せに倒す以外の方法を見せる余裕がある方が良いだろう。

「シズ。魔力弾の使用、場合によっては連射も許可する。確実に輸送型ゴーレムを潰せ」

「はい」

現地レベル外なのと、MP消費を避ける為に使用しなかったガンの使用を許可する。

魔法のクロスボウ程度では破壊できなかった輸送型ゴーレムも、この攻撃ならば十分に通用するだろう。狙撃で落ちればよし、落ちなければ連射によって確実に潰す。

「上は利用価値があるので一時的に放置。お前に預けたゴーレムよりも足が早かったら牽制は任せる」

「了解しました」

そういつてモモンガはガードゴーレムを惹きつける為に通路側へと移動した。

特化型で移動速度が無いかもしれないが、輸送型ホバークラフトが傑作だから載せた場合には歩行速度がそれなりにある可能性もあるからだ。

●製鉄の魔法陣

移動力さえなければ、ガードゴーレムを無視してこの塔を守らせられる。

そう判断して放置を決めたモモンガだが、塔を掌握するにはボスを倒す必要があるだろう。

「さてと。潰すとしたらどっちかな」

予想が当たって居たとして、火力ゴーレムと砲台ゴーレム二台で一台のボスである。

少なくとも片方を潰さないと撃破したことにはならないだろうが、

後に活かすならば全て壊すのは惜しい。できれば利用できる方を残しておきたいものである。

「常識的に考えたら砲台の方なんだけど……。この距離を届ける射撃なんて思い付かないからなあ」

右往左往しながらガードゴーレムの攻撃から逃れ、時折<グレーター・テレポーターション／上位転移>も使って隙を造る。

今はゴーレムもシズの攻撃を警戒して居るかもしれないが、時間が経てばルーチンワークの問題でいつか隙が出来る筈だ。

そんな風に移動を続けながら時間を稼いでいると、シズの攻撃がついに又袋を捉えた。

ホバークラフト輸送型の動きがおかしくなり、次第に動きが鈍くなつて行くのが判る。

（うぐつ。他人事なのになんだが気の毒な気がする。……。もう俺には無いんだけどな）

存在しない股間を心の中で抑えながら、モモンガは時折<グレーター・テレポーターション／上位転移>を唱え始める。

そして本殿からの射線が通る位置に差し掛ったあたりで詠唱完了。熱線が向かってくるのに合わせて『視界内へ』の転移を行った。

（もしかしたら<デイレイ・テレポーターション／転移遅延>というオチもあるからな。念には念を入れておこう）

<グレーター・テレポーターション／上位転移>ならば記憶にある場所に転移することもできる。

だが<デイレイ・テレポーターション／転移遅延>と組み合わせると熱線を送り込んで居る場合、射線の中に飛び込まされるのがオチだ。

確信は無いが過信もない。

戦い慣れたモモンガはソレを警戒して本殿への入り口前に転移し、

<パーフェクト・アンノウアブル／完全不可知化>を詠唱する。

（えーと中央のは炬として……。砲塔つか筒が向いてんな。で、本体は魔法陣の方か）

中央に座す大型ゴーレムは手がなく釜というか鼎型。

そしてこちらを向いているのは。複数の筒……。その中にある魔法

陣だった。〈オール・アプレーザル・マジックアイテム／道具上位鑑定〉で鑑定してみないと判らないが、複数あるというのが大きい。（んで炉の周囲にも別の魔法陣があって、あのゴーレムはあくまで受け止めるだけ……。いやレベルの問題で壊れないだけなんじゃないか）

周囲にある魔法陣は恐ろしいほどの熱量を注ぎ込んでいるが、大型ゴーレムはビクともしない。

モモンガがレベル差もあって無事なように、耐熱構造に加えてレベルによる防御力UPが一因ではないだろうか。

（なら遠慮は不要だな。炉に必要なのはレベルだけで、魔法陣が複数あるって事は、アレも量産が効くって事だし）

できるだけ足を壊して動けないようにしたいが、確実に出来ることも限らない。

ならば問題なのは効果範囲を広げ過ぎて、魔法陣そのもの……あるいは知識の記録装置を壊す事だろう。あのレベルのゴーレムを現在製造するのは不可能だろうが、タブラと合流すれば幾らでも可能と思われる。

「構造は理解した。シズをいつまでも待たせる訳にはいかん。消えてもらうぞくマキシマイズ・マジック／魔法最強化〉〈リアリティ・スラッシュ／現断〉」

モモンガは複数ある中継用の筒型ゴーレムの内、炉である大型ゴーレムに近い個体を破壊した。

これによって中継を根元から止めると同時に、本体周囲の視認を確保。これから行う攻撃による影響をリアルタイムで把握できるようにしたのだ。

「おおっと、そんなに慌てるな。お前の相手も今してやるから……〈リアリティ・スラッシュ／現断〉」

不可知化を解いたことで大型ゴーレムが動き出した。

ソレが熱を吐き出そうとするのだが、移送する為の筒ゴーレムは既に破壊されている。受け止められずに周囲が白煙で染まっていくが、モモンガは一足先に移動して、〈リアリティ・スラッシュ／現断〉を

使って足を一本ずつ切り落として行った。

数本ある足の幾つかを切り落とすと、ズズンと自重で大型ゴーレムが尻もちをつく。

それでも周囲の様子が変わらなかつた為、溜息つきながら本体を破壊すると周囲の光が消えて行ったのである。

●新しい出逢いを求めて

ガードゴーレムもボスを倒すことで、侵入者撃退の命令が一度リセットされるように成って居たらしい。

そこまで判った段階で、軽く魔法陣を調べてからシズと共に塔の上まで登ることにした。

「モモンガさま」

「やっぱりあつたか。まあそれは地下墓所カタコンベに戻ってからだな」

市場上の部屋に辿りつくくと、見慣れたモノと石板による図書室があつた。

モモンガは言語翻訳用のモノクルを取り出すと、塔の上にある石板を読み始める。

「えーと、やっぱりここは鉱山だったのか。しかし……科学的な炉よりも魔法陣で造つた方が良かったって……らしいといえればいいけどさ」

一番大きな石板には資料の全体区分と歴史的なモノが刻まれていた。

派生する形でゴーレムの開発史や魔法陣の研究碑があり、開いている付近には最近の研究が刻まれた石板がある。おそらくは下の階に奉納すると、ゴーレムか何かが持つて来るようになっていたのだろう。

「最新の一番優秀な研究資料が並ぶつてのはありがたいけど、優勝したところだけだと直接繋がらないよね……。まあタブラさんも万能って訳じゃないし仕方無いか」

各工房の資料を常に並べて居る訳ではないので、奉納したらしき資料はチグハグになっている。

だがそれはそれでタブラが苦勞した跡が見えて、不思議と満足する

モモンガであった。

一通り石板のタイトルを見た後で、モモンガは思考を整理することにした。

ここはタブラが用意した、ゴーレムの生産工場だ。いつか合流した時にアインズ・ウール・ゴウンの戦力を増やす為に準備したのだろうか。「この世界の住人達は死に易いが、意図した技や魔法を開発できる。誘導してやれば収穫する事も可能ということ」

それが今回のゴーレム騒ぎで得た体験だった。

タブラはゴーレム開発を選んだが、その過程で自分は人形遣い達の死体から高い確率で現地の魔法を得た。

「ランダムなのに覚えられたのは師匠と弟子で一子相伝だったからかな？ ならそういう連中を使えば、俺も魔法を覚えられる」

直ぐに狙い通りの魔法を造り、奪うことは難しい。

だがやろうと思えば時間を掛けることで、意図した系統の新魔法を収穫できるだろう。

「じゃあ何の魔法を開発して欲しいとか、その為にはどうしたら良いとか直ぐには思い付かないけどな……」

どんな世界なのかは判った、利用の仕方。

だがこれから何をしたら良いのが皆目見当が付かない。

そもそも濃い性格を持つギルメンの調整はともかく、自分で何かを考案するのは得意ではないのだ。

それこそタブラであれば神話などのウンチクから思い付くだろうし、ぶにつと萌えなどは現状からでも最良の判断を下しそうな気はするのだが。

「えーと、まずタブラさんと合流。次に造物主が居た時の対策……でギルドの戦力向上。あとはこの世界の事を調べる……かな」

オウム返しのように今まで得たことを並べて行く。

だが答えが出ないのも同じである。答を求めたわけではないが、困り果ててつい言葉が漏れてしまった。

「なあシズ。他になんか良いアイデアあるか？」

「ハム助たちと一緒に冒険！」

するとシズは手を挙げて熱烈に主張して来る。

事情を考慮しない他愛ない言葉なのだが、不思議と共感できてしまうのは何故だろう。いや、モモンガ自身も余計なことが無ければそうしたいと思っていたのかもしれない。

「あとこの子もっ」^{ゴーレム}

「そうだな。タブラさんの伝言でもなかったら、みんなで旅して情報収集を先にしても面白いかもな」

荷台ゴーレムの上にシズが乗って、キメラの子供達を肩車。

そんな光景を思い浮かべ、モモンガは思わず笑った。珍しく頬を膨らませたシズが怒っているので、馬鹿にしたわけではないと頭を撫でてやる。

「じゃあ持つて行ったら駄目と言われても良い様に、何かお土産持つて行かないとな」

「うん」

そう言いながら本殿の入り口まで戻り、モモンガ達は町へと戻り始めた。

次の冒険に向かう為に……。

外伝：タブラさんの伝言2

●現地の独自性

モモンガ達はゴーレム購入手続きの間、試合を観戦する事に成った。

当然片方は今まで手伝っていた新型であり、相手方はライバル工房のモノだ。おそらくはコンペの予選みたいなものだろう。

「シズ。この戦いどう見る？」

「……高い確率でドワーフ蟹サウルスの優勢勝ちです」

相手方のゴーレムをシズは奇妙な呼称で呼んだ。

手は長く寸胴で足は短い。バランスの悪いのが見て取れるが、ソレを尻尾状の装備で補っている。言われてみれば、確かにドワーフ蟹サウルスでも良いかと思えた。

「あの個体は明らかに打撃戦を企図した設計です。第一戦のレギュレーションはゴーレムのみですので、結果を見るまでもありません」
「ふむ。では第二戦……人形遣いが関わった場合はどうだ？」

NPCの顔を強く見せる時、シズは感情を排除して極端に冷徹になる。

元から表情の変わらない娘だが、そこから更に淡い感情が取り除かれて希望論を寄せ付けない。

シズは軽く目を伏せて再演算すると、同じ調子で返答を寄こした。

「機動戦に持ち込んでも全く勝機は見い出せません。むしろ互いに装甲や移動力を強化し合えば、少々の戦術差では補いが付かなくなるでしょう。しかし……」

「態勢は揺るがない。しかし本来は第二位階でしかないはずの、連中の奥義に当たる魔法が大きな影響を及ぼすと？」

コクリとシズは頷いた。

第二戦、人形遣いと呼ばれる指示者という要素が加わっても、辛口の評は変わらない。ならば優勢勝ちにまで推論が低下するのは、彼ら人形遣いが独自開発した魔法の影響が、それだけ大きいからだ。適性さえあれば誰でも覚えられる魔法と違って、それらは劇的な事がある。

る。

「仮に跳躍して上方から攻撃すれば、威力はケタ違いに底上げされます。あるいは武器耐久度を犠牲に、威力を底上げする様な魔法があるかもしれません。そうなれば計算は根底から変わってくるでしょう」

「Vの字斬りやファイナルアタックは強烈だからな……ゴホン。創意工夫と言う物は面白いな」

シズの眼がジト目変わった。

彼女もモモンガのノリに慣れて来て、データを問われた場合はプレアデスのシズとして。そしてネタを言われた時は年下の相棒として対応を変えるだけの余裕を手に入れている。

NPCとしては余計で余分なのかもしれない。

だがモモンガとしてはただのNPCではなく、友人の娘として扱っている。むしろ、その成長を好ましいと感じていた。

「名残惜しいがタブラさんの伝言を優先したい。今は勝率を覆す程の開発力を期待しておこうか」

「はい」

モモンガは誰にも見られない場所まで移動し、シズやゴーレムごとあの『塔』へ転移する。

そしてシズの記憶を一度写し、手に入れたタブラからの伝言を読み込ませることにした。

「これまで判ったのは、ここの連中が自由に……ではないにしろ、独自に魔法とかを開発できることだよな。その確認と、あとは造物主とやら続報か」

「……」

シズは黙ってモモンガの思考を邪魔しないように……いや、タブラの記憶が混在し始めていた。

徐々に性格やデータの汚染が始まり、僅かな間、タブラ・スマラグデイナに成り果てるだろう。その間に、少しでも情報を聞き出したものだ。

●進化の形

やがて眼差しも態度も変化したシズが、タブラとして思考し始め

る。

そして手に入れた情報を元に、何を話せば良いのか迷う……ことは
ない。

タブラはあくまで、自分の話したいことだけを一方的に伝えて来る
のだ。そこから有益な情報を引き出すのは、なんとかして誘導するし
かない。

「やあ、モモンガさん」

「タブラさん。次の依頼があるから時間が無いんで、用件をお願いします
ます」

ウンウンと愉しむように頷く姿は、明らかにシズの物ではない。

指先をタクトの様に振りつつ、近くにあったゴーレム模型用の粘土
へと向かった。

「モモンガさんは現地民が、独自の魔法や武技を覚えて行くことに気
が付いたと想う」

「ええ。レベル的には大したものはありませんが、メリット・デメリッ
トを組み合わせて、面白い使い方しますね」

例えば先ほどシズが例に挙げた、跳躍の魔法。

あれは第三位階にある<フライ／飛行>の魔法からみれば劣化互
換だが、ゴーレムという重量物が行うことで、武技の初歩技であるス
マッシュ以上の効果を発揮する。

他の流派と言える名人の元には、それぞれ独自の魔法があるらし
い。

僅か一瞬ながら高速走行を行いランスチャージするとか、モモンガ
が奪った様な火力UPの魔法など。

それらは一子相伝的な魔法であり、自身が覚えていないがゆえに奪
い易いモノであった。

「儀式が確実に発動する様になってたんで、独自の魔法を編みださせ
るとか、独自系統の職種とかやらせてみたいんですけど……」

「おや。『黒の叡智』が機能したのか。それはおめでどう。心強い限り
だね」

不思議なことにタブラは、その情報を持ち帰れない事を残念に思っ

ていなかった。

もしかしたら使えることは規定事実だったのだろうか？ そう思っている、サラリと爆弾発言が追加される。

「どこかの国に弟子が学校を造って居ると思うから、探して伝えておいてほしい。急ぎの用事は彼を伝言板にしてくれ」

「へっ!?」ということがある程度まで話してるんですか？　っていうか、生きてるのその人？」

いきなり弟子に伝えてくれとか、驚きが強過ぎる。

ナザリックの事とかどこまで放して居るのかとか、色々聞きたいことができてしまった。

だが前述した通り、タブラは自分の話したいことしか話さない。

さつさと自分の用件に思考を切り替えたようだ。

「その辺は調べれば判るよ。『アインズによろしく』と言えば通じるんで。時間も無いし、ここの連中の事を話そうか」

「……くっ。この人は相変わらずだなあ」

言いようのないガツクリ感と、懐かしさがモモンガに込みあげて来る。

その間もタブラ in シズは粘土を半分こねくり回し、残り半分は器に入れて水を足すと柔らかくしていく。

「タレントの有無はまあ最初のリソースが多いか次第。竜王や上位巨人とかはちゃんと成形して、魔力と魂を吹きこまれた生命体だと思っ
て欲しい」

「あーなるほど。リソースが魔力だか何だか知りませんが、言われてみれば判ります」

並んで行くトカゲもどきや、呪いの人形もどき。

バルバロッサを思い出すなあ……と訳のわからないセリフに取り合えず頷いておいた。おそらくは三本指の時代と違って、上手く扱えないのだろう。あるいはシズの趣味が影響しているのかもしれない。

「これに対して人間は、この縄に魔法を掛けて、一定量のリソースをラ
ンダムに型押しするようなものなんだ」

「スタンプというか、コピー？　なんか随分と適当な……」

柔らかくした粘土を縄に付けると、グルグルと振り回してあちこちにバラまいていく。

そこに型でガンガン人型を押しつけて行くのが、大量に生まれる人間を示しているのだろう。

「でも時々ですけど、妙に強力なタレントとか居ますよね？ それもリソースの分量ですか？」

「半分はね。残り半分はリソースそのものが増えた事と、人口が増えてそもそも作例が増えたのが影響かもしれないね」

そういつてタブラは普通の粘土の残りを手に取ると、柔らかい方に全部加えてしまった。

そして余った材料も放り込み、縄を何度も何度も振り回す。シズの姿に相應しいが、その目は決して笑って居ない。

「リソースが増えた？ そんな事が簡単に起きるんですか？」

「竜王や巨人が減った事もあるし、何より実例が目の前にあるじゃないか。この世界に竜王が不用になったなら、消費の大きいあの連中はもう要らない。そして新しい客人共々、何時かリソースに還るかもしれない」

転生とか還元とかいうのがあればね。

そう言つて笑うシズの表情は、随分と酷薄なものだった。タブラの表情には似つかわしくないので、推論を得るまでの過程で何かあったのだろうか？

「俺たちもリソースですか。いよいよもつて造物主の存在説が強まつて来ましたね」

「……その話をする前に、先に彼らの成長について終わらせておこう。モモンガさんも、これからの予定が立ち易いだろうか？」

確かにその通りだ。

現地民の成長パターンが理解できれば、モモンガ自身タブラの様に色んな職種や魔法の萌芽を促し、いつか収穫できるかもしれない。現地の連中にも良い影響があるので、迷惑なのは気にしないでおこう。

しかし……思い付いたことを後回しにする。

それはとても、タブラらしくないことだった。言いようのない不安

を感じて、無い筈の胃がキリキリと痛む。

「彼らは本来、我々ユグドラシル棲人と違ってレベルUP性じゃない可能性があるんだ。元の成長パターンに加えて、『二十』による方向性でレベルが付け加わった」

「ハア!? 何ソレ、ズルイなんてもんじゃないっすよ!」

不安さを押しつけるほど腹が立つ。

もちろん八当たりでしかないが、弱い段階から頑張ってレベルを積み上げてきたモモンガにとって、見逃せない情報だからだ。

「じゃあ連中は元の能力に加えて、レベル分の強さが追加されるって事ですか!」

「使いこなして居る連中にとってはね。ただ忘れないで欲しいんだけど、ネットで『二種類分』の成長ルールを知ることができないんだ。しかも間違った場合、容易に取り直す事はできない」

ここで重要なのは、成長を止める制限が二つあることだった。

最初から強い竜王あたりならともかく、人間達はむしろ誓約ばかりが大きいだろう。いや、新しく成長する個体にしかレベル性が発揮されないならば、竜王にすら制限が大きくなってしまう。

「ルール制限……」

「そう。適正レベルの試練が必要だとすら彼らは知らない。そして最初のリソースは限られているから、人間なんてあつという間にカンストだよ」

死に戻りが出来ない以上、それは致命的だ。

間違った状態でカンストしてしまうと、もう二度と成長ある未来には戻れない。レベル性が本来のシステムであるモモンガと違って、二種類分のルール制限が彼らには課されているのだから。

「彼ら本来の成長は常備化ポイント性……。元の能力に付け足して行くことで、新しいけれど良く似た存在に進化・変態するんだと思う」
「変態……ってペロロンチーノのことじゃなくて。ブループラネットさん達が言ってた、昆虫の変化でしたっけ?」

タブラは頷くと既に造って居たトカゲ人形に、翼や爪のパーツを付け加える。

ただそれだけのことだが、モモンガ達のリアルではそんな事は不可能だ。もしかしたら、ここの現地民は人間に見えても別の生命体なのかもしれない。

「もしかして、参考例があればリソースの消費や安く。無ければ多く消費してしまう?」

「その通り!。そして早い段階で『必要な能力』を得られなければ、次の試練カンストには間に合わない。ネットで調べれば簡単なことでも、手探りではちよつと面倒だよね」

ちよつとどころではない。

仮に10レベルが最初のカンストだったとしよう。そこまでの成長段階で何かしらの能力を手に入れなければ、その壁を突破できない。仮に手に入れても、次の壁までに新しい能力が手に入らなければ? 15か20か知らないが、やはりそこで成長は終わるのだ。しかも自分の分野に役立たねば、成長しない可能性すらある。

「まあ最初は良いんだ。筋肉とか、魔力とか、そういうので構わないからね。タレントによっては効率が凄く変わってくるし」

「というかタレント次第ですよ。戦闘に有利な能力とかだと、最初の幾つかの壁はアツサリ越えそうです」

モモンガはそう言いながら、ふと首を傾げた。

ではレベル性の良さとかは、どこに関わってくるのだろうか?

「あれ?。レベルがあつて何か得するんですか? そりや目安はできるだろうか……」

「それこそさっきの参考例だよ。アーキタイプアキタイプの系統があれば成長し易いと思わない? あとクラスなんてモノがあるなら、それ用のタレントも出来て来るだろうしね」

タレントで特殊能力を得る場合に、クラス関連の能力を得るかもしれない。

それは筋力や魔力が強化されることよりもレアだろうが、それでも戦況を変化させるような能力よりは出現し易いかもしれない。もちろん一定以上の能力ばかりの可能性もあるし、完全ランダムなだけでハズレ籤も存在し得るだろうが。

「もちろん正解かは判らない。だけれども、そう考えると凄く納得が行くんだ。レベル性は効率の良い型枠であると同時に、新しい制限でもある」

「納得は難しいですが、理解はしました。ということは新しい職種に關しても、意図的に情報を与えればいいんですね？」

参考例がある方が、そっち方面の能力を得て進化する可能性が高い。

そう考えれば色々読めて来ることもある。先ほどタブラが言った弟子に付いてだ。

「だから弟子に学校を造らせたんですね？　じゃあ俺も欲しい職種があったら、そのお弟子さんに頼めば良いと」

「その通り。じゃあこの件は終わりにしておこう。……時間的にもそろそろアレについて話すか」

そういつてタブラは苦笑を浮かべると最後の話題に付いて述べ始める。

それは彼をして怒りや絶望に叩き込み、そしてモモンガにも同様の思いをさせる物であった。

●造物主の可能性論

湧き上がる感情を押し殺すためタブラは息を吸い込んだ。

今回のことでシズにどんな影響が出るかも判らない。シズ・ベースで再統合される筈だが、場合によっては記憶の一部を弄る必要があるだろうか。

「造物主の可能性に関して、前は竜王やタレント持ちについて言及してましたよね？」

「うん。だからそこは削っておこう。そのレベルならば凄い智慧があっても、死んでる可能性が強いし」

ユグドラシルからプレイヤーを呼ぶ必要性。

そのキツカケが大事件である可能性や、そうでなかったとしても八欲王の狼藉もある。人間の場合はタレントがあっても死んでるだろうし、竜王であつてもとつくの昔に召喚の代償を合わせて死んでる可能性は高い。

「それらを除くと可能性は三つ。こういう都合の良い能力を持った世界を造ることができるとして……一つ目は、最初から出来る存在が自分の能力を分割する、避難所というか隔離空間」

「あー。イベントボスが自分の腕を千切って、悪魔の將軍を造るみたいな感じですね」

イベントボスで偶にあるパターンで、神に落とされた邪神が魔王になるパターンだ。

自分の能力を分割して、似たような能力を持つ部下を造る。特化する場合は剣を持つ右手から攻撃能力を持つ魔将が、盾を持つ左手から防御能力や復活能力を持つ魔将が……など。

これらはイベントを通して一貫した特性を持っている。

魂や血を原料リソースに更なる部下を造ったりするのだが、やはり似たような能力に成ることが多い。

「それが一番ありえるというか、そうであって欲しい穏健なタイプで、この場合は無視していい。我々が収穫されない限りね」

「まあ俺達はその立場に成るのはゾっとしませんね。呼び寄せられて殺されたんじゃない」

言いながらモモンガは現地民に対して冷淡なことを思い出した。

ガブリエツラ達のように関わり合った人間はともかく、関連性も相互利益も無い相手はどうでも良いと感じてしまう。それこそ黒の叡智で生贄にすることも躊躇わない様に。

「次に許せる限界範囲なのが、神々の宮廷があるパターン。我々の努力を何処かで見守って笑って見てる場合だ」

「それ許せるんですか？ まあイベントで偶に見ますけどね」
大抵は叩き潰してきた。

當時を思い出しながら、上位巨人の連中はウザかったなあと思いつつシムカ付きに陥る。おそらく中の人は運営なのだろうが、場合によってはNPCを通して交渉もできた。タブラが許せる限界だと言っているのはその事だろう。

そんな事を考えながら、先ほどからタブラが何度もらしくくないことを口にしたりにしているのを思い出した。言いようのない不安がモモ

ングの元に蘇る。もしかしたら一部NPCの様に……。

「最後に……。この世界のリソース全て、あるいは我々の体がコンピュータ制御のデータ。または性能の高いドローンでしかない場合」

「……………えっ」

今、タブラは何と言ったのだろうか。

シズには相応しくない怒りの顔で、何を言っていたのだろうか。モモングは思わずもう一度聞き返した。

「タブラさん？ そんな筈は無いでしょう？ だって幾らクソ運営だって……………」

「ああ勘違いさせてしまったね。ユグドラシル2という意味じゃない。可能性はゼロじゃないけれど、ちよつと違う」

否定の言葉に安心する自分を感じると共に、背中に流れる汗の感覚は消えない。

ありもしない冷汗が中々消えてくれないし、こんな時に限って心の平穏化が起きないのだ。まあこれだけ静かで不気味な不安では、徐々に流されていくのだろうけど。

「私もこの考えに至った時、真っ先にソレを疑って、色々試したとも。MPの無駄使いと知ってもなお、記憶を探ったりね。安心して欲しいのは、ゲームにしては思考が複雑過ぎる」

「流石にそんな訳ありませんよね。そうか記憶を探るか……………そりや弄れるんだからできるよな」

プログラムだとすると、多様性が豊富過ぎる。

それぞれパターンで造られてして居るとしても、思考ルーチンでは取まらないレベルなのだ。幾らなんでもこれだけのパターンがあり、更に複雑さを持って発展・継続。時には妙な方向に思考が飛ぶのはありえないだろう。

そんな事が可能なのは、あくまで矛盾を抱える人間くらいのものだ。

「ではなんでタブラさんは不満があるんです？ というかゲームじゃないならデータとかあり得ないでしょう」

「あるさ。例えば見知らぬ惑星のテラ・フォーミングに送り込まれ、企業の代わりに適当に宇宙人達の生活に介入させられているとかね。……でも私が不満なのは、そんなことじゃない」

愕然とする話だが、タブラ成りに根拠があると言う。

その理由が『そういうゲームやアニメがある』というのだから笑えない。ちつとも笑えない理由だが、理屈としては可能性がそれなりにあり過ぎるから、なお笑えなかった。

「もしそうであるならば、何故ひとこと声を掛けてくれなかった！もしそうならば最初から協力しただろうに！」

「それかよー」

思わずツツコミを入れてしまったが、ある意味タブラらしいとも言えた。

同時にドン引きするほどの熱の入れようは、もしかしたら彼もまた人間を止めつつあるのだろうか。他人を操ることが愉しくなってしまうっている？

「おつとすまない。思わず熱を入れてしまったようだね。ともあれ我々は警戒しつつ、造物主が居た場合に備えるという路線には変わらないと思う」

「切り替え早いですね。……まあ何時もの事ですけど」

時間が来たのだろうか、タブラは再び神妙な話し方に戻った。

おそらくは自分で辿りついた推論に白熱し、可能性論に激怒して居たのだろう。とりあえず話半分聞くことにして、残り半分で真面目に取り合うことにする。

「まずは分担して記憶を探り、行動パターンを見守っていこう。それでユグドラシル2でないかは簡単に把握できる。その上で今まで通り戦力拡充かな」

「調べるのは百や二百の例じゃ駄目だろうなあ……。でも問題なのは神々の宮廷なり、企業の手先のレベルを越えられるかってことですよね」

レイドボスは120〜140とか普通に居たし、造物主の軍勢がそれを下回ることはいらないだろう。

操られるのは良い、まだ我慢できる。

しかしそれもまた、自分達が創生計画を乗っ取ることができればの話だ。教授から聞いた汎例調査の話の思い出しながらモモンガはタブラの最後の言葉を待つ。

「と言う訳で私は活動圏を広げる為に海を渡ろうと思う。モモンガさんが何番目にこの記憶を受け取ったのかは判らないが、連絡は弟子を通した方が良いだろうね」

「……これが二つ目じゃないのかよ。まあいいや、できれば弟子の名前だけでも教えてください」

随分と順番を飛ばしてしまったようだと思いつつ、先ほどの推論が飛躍したモノであろうと当たりを付けた。

つまり自分は途中の理論をすつ飛ばして結論を聞いたということであり、同時に過程が違って居れば別の推論が聞けたという事でもある。

「言って無かったっけ？ 彼の名前はフル……」

「をーい！ 最後まで言いたいことだけ言っただけな。お疲れ、シズ」

疲れたのか最後まで名前を口にする事は無く、クタリとシズが眠り始めた。

前はこんなことは無かったので、暴走するタブラのテンションに付いていけなかったのだろう。

モモンガは少女に毛布を掛けてやりながら、聞いた情報を元に、どう文明へ介入をしようかと途方に暮れるのであった。

良くも悪くも、これが彼らのルネサンスである。